

や、お珍らしい方、まア黒田さん其後どうなさいましたの、少しも入らツしやいません事ね、しかし御機嫌よろしく、また存じながら大變な御無沙汰を致しまして、是非とも一度、伺はなくツては濟まない理由で御坐いますが何分、貴君、かやうな首枷が這入ツて居りますからねエ、ホ、ホ、これ坊や、久しぶりの伯父さんが來なすツたよ、丁寧ていねいに低頭おしげをなさい、大きなツて御世話になるんだから、さうだよ、も少し丁寧ていねいに」

わざと妻女さいぢよに寸隙すんきなき慇懃いんぎんの挨拶あいさつせられ、また今年やうく丸三歳まるみつの小兒こどもに愛らしき頭かうべを下けられて、うツかり手土産てみやげにも心付こころづかざりし黒田くろだの苦しさ、柳島やなぎしまの腹癒はらいせどころか、炮烙ほうらくの刑けいに處しよせらるゝ心地こころち、「いやはや、恐縮おそろしく々々、さんざ世話せわになりツ放はなしで、ひよツこりと來た奴やつですよ、唐突だんげに噛み付かみついて貰もらはないと被かつて來た面の脱ぬぎやうもない次第しだいで、ハ、ハ、ハ、しかし坊ぼうは急に大きくなりましたな、同じ巢すから這はひ出した汐入村しほいりむらの一味いみで子寶こたからを持もつて居ゐるな

上田うへだばかりだ、世よの中に多少たせうの不足ふそくあつても仕方しかたがない、幸福かうふくの神かみは第一だいいちこよに宿やどツて居ゐますぜ」

吐鳴ひなツても喚わめいても心の底こころそこに一物いちもつのない天真爛漫てんしんらんまん、その上田うへだが不在ふざいと聞いて猶更なほさら出るにも出られぬ黒田くろだ、内兜うちかぶとを見透みすかされし妻女さいぢよと談話はなし甲斐がひのない三才兒みつごを相手あひてにしながら、ちくちく眞綿まわたの中なかより針はりもて刺ささるゝが如ごとし、

「上田うへだ全體ぜんたい、今日けふどこへ行いきましたな、時に吉田よしだまだ來きませんか、近々きんきんあの林町はやしちやうを出でて、ここへ引移ひきうつツて來るやうに聞ききましたか」はい、さういふこつてしたが、何なんだか急に差支さしつかへがあつて、それで貴君あなた、この四五日にちは良人たも絶たえず林町はやしちやうの方ほうへ往いツて居ゐりますよ』はてな、その日ひにも決行けつかうするやうな勢いきほひだったが、急に差支さしつかへがあつて、加之しかも毎日まいにち、上田うへだが出掛でかけるとは「實じつは黒田くろださん、妾わたくしも不審ふしんに思おもツて居ゐるんですが貴君あなた、それに就ついて何か御存ごぞんじ御坐ごぞいませ

ンの『いや、知りませんな、過日、ちよいと其相談を聞き嚙ッたばかりですから』おや、さうですか、しかし黒田さん、手前方を御出なすつて凡そ小一年も御目にかよりませんが、此ごろは貴君、大層お氣樂な、御陽氣な暢氣な意氣な御身分さうで御坐いますねエ、さぞ御愉快なこつて、ホ、ホ、、『や、こいつア頗る閉口頓首、ぎやふんとまゐりましたね、結局その馬鹿さ加減が意外の御無沙汰をする理由で、なアに襦袢を纏つても例の大面であられる境涯なら、あれほど世話になつたまゝ脚の道ぢやア居りませんな、ハ、ハ、ハ、それ一切いはぬ事、なけ無しの鼻ツ柱を捻ぢ切られるやうだ、さうでなくつても、をりく上田に出喰はして充分、もはや申分のないほど遣られて居ますよ、ハ、ハ、ハ、』だつて貴君、宜いちやアありませんか、何を爲すつたつて別段、お手柄にこそなれ、ぶらくと立派な方が無職業の今この世の中で御自分の全盛を貴君、そこまで卑下なさる事がありますものか、せめて良人が貴君の

半分か三分一も、浮世氣の捌けた働きが御坐いますとねエ、妾なんかも、どれほど安心するか知れませんに、まだ貴君あの通りの頑固で困りますよ、全體どうすれば世間並に立てる人でせう、何卒その呼吸を教へて戴きたう御坐いますよ』そりやア細君、あんまり残酷だ、實ア今朝、さんざ川上に骨を抜かれてさ、一方の血路を開くや否、やうくこゝまで遁け伸びて来たところだ』おや、柳島へも往らつしやいましたの、つい近くで居りながらかういふ始末ですから月に二度か三度か、やつと關の山で伺ひますよ』そいつが半年ぶりに關の山の十五六も飛び越えて忽然と出かけたんですからね、やられたく、以來どこへ向いても流血淋漓の體ですよ、ハ、ハ、ハ、』なアに貴君、皆さんが貴君一人の御出世を羨んで、わざと喧嘩腰になさるんですよ』出世、御出世たア細君』御出世ぢやアありませんか、失禮ながら手前の二階に在らした時の事を思へば、どれほど御出世なすつたか、良人が無理に吉田さんを引

張ッて来るのも、やはり貴君に、あやからせたいんでせう』

ますます激しく切り込まれ、いよく手厳しく喰ひ付かれて、黒田おもはず半泣きの苦笑ひ、なるほど男兒いやくも食客的となつて世帯唄アの世話になるもんでなし、どこまで意地わるく執念深いとか苦しませぬの策に小兒の頭を撫でながら遁け出さむとせし門口より主人の上田力、『やア此奴また、こゝへ來てるな』

前後に敵をうけて進退こゝに谷りし體、されど残酷なる背面の敵よりも聊か頼み甲斐ある前面の敵に對うて、押し戻すが如く門口へ飛び出しながら、振り返つて半は遁け腰、『吉田まだ來ないさうだな』それどころかい、大變な事が出來たんだ』何、大變な事、どういふ事が』貴様に言ッて始らないこつた、しかし今日どこへ往つた、わざ／＼乃公の家へ來る筈アなからう』實ア柳島へね』川上のところへ往つたア、此奴また餘計な事を饒舌つたな』いや決して、

あまり久しく無沙汰したからさ』嘘を吐け、過日あの林町で喰はしたんだもの、あの様子を黙ッてる奴か』ハ、ハ、しかし例の土で作つた釣鐘だ、いくら叩いても音がなからなア』川上ばかりぢやアあるまい、貴様また何か、乃公の唄アまで怒らしに來たな』どう仕て、どう仕て、それこそ反對だ、ぎゆうといふ目に逢はされて今こゝへ飛び出したばかりだ』

門口と家内とは僅に格子一枚、居ながら差覗くが如き妻女の聲として、『お二人とも其處で何を仕て在らッしやるんです』きくや否、黒田おもはず一時に目鼻を寄せて、『あれだ、あれだよ、君のためにやア微妙の音楽か知らないが、僕の身に取ツちやア食客の時代から、あの聲を聞くと等しく一種異様の感に打たれるね』馬鹿ア言ふな、兎も角、も一度這入れさ』這入るがね、どうか身體に熱の出ないうち放免して貰ひたいもんだ』

門口へ押し戻した奴、また家内へ押し戻されて、しぶ／＼入れば妻女まづ良人を迎へての笑

使ッて見ると、案外うまく仕上げるんだがなア『いえ黒田さん、平生は兎も角、いづれまた御相談を願ひに出るかも知れませんから、その時は妾が』よろしい、何でも斯でも役廻りの悪い事ア遠慮なく持つて来て下さい、その段は無頓著の平氣面が一徳で、思ひの外に早く埒のあくもんですよ』

上田、苦しげに病める猛牛の呻るが如き聲、『おい黒田、まア歸れ、歸ッてくれ』

其九

花ならば春の梢に芳香ほつと含みし蒼一輪、よし思ふ人の急ぎ行く歩を停め得ずとも、浮世萬人の途上に競うて賞美さるべき筈を、あはれ無残や不意の嵐に逢うて、まだ咲かぬうち蒸の生際を吹き折られたる心地、

やうく、小石川の病院より我家に歸りしが、なほ左の足首を板に挿まれ布に巻かれて、いき

いきと張り切りし眼を睨重けの曇り勝に閉ぢつと、わざと解きし烏田の亂れ髪を雪の富士額に振りかけながら、重ねし夜具の上に死せるが如く身を横たへしまよの風情、動かねば疼痛なけれど人知れぬ心の悲歎に自然の色艶を失うて、いよく眞白に冴えたる顔面、如何に生涯の行末を涙に葬りけむ、意匠を凝らせし名工の大理石に刻めるが如し、

まだしも男の子ならば兎も角、あたり十七の我娘を半殺しにせしかと、枕頭には猶さら堪へぬ涙の母親、おろく附き纏ひながら聲を潜めて、『ねエお春や、不意の災難といふものはね、生命を取られたッて仕様がなインだから、まだ和女、それで濟んだのは運の強かつたんだから、シツかりと氣を持つて、第一あの上田さんが毎日々々、あの大きい身體を小さく仕てさ、却ッて氣の毒なやうだよ、また吉田さんが和女、わけて此ごろの御深切は實に、全く親身も及ばないほどだよ、たとひ、假令どうなッても、癒りさへすれば上田さんが、キツと

身に代へて御禮をする事があると仰しやツてね、また吉田さんだツて、あゝいふ方だから決して和女、變に氣を落しちやア不可よ、宜いかへ、お春『おツ母さん、妾、あの時、なぜ一氣に死ななかつたかと、口惜しくツて、もし此まゝ跛躰にでもなツたら、どう仕ませう』大丈夫だよ、よし和女、萬一、萬々一さうなツたツて、あの上田さんは吉田さんの兄様も同じ方だらう、ね、さうして吉田さんが和女、宜いよ、和女を産んだ母が附いてるから』だツて、おツ母さん、跛躰になツたら妾、生きて居ませんよ』えゝ忌な事をいふ子だねエ、縁起の悪い、これほど母がいふに和女まだ、そんな馬鹿な、つまらない事を、するだけの心配は和女より母の方が、いくら仕てるもんか考へて御覽な』

思ひ過ぎて思はず高く母親の叱る聲、口惜しいやら悲しいやら娘氣の一筋に夜具へ喰ひ付いて泣く聲、廣くもあらぬ上と下との天井板一枚に、さらぬも針の席に坐せるが如き吉田雄藏、

堪へ兼ねて靜かに降り來りぬ、

『どうです、少しは氣分が宜いやうですか』はい、有難う御坐います、もう貴君、お醫者様も歸ツて養生が出來ると、仰しやるくらゐですから、しかし御承知の我まよでね、ほんとは困りますよ、どうか御迷惑でも貴君、何とか一言、叱ツてやツて下さいましな』いや、どちらを、どうとも言ひ兼ねますが、實は濟まない事を仕ましたよ』だツて吉田さん、さう貴君が何も『いや、上田も僕も同じこツてす、しかし女主人、あの上田はね、ありやア外貌に似合はない氣心の優しい律義一片な男でね、わけて自分の過失から斯ういふ事になツて、それを毎日々々あの通り來たのは、あの大きい身體が瘦せるほど苦しがつて居ましたよ、ですから甚だ勝手がましいやうですが、昨日かぎり、もはや病院より歸るやうになられたを幸ひ、當分まづ來なくツても宜いと言ツてやりました、その代理に女主人、上田の盡くすべ

き事は僕の責任で、いはど當然、二人分の心配する理由です、と言つて何の役にも立ちませ
ンがね、出来るだけの事は、する覚悟ですよ、どんな用でも御遠慮なく、打明けてね、使ッ
て貰つた方が却つて此方の安心ですよ、『この和女、お春、今、吉田さんの仰しやる事を聞い
たかエ、あれまで言つて下さるんだもの、しつかり氣を持ち直して、有難く思はないと罰が
當るよ』女主人、さういはれると猶更辛くつて我々の立場がなくなりますから、どうか通例
の言葉で、お春さんの氣の靜まるやうに願ひます、もし我々が女でもありやア、また枕頭
に付き切つて手の届く介抱の仕やうもあるんですが、わけて無器用の男二人で、それぢやア
却つて御本人のためになるまいとか差控へてる事もありますよ、しかし上田は勿論、この吉
田雄藏だつて、まさか今このまよの貧乏書生で、いつまで惘然も仕て居らない覺悟ですから、
他日また或は、どういふ場合に、どういふ事で、今日の萬分一を報ぜられないとも限りませ

ンよ『お春、何とお和女、御挨拶を仕ないかね、身體は動けなくつても口は聞けるだらうに
さ』『なアに女主人、餘計なことだ、時に今日ちよいと上田の家まで往つて來ますから、すぐ
歸ります』『おや、さうで御坐いますか、どうか上田さんに宜しく、また御安心下さいませやう』
二階より降り來りし吉田の聲音を耳にするや否、そつと寢ながら枕の顔を反けて夜具の襟に
半面を掩ひつゝ、如何に言はれても慰められても、無言のまよに絲ひく如き眼を閉ぢしが、
その吉田の立出でし後、やうく身を動かしての小聲、『おツ母さんは自分の子より他人の方
が大事と見えて、いつも吉田さんの前では妾ばかり、叱つてさ』『馬鹿な事いふよ、自分の子
を捨て、他人を大事がる親があるもんかね、やはり和女の爲を思つてるからさ』だつて、吉
田さんなら、まだしも、わざ／＼あの上田さんに、こんな目に逢つた上田さんに、宜しくの、
御安心して下さいの』『わからない子だね、うては響くで、浮世の義理人情、そこが却つて、

猶さら和女のためだよ』和女のため、和女のため、どこまで妾は、和女のためで叱られるんでせう』また妙な事を言ひ出すよ、さう理窟が言ひたいなら何故、なぜ吉田さんの居なすった時、言はなかつたんだよ』理窟も何も、いひたい事はないんですが、妾おッ母さん、かうなつて』さ、それが今さら、かへるかね、だから』だからつて、妾、口惜しいもの、こんな身體になつて』その口惜しい、悲しいだけの事は、あの吉田さんが、きつと必ず、いはなくつても充分、呑み込んで在らつしやる方だよ』折しも往來を驅け行きし人車の音、俄に停りて三四間の彼方より我家の門口を引返しつと、轆轤を卸すや否、格子戸がらりと内に入りし體、母親おもほす起つて障子を引き開ければ、只一度ながらも無遠慮の饒舌と梯子段の立往生とに見忘れぬ人、『おや、入らつしやいました』女主人、過日お邪魔した黒田といふものです、吉田ア居りますか』はい、吉田さんは生憎、只今』むと不在ですか、いや彼の居らな

い方が却つて宜いでせう實ア女主人に少々』軽く門口を振り返りて車夫より受取りし重たけの菓子折、二尺四方もあらむかと思はるよを新聞紙に包みしまよ、『つまらないもんですが、ちよいと來たまでの印です、娘御の枕頭へ置いて下さい』いひつと自己が家に歸りし如く二階へ上りゆきぬ、

初對面の時といひ今日の體といひ、あまりの無遠慮さに呆れながら、この菓子折を娘の枕頭へといふからは、聞き捨てならぬ友達甲斐に見舞かたく訪ひ來し人と、煙草盆やら茶盆やら兩手に持ち添へて二階へ上り見れば、はや我物貌に吉田の坐蒲團を敷き込んで机に背を凭せ袂よりマツチを取り出しつと煙を天井に吹き上げぬ、

『や、女主人、忙しい中お手を止めて嘸、御迷惑でせう』どう致しまして貴君、また只今は結構な御菓子も』なアに禮をいはれるくらゐなら、まだ少しは持つて來るもンもありましたが

ね、たゞ車上の途中からさ、時に女主人、娘御が大變な事で、加之も上田が、あの上田の奴が出来たと聞いて猶更、實に濟まない理由ですが、おひくくと宜しい方ですかね』はい、有難う御坐います、いえ貴君、全く不意の災難で何も別に上田さんが、却つて上田さんや吉田さんの御心配なすつて下さるのが、お氣の毒で御坐いますよ』さういはれちやア我々、いよ／＼挨拶に困りますが、どうか其邊で、諦めて貰ふより外に仕方のないこつてす、しかし上田め、とんだ事をしましたよ、元來ありやア身體の割合に案外、小兒めいたところのある男で、また今日の時勢には女主人、わざ／＼生まれて來なくつても宜いほどの馬鹿正直でね、その案外な小兒めいたところと當世不向な馬鹿正直の點と一時に出喰はすやうな事があると彼奴、をり／＼狼狽へて本意にもない失策を出來しますよ、わけて此度の如きは彼が生涯の大失策で、つまり大切な出世前の他の娘を、こんな事にして仕舞つたのですから、實に本人

あの氣質で五六年の壽命は確乎に縮めましたらう、また吉田も御承知の通りの人間ですから、決して世間普通の友達が過失を仕たやうには思つて居ませんよ、もしこれがため目下、將來どんな事になるとも、口にくそ出しますまいが、必ず卑怯に遁足を踏む如き片々たる輕薄な奴ぢやアないですよ、だから女主人、どうかね、この邊の理由を、よく娘御にも得心なさるやう言つて下さい、この黒田また平生は兎も角かういふ時には世間普通の友達でない覺悟ですから、わけてあの上田とは多年の間柄、加之も互の氣心が違つて年が年中、まるで犬と猿のやうに喧嘩面ばかり仕て居ますがね、偕どういふもんか不思議に離れられない因縁のある交情ですから、その上田に付いて起つた過失上の始末は随分、男として身に引受ける決心です、しかし決心の實行には僕よりも差當つて吉田に適當な、いはゞ行ひ得らるべき都合の宜い事もあるかと思ひますから、實は其、その相談かた／＼、いや内談に來たのです』

折も折とて猶さら迷惑の客來と思ひの外、丸く打解けし浮世の人情に行き届いたる言葉の端端、此方に言ひたき心の底を露も残さず汲み取られて思はず膝を進めぬ、

「まア貴君、わざく恐れ入ります、さういふ事で御坐いますれば、手前より伺ひますもの」
「ハ、、來られては少々、自慢の出來兼ねる境涯ですよ、また當然、此方から足を運んで來べるき筈のモンです、ところで女主人、僕はね、上田や吉田と違つて萬事、この通りの開けツ放して、無遠慮に露骨に自分の思つたどけ相手かまはず饒舌る男ですから、その覺悟で事の結局を聞いて貰はないと困りますよ、よろしいか、實ア毎々この流に餘計な輪をかけて毒口を叩くので、あの上田や吉田に嫌はれるンですよ、ハツハツハ、、『なアに貴君、いづれも捌けた方は皆、さうで御坐いますよ、ホ、、『うまく捌けて居りやア宜いが、わるく解け過ぎて結び目のない奴だから困る、ハ、、戯談は俵置いて女主人、手ツ取早く話さう、

今更お世辭をいふ理由でもないが、實際あの美貌だもの、養子を取るも嫁に出すも相手は此方の選取り好み次第で、いくら高く止つても先方から飛び付いて來るやうに出來て居た娘御だが、現在かういふ事になつた以上は、自然また已むを得ない成行で、さう濟まし切つても居られまい、かと思ふ點がありますね、『かう申しては何だか、お言葉に付いて恨みがましい事をいふやうで御坐いますが、實は貴君、それでね、どのくらゐ心配いたして居りますか、無事で居てさへ、あの通り人様の中へ出しかねるほどの我まよものが、もし、萬一もし躰にでもなりました上は猶さら以て『や、そこだ、そこだ、それに付いて來ンですがね、どうです、お氣に入るまいが、いッそ思ひきつて、吉田の嫁に下さらないか』黒田さん、いえ黒田さん、甚だ失禮で御坐いますが、それは貴君、眞實の御相談で御座いますか』外の事と違つて、これが嘘に話せるこつてすか、苟も人事一生の大禮、まして無遠慮に一皮を剝いて

いへば、まづ不具になるを承知で貰はうといふ此方の料簡です、實はね女主人それ／＼今でこそ別れて居ますが、もとは我々多年の一つ穴から苦學難行を経て来た兄弟に等しいもの五人あつて、上田も吉田も僕も皆そのうちの一人です、しかし吉田が最も年少後進で、また最も眞面目に謹直に浮世の波瀾なく修學したもので、兎も角これが五人の後殿に出ようといふ人物になつて居るんです、だから本人も其覺悟で、なアに現在そのまゝ賣つても一身を過すぐらゐの代價は持つてる男ですが、まだ今後八九年は貧乏書生の境涯に甘んじて、自他ともに大器晩成を期してゐる折柄、ごよは少々、いひ憎いが女主人、あの頑固で正直一片の上田ね、彼奴、大に容を改めて娘御の美を恐れましたよ、ハ、ハ、ハ、人間木石にあらざる上田は吉田の前途に就いて頗る宜しくない障物があるといふ理由で、ハ、ハ、ハ、とところで内々、頻りに吉田を促して、いよく自分の家へ引取る事に取極めた最中、自己この一大失策を出來した

んですから、いやはや其以來ぐうの音も出さず、自分の喉には噛み付かれる、吉田には氣の毒がる、當家へは猶さら申譯なしで、殆ど滑稽の極、あはれなほど小さくなつて凋れましたよ、ハ、ハ、ハ、『まア御氣毒さまな、さう御心配なさらないでも』否すると言つても、偕かうなると俄の反動で、人一倍に恐縮する奴ですよ、そこで上田は勿論、あの吉田も實は心中、もし娘御が不具にでもなられて、これがため世間へ一身上の自由を缺くやうな場合には、寧ろ好んで、進んで、いはゞ謝罪の實行的に、迎へて以て生涯の妻にさせたい仕たいといふ決心です、しかし上田も本人も、また互に其處まで口を切つて言ひ出さないから、この事に關しては利害のない兄弟分の僕が不意に横合より一人飛び込んで、ちと勝手過ぎた口上ながら却つて御安心のため、まづ下相談を極めて置きたいんですが、どうです女主人、無論、かういふ不意の災難さへなくば網の目より手の諺で、逆も書生肌の吉田では不満足でせうが、

さて今日の不幸な結果から考へると、つまり時の相場で安く買はうといふ理由ぢアないが、さのみ男に持つて恥かしくなし、前途また今のまゝで居らない見込のある吉田ですぜ、こりやア上田のため吉田のため二人の兄弟分として最良目の味方根性でなく實際、母子のためも思ッてのこツてす』

例の辯口に喋々と饒舌り立て、後、靜に茶を飲み貰の煙を吹きつゝ、どうだ文句はあるまい、あツて堪るもんかといふ體に濟まし込めば、さらぬも嬉し涙を兩の目に浮べし母親、高を括ツて拔断の功名しに來た此横著野郎を今さら佛神の如く伏し拜みぬ、

『實は黒田さん、うちあけて申しますが、初めて吉田さんが手前方へ御越しになつた時から、内々、不束な娘でも子に持つた母心は格別、づうくしいもんで御座いましたね、もし萬一、願へる事ならばと、幸ひ小石川の或お屋敷から歸りましたのを其まゝ手許へ引き止めて置き

ましたくらゐで、それが貴君、外の方ならば兎も角、現在その吉田さんの御兄弟も同じやうな上田さんのため、かうなりましたので却ツて、何だか猶さら押つけがましう、無理往生に、お願ひの仕ようもない結果になつて仕舞ツて、どれほど残念に存じましたか、實は一人の娘を捨物にした覺悟で、泣いて居りました折柄で御坐います、しかし無事で居てさへ、あの通りの娘を、不具になつて黒田さん『いや、その心配無用、憚りながら決して世間普通さういふ吉田ぢやアない、むしろ無事で満足て華を飾つて居りやア、たとひ申し込まれても謝絶するかア知れませんが、あゝなつた以上、その有形の不幸なる可憐の缺點は反比例に無形の愛情を惹き起すべき戀の主眼となつて到底、餘所に見捨て得らるゝ男でない、のみならず彼は元來の山間見で、片々たる才子肌の都人士と違つた案外の外貌によらない不屈不撓の意地も持つて居りますから、たゞ一時の感情に制せられたり、また當坐の義理に迫つたりする筈な

く、娘御の行末に就いても長く大に安心すべき良人です『まア黒田さん、娘は何といふ有難い、冥加の宜い幸福なもので御坐いませう、あんまり勿體な過ぎて、罰が當って、若死でも致しは仕ますまいか、事實これが怪俄の功名といふもので御坐います』や、なるほど怪俄の功名、ハ、ハ、ハ、自然の洒落になつたわい、ハ、ハ、ハ、しかし女主人、何事も縁だ、さう卑下するにも及ばないが、また吉田も前途に希望のある男ですから、あまり際立って無用の形式的を急がないやう、その邊よく心得て居て下さいよ、なアに身體さへ癒りやア直そのまゝ同衾に寝かしても宜いさ、ハ、ハ、ハ、だが出帶を持つとか家を持つとかいふ事だけは暫時、ね、ハハ、これで以上まづ目出たく無事に済む結果だ、いづれ其うち、また改めて來ますから、どうか娘御に宜しく『まア貴君、黒田さん、外の事と違つて、此まゝお歸し申しましては、あまり、御迷惑でも是非、御酒の眞似事だけ』なアに其儀に及ばれるやうな氣の利いた媒介

人でないさ、ハ、ハ、ハ、』それでは貴君、横になつたまゝ甚だ失禮では御坐いますが、せめて娘にも一言お禮を『いや〜猶さら以て無用のこつた、第一また身體の動けない娘氣に顔を赤くさしちやア氣の毒だ』それぢやア萬事お言葉に甘へまして、今日は兎も角これで御免を蒙りますが、なほ何分とも此上に宜しく願ひます、しかし黒田さん貴君の御宅は『さ、そいつが聊か困るんですよ、まさか塵埃と雪隠の狭撃に逢つてる裏長屋でもないですがね、いや其うち必ず此方から出て來ますよ、ハ、ハ、ハ、』

門口へ待たせし人車に飛び乗って、其まゝ悠然たる上げ面に駆け行きしが、おもはず獨り車上の微笑を漏らしぬ、

さア面白くなつて來たぞ、いやしくも汐入村以來の五人中、あの吉田奴が只一人、野暮に濟まし込んで通さうとした甲斐もなく、やはり變な工合で己むを得ない云々の相手に喰ひ付

かれて仕舞ツたわい、加之も吉田の爲に師父の如き面をした上田の失策から一轉して忽ち跋躰の鼻アを持つに至つて、猶さら妙だ、もはや斯うなツた以上、どうせ早いか遅いか同じ結果にしても、本人の吉田と上田に相談なしの擲手から、そつと拔駟の一人極に取極めた事を知ツたら、奴等どういふ勢で向ツて來るだらう、そいつ更に一入の見物だが、當分まづ君子その危きに近よるべからずだ、ハ、ハ、ハ、ハ、

其十

吉田雄藏、そもく盆と正月の外は白き米の飯を食はざる程の山奥に生まれ、猪猿を相手にして生涯の運命を谷間の巖蔭に送るべき筈の身が、たまくと日本一の大都會に出でよ、もし此まよ一身の衣食を求めむとすれば直に求め得らるべき今日の結果、これを二十六の山間兒として人生の幸福こそあれさらに何の遺憾も不足もなし、

されど一見さらに愚なるが如く黙々として木像に等しき斯の山間兒、たゞ都の空に事なく雨露を浚いで足れりとせず、また白き飯を糞とするだけの藝能に終る能はず、さらに奮勵一番、悠遠なる前途に向うて人知れぬ心は天馬の空を奔る勢、殆ど一身の精魂を賭して他日の大器たらむとする折柄、おもはぬ路傍の落花一輪に幾何の時と心を奪ひ去らるゝかと思へば、身を削る斧の諺、これぞ正しく我がために作られたるの感あり、加之も宿志を遂げ事業を成せし曉は、身の境遇に應じ時の程度と階級に従うて、殊更無用の力を盡くさずとも居ながら正當に娶るべき筈の妻なるものを、何事ぞ人生行路の半途に我意を枉けて、いまだ門外一步の社會に足跡だも印せざる今日早く既に良人たる名を家に呼ばれむとする心中、誰に向うて訴ふべきか、まして去るべき時は去らざりし我にもあらず、その居るべからざるを知ツて去らむとせし一

剎那、たま〜我この額に思はぬ不意の疵をうけて遅れ、やう〜癒えて意を決せし時は再び思はぬ不意の火災に妨げられ、いよ〜我みづから我を叱咤して身を起せし時は、不幸また我を思ふ我友の過失に制せられて心ならずも竟に今日とはなりし我、もはや去らむとして去るを得ず捨つるに捨て難き自然の結果を見れば、あゝ我こよに今この女を妻とすべき運命の外、如何に忍ぶも謀るも人力をもて竟に遁るゝの道なかりしか、

わけて天生の名花そのまゝ元の美貌なれば、我一人こよに無情の木石漢となるも、必ずや世間萬人の競争場裡に賞美さるべきもの、されど今日、その花の色香を我ため我友に踏み潰されしかと思へば、もはや世間萬人の捨てゝ顧みざるもの、我一人これを拾はずして誰か其涙を汲むべき、

さても運命の神に弄ばれしか、但しは斯くなりし自然の情縁に繋がれしか、おもはぬ花の一瓣を損じて滾れし露の雫は、恐るべし音もなき木像の腸に深く染の込みぬ、

丸裸のまゝ二十貫目以上といふ大兵肥満の男が、風さへ厭ふ十七の處女、加之も綿の如く柔かに眞白き左の足首へ力み返つて落ち來りしほどの大怪俄、いづれ満足には濟むまじと諦めながら、もしやと思ふ心の窓に引かれて朝夕の神に祈りし甲斐もなく、やう〜苦痛は去りて醫術の及ぶかぎり療治の行き届きし後を見れば、果して女一代の秋風蕭殺、あはれや竟に生まれもつかぬ跛躄となりぬ、

人目に立たぬ鬢の毛たゞ一筋を抜かれてさへ、花に嵐の身を斫らるゝ如き娘氣が、悲しや色も香も一時に失うて生涯の不具となりし事、はや浮世に生きて甲斐なき心地、いかに口惜しき涙の淵瀬に沈みけむ、

いよく今日こそと醫者の言葉に許され其身も思はず病床を離れて、こはく簞笥の角に取
 纏りながら、そつと音なく二歩三步、淺瀬を渉る鷺の如くに踏み出すや否、わつと其まゝ其
 處に身を轉がして泣き伏せし時は、傍で見える眼の母が心は固より、わづかに天井板一枚を隔
 て、耳を欽てし吉田雄藏、滿面の目鼻を寄せて電氣に打たれたる體、一種いふべからざる總
 身の吐息を漏らしぬ、

まして其後の哀れさ、たゞ物も得いはで友なき獨り我身の不運に泣き腫したる眼元、朝夕じ
 ツと坐したるまゝに動きも起ちも得やらで、いつしか何となく力なげに瘦せし頬の邊、わけ
 て剛に行くさへ盗むが如くに恐れて餘所を憚る恥かしけの風情、をりく人なき時を窺ひつ
 つ逆も叶はぬ事と知りながら、もしやの一念に我影を振り返りつゝ歩む稽古の辛らしさ、そ
 れを見るとはなしの眼に入る吉田雄藏、猶更腸を斷たる苦痛あり、

そもく世の中に美人の数は一人にあらずして加之も世の中に我は只これ一人なり、まして
 二十六の今この時期は我一身に再び來るべからず、されば我より外になき我一身を數ある美
 人のために投じ、また再び來らざる今この時期を今に限らぬ戀のために失せむ事、五より二
 を引いて三を答ふる如く小學校の兒童に問うても利害の數を誤らざるべし、さるを何事ぞや
 苦學十年の丈夫兒この愚に迷ふかとは、いまだ事こゝに至らざりし時の吉田雄藏なり、

されど事こゝに至りし後の吉田雄藏は、その小學校の兒童も忽ち言下に答へ得べき簡單の數
 と思ひの外、今ぞ始めて知る人智不可思議の情緣、たゞ一人の處女を過つて生涯の不具とせ
 し同情の涙ばかりでなく、また徒に自己が運命の一部を割いて何物にか供せし義侠の愛ば
 かりでなく、固より人生行路の敵とせし戀のために組み敷かれたる我でなく、さらに其他の

恐るべきものありて理外の纏綿に縛せられたるが如き心地、ほつとして夢の如し、

額の冷汗もろとも眞實の表に現はれし上田が言葉といひ、確とは聞かねど行末の慈愛を込めし吉田の言葉といひ、あの鐵砲玉に等しき黒田が言葉まで佛神の如く、此奴そもく高を括つて悪戯半分に飛び込み來りし拔駈の横著野郎と知らねば、はや嬉しく目出たく事の定まりし心地しながらも、既に事の定まりしだけ猶更遠慮勝、まして現在の不具となりし我娘を母の口より押つけがましき催促も仕かねて、それとはなしに思ひ餘りし朝夕の壁訴訟、

吉田雄藏また人知れぬ無言の心中、はや既に何をか期するところはあれど、呖りに我より振り返りて口を出すべき筈なく、加之も睡れる如き元來の自重謹慎、およそ免れぬ事に迫るか物の叶はぬ瀬戸際までは例の黙々たる木像、晝は三尺の半窓に對ひ夜は一點の灯影に頭を埋めて致々たる罷勉の體、如何に緻密の觀察力を備へたる視線中にも心の底に潜める近來の異狀は認め得られざるべし、

『吉田さん、まだ御勉強中ですか、もう貴君、よほど夜が更けて居りますよ』なるほど、このランプで油の減工合を見ると十二時三十分、そろく一時に近いやうですな』おやまア御便利な御時計で、ホ、ホ、時に此ごろは、あの上田さんが暫時、入らッしやいませんね』や、實は絶えず來たいんですよ、また來る用もありますかね、わざと當分のうち、差控へてるやうな様子です』なぜ、何故で御坐います、どういふ理由で御坐いませう』あといふ男ですから、何か、自分の氣に咎めて、見るに忍びないところがあるらしいです』さう承はりましたは、お春の事を、お氣になさるやう聞えますが、もしそれならば貴君、もう癒ッて仕舞ッ

てあんなツタンですもの、どうか是非とも今まで通り、お心易く来て戴きませんと、却つて母子が氣に咎めて、ねエ吉田さん、恐れ入りますが貴君、明日にも直接お連れ申して下さいました』そこでですよ、あといふ失策があつたに拘はらず、さう萬事うち解けて、あまり快活に、あまり氣心よく言つて下さるので彼、猶さら自己に顧みて、どうも平氣に來られないやうです、人情また上田でなくつても、かうあるべきが當然ですからなア』まア吉田さん、貴君まで、そんな他人行儀で、困りますねエ實は貴君の面前で、かういふ事を申しましては何だか、妙に、自分の勝手ばかり急ぎますやうで、濟まない理由になりますが、是非とも上田さんの御日にかよつてお願い致したい事も御坐いますから、もし御差支さへなくば、手前の方より伺ひたく存じて居りますから』はア、さうですか、さういふ事なら、なアに端書を出しませう、あれでも用があると云やア直ぐに駈け付けて來ますよ、しかし女主人、

どんな用です、ね、上田で足りる事は僕でも足りませうから、御遠慮なく』はい、有難う御坐います、が、まさか貴君、いくら押の強い妾でも、現在の御本人に向つて、ホ、ホ、實は、あの黒田さんと仰しやる方も、過日、わざと、それがため、お越し下さいましたね、大畧、思召のほども伺ひましたが』むと黒田が來ましたか、何日ごろです』さやうで御座います、まだ娘が寐て居ります時で、生惜、貴君が上田さんへ往らつしやいました御不在中、もう十日の餘になりませう、いへ其節、すぐに上田さんまで御相談に出ようか、とは存じましたが、やはり今日まで、申し上げ兼ねまして』はてね、兎も角あの黒田、わざとそれがために來たとは、全體どういふ事で來ましたね』いよエ吉田さん、どうせ、また貴君へは萬事そこまでの委しい事を仰しやりますまいが、もはや上田さんとは御内談が纏まつて、わざと御足勞下さいましたので御坐いませう』いよく變だ、實ア女主人、あの黒田と上田とは平生か

ぶだけの勉強せずに済みますかといへば、何だか大層、豪いやうですが、やはり實ア世間普通より脳味噌が足りないから一倍、仕方なしに骨を折るんですよ、ハ、ハ、ハ、ハ、『ほん』とに吉田さん、お世辭でも何でも御坐いませんが、どうして貴君ア、さう自然と御立派な奥床しい御氣性に出来て居らつやるんでせう、もし世間に貴君の御年輩で貴君の半分も事の仕上げたらしいかと思ふ人は、それこそ吉田さん、鬼の首の五個六個も取つて背負つたやうに自慢の鼻息が荒くつて、なかく眞正面からは向はれないくらゐですよ、現に、さういふ人を幾人も存じて居りますもの『女主人、もし僕の半分といへば普通一人前の四半分にも足りませぬぜ、ハ、ハ、ハ、しかし、そんな談話は止ませう、ところで例の便利な時計を見るに、もう一時を過ぎた油加減ですから』『おや、まア宜い氣になつて、自分の勝手な饒舌ばかり、嘸お蒼蠅う御坐いましたらう』『なアに、かまひませむが、そろく寝る事に仕ませう』

其十一

いよく免れぬ事に迫るか叫はぬ瀬戸際に立至るまでは、さらに動かぬ謹慎自重の吉田雄蔵も、入らざる場處に猶さら湧くが如き無用の才氣を振り廻す黒田奴が飛び入りしと聞くより、もはや例の黙々たる木像のまゝでは居られず、夜の明くるや否、上田の許を訪はむとて立出でし門口へ郵便の聲、見れば柳島の川上三吉より一葉の端書、いつもながらの文體に達筆の墨痕、飛ぶが如し、

去月初旬に突如として黒健來訪、其節の珍談中に案外の貴下を主人公として喋々いたし候へども例の蓄音器と心得たど一笑に附し去り候處、昨夜また襲來いよく以て形勢不穩の狀を報じ候、眞偽は兎も角、横網の君子同道まち入り候、荆妻曰く、今日ばかり空手では承知いたさず候との事、呵々、

かりそめにも人間の太節、いづれ打明けて語る筈ながら、思はぬ上田の失策より事ごとに至りし意外の情縁、いよく事實の表面に定まりし後の事とせしに、あの蝗蟲奴、はや柳島まで素早く飛び込んで、まだ整はぬ穂先を喰ひ荒せしかと、舌鼓を打ちぬ、

さらぬも拭ふべからざる我生涯の大過失として、その後の日夜たゞ自己の心に責めし上田力、かくと聞くや否、鷹の如き大眼球を剥き出して猛牛の如く呻り出しぬ、

『や、あの野郎、いはない事か、得て貴様ア他の鼻頭へ餘計な口を出したがる奴だから、一切これに就いて指もさす事ならんぞ、とあれほど堅く押へて置いたに畜生、のこく相手の林町へ出掛けたのみか、我々の素股を潜つて柳島まで飛び込むア言語道断、けしからん泥溝鼠だ』實に困りますなア、無論前夜、女主人から談話の工合を聞いて見ると、いッそ鐵槌的で破壊主義の方なら却つて跡の始末も簡単ですが、寧ろ我々を有難迷惑の不意打に狼狽さす

ため、時も何も關はず頻りと無鐵砲に相手を擔ぎあけて、いはど自分が一人料簡で萬事一切取極めて仕舞つたらしいですから、猶さら目下の利害上に困りますよ』さういふ奴だ、どうせ自己が勝手次第の高慢面ですんぞ好きな熱を吹きやアがッたらうよ、まして心易い柳島では猶更の事、何を吐したか知れやア仕ないさ、しかし吉田、もはや斯うなッた以上は五十歩百歩だ、氣の毒ながら、實に濟まないが、彼等母子に對して上田力を立てよくれ、せめて約束だけでも早く結んで置いて『兎も角も柳島へ同道した上、あらためて今後の御相談ませう』なるほど、つまりの持ち込み場所は川上だ、ぢやア改めて今日、柳島で一決する事にしよう』

上田と吉田の兩人、いよく最後の一決に打揃うて來るとは夢にも知らず、主人の川上三吉

また一葉の端書を投じて招きしとは顔色にも出さねば、例の黒田健次、うか／＼と三度目の横著面をさけて柳島を襲ひつゝ、今や近來の興に我を忘れし膝を乗り出しながら、そろ／＼川上夫婦の面前に傍若無人の熱を吹き始めぬ、折しも耳を劈く破鐘聲、たのむといふ上田の一聲を聞くや否おもはず飛び上つて狼狽眼の中腰に起ちながら、『さア仕舞つた、おい川上どツか其邊に隠れるところはなにか、何、ない、無いぢやア困るよ彼仙骨、かういふ時は頗る蠻勇を帯びるからな、細君々々、苟も黒田の身に取つて一大事です、さう無情に濟まし込んでは、やア無効だ、のそ／＼上つて來やがツたわい』

はや既に上田と吉田の兩人が入り來りし體に、今は絶體絶命の黒田、進退谷つて川上夫婦の間に身を縮めつゝ、葺の煙を吹いて朦朧たる中より化け損ねし狸の如く、じろ／＼無言の額

越しに見上げぬ、

目早く見て取りし上田、平常になき一種の眼光に睨みしまよ吉田もろとも座に著けば、待ち受けて満面の微笑を浮べし主人夫婦、

少々遅かつたね、端書は今朝、著いた筈だが、しかし別に大した急用でもないから、時に上田、ハ、ハ、ハ、えらい失策を仕出來したさうだな、また吉田も近來それがため、ます／＼苦樂相半の妙な境目に懊惱してるとのことだが、委細こよに注進した奴があるよ、ハ、ハ、ハ、『上田さんも吉田さんも其後は暫時、お目にかよりませんでしたが、ホ、ホ、ホ、勿論、今日に限つて是非とも何か、お土産を戴ける筈に心得て居りますが、ホ、ホ、ホ、』

上田まづ腸を刺さるゝ如き苦笑ひの顔色、『いやはや今に始めぬ由來の鈍物、竟に愚鈍の極を呈じて申譯のない大失策をやらかした、加之も其大失策を其まよ吉田の頭上へ浴せかけて、

生涯さらに一言のない理由だ』なアに皆これ意外の點から不意に起つた出来事で、自然かういふ結果に立至つたんですよ、しかし其處に蟠居せらるゝ先生のやうに人爲的の出来事で深切を盡くされ過ぎてても聊か閉口ですな』吉田、まア暫時、黙つてる方が宜い、この上田が今に取纏めた一禮をするからね、實ア四五年來、よほど溜つてるよ』

もはや面目玉を踏み潰して、苦しまぎれの胴骨を据ゑながら、自暴腹より絞り出す黒田の體、『まづ一矢、吉田に酬うぞ、僕ア君に不足をうけるどころか、正に感謝の念を以て迎へらるゝ筈に信じて居たんだ、嫌なら嫌で男らしく放棄が宜い、もし放棄なきやア結局、東よりするも西よりするも同じこつた、たゞ多少その間に時の都合と事の遅速あるのみで、どうせ君、あの跋躰を噂アに持つんだらう、ハ、ハ、ハ、さて二の矢は上田君、足下に捧げるが、たとひ四五年來の禮が溜つてるにしても、今こゝで一時に取纏めて頂戴するには及ばない、いや實は

戴きたくないから、どうか死際の總仕舞にして貰ひたい、元來この男、已むを得ない必用に迫つて筆と舌とで戦ふ事は知つてるが、かの十七八世紀時代に流行つた腕力沙汰なるもの甚だ好ましくないよ、ハ、ハ、ハ、ところで最後は當家の一對に單刀直入、きけば端書で二人を呼び寄せたんぢやアないか、それなら其事と前以て一言、ちよいと洩らしてくれるのが人情だ、そいつを意地わるく、わざ／＼黙つてさ、第一に細君の心意を解しかねるね、よし旦那殿が悪洒落に仕ろ、そこは内助の婦徳として良人そりやアいけませむとか何とかいふべきところだ、加之も人の狼狽を濟まし込んで平氣の御見物たア猶さら以て大に其意を得ない、また今さら嫌に繼子根性を起して愚癡を並べるでもないが全體、今日に限らず諸君は此黒田健次を好意的に迎へないで、常に一種の猜疑心を帯びた反抗的の觀察をするから、往々その間に感情の衝突を免れないんだ、しかし此方も直接かういふ拗ねた調子に出るからだらうが、なア

に結局、乃公を容れるには諸君の器、少々淺くツて喰み出るんだ、ハ、ハ、ハ、」
 主人の川上おもはず大口あいての高笑い、「どうだ上田、吉田、づうくしさも茲に至ると恐
 ろしいもんだね、此奴これで多少、まだ自分に宜いところでもあると思ツてるぜ、ハツハツ
 ハ、ハ、しかし汐入村以來の悪縁だ、まづ五人のうちの屑として、盜賊と人殺しの仕ない以
 上、兎も角このまゝに許して置いてやるさ、ところで聞くが如き林町の一件なら、もはや
 今さら彼是いふに及ぶまいよ、そもく、男女一切の關係より來る千差萬別は只これ縁の有無
 だ、その有無は本人の吉田が諾否に決するんだから、こゝは聊か黒田の拔駈に味を付けてや
 るやうだが、事實そこまで迫ツてりやア致し方がない、結局、なるやうにして仕舞ツた方が
 寧ろ雙方のためだらう、なアに跋躓でも片眼でも宜いさ、また上田が失策でも何でも宜いさ、
 めでたく我々が座に聯ツて一番、古風に高砂の胴間聲でも張り上げやうぢやアないか、また

其時は此奴も數に並べてやらうよ、ね、かう糞のやうに叩くもんの、たゞ眞面目を缺いたど
 けの罪で、まさか悪く思ツて仕た藝でもなからうから、ハ、ハ、ハ、」
 何としても川上三吉は流石に川上三吉、音なき風の小笹を傳ふが如き中に、その根の深く動
 かすべからざるを見れば、もはや洒々として議論も理窟も絲瓜もなし、

前後いづれも浮世の戦場に馳せ向うて、五人のうちの最後に残りし只一人、その吉田雄藏が
 心の弓勢に滿を持しながら、猶いまだ社會的の一矢も放たざる二十六の曉、かくなるべき
 自然の情縁こゝに斯くなりしものか、あはれ名玉の一端を缺きしが如き十七の跋躓を妻に持
 ちぬ、

妻を持ちし上は従うて子もあるべき筈の道理、妻あり子ある上は従うて別に一家、
 筈の道理、既に一家を保ち妻子を養ふ上は従うて勢ひ書生の境涯を脱し去るべき筈の道理、そ
 もくこの吉田雄藏が今こゝに一家の主人となり妻の良人となり子の父となりて、世の中よ
 り米鹽の料を得むとすれば、いかに前途の志望は堅く性來の品性を保たむとするも、また従
 うて多少の行路を轉じつゝ人格の變化を來すべき筈の道理、さては幸か不幸か、運命の神が
 祕密の函に藏せる一生の窮達消長、あけて二十六の曉鴉一聲に含まれぬ、

花 車

いまだ妻持たぬ當世男、十七人、いづれも年齢は二十一より三十前後の徒輩が、ある席に
 打集ひて四方山の浮世話に飽きたる後、いざや雨夜ならねど聽て添ふべき女の品定せむとて、
 座の中央に一個の函を置き、おのゝ胸に思ふ女の倂を書き付けて投げ入れぬ、
 函の中に集りし十七枚の文は、この席の十七人が神に祈り心に念じて、人間生涯の快樂は唯
 この妻にありとまで思へる未來の夫人、いづれ天女を欺き花に似たるの美人ならむが、さて
 美人にもさまざまの嗜好あり、いろいろの希望ありとて、年長の一人すよみいでと満座を見
 渡しながら、憚る顔色もなく聲朗かに讀み上げぬ、もとより番號は事の善惡に係らず物の優
 劣に關せず、たゞ十七枚のうち手にあたるを先として、をりしも其席の評者に呼ばれたるは

花 車

浪六なりけり、

第一番

年のころは十八九、色白の丸顔には富士額の毛際さえわたり、薄絹に紅を包める如き頬の艶うるはしく、眉は三日月形、目は黒目がちの愛嬌こほれて、口元りよしう閉ぢながら笑へば白き齒の一二枚に満面の嬉しさを宿らせ、しかも身の扱ひ細かにして言葉の端に物足らぬところなく、何事にも情ふかうて世上の挨拶に行き渡り、雨の夜さては風の夜の淋しき折柄は、人しれぬ一室に良人と差對うて、おほえある遊藝の一手に徒然を慰むる道も乏しからず、かつまた家に客ある時は其座にいで聊かの脱落なう、一を聞いて十を悟るを心利きたるを妻に持ちたし、

浪六これを評していふ

これは所謂る當世ぶりの才女、繁華の巷に生まれて中以下の家に育ちしものに多ければ、得るに難からねど、さて得し上は良人たるもの須らく仔細に注意して怠るべからず、何となれば、二十歳を越さぬ女の身として物の扱ひ浮世の限々に行き渡り、かつは愛嬌專一に人を外さぬ言葉を盡くすのみか、良人の徒然を遊藝に慰め、客の席にまかりいで取持萬端に脱落なしといふ、この希望に叶ふ程の女もし一步を誤らば、これ進むで牛を賣り損ふ才女なるべく退いては舅姑に一理窟いひたけの利者なるべし、また斯る才女の常とて、良人の弱味を見抜く目先するどければ自然に我意募りて、飽くことを知らず、めしつかふ奴僕下婢なども絶えず引替へ差變へて朝夕に追ひ廻す口しければ、家に入りの男女にも際立ちたる敵味方を拵へ、善惡ともに世上の批評とりぐ喧騒しかるべし、ましてこの良人たるもの一朝おちぶれて家傾くの非運に逢はば、この妻かならず味噌粥さけて末の末

まで涙の憂に件ふ貞女なりや、いと覺束なし、第一かよる女の二十歳近くまでも清淨無垢の處女にてあらむは、まことに今の世の稀有にて、兩親の膝下に未通氣を粧ふころより俳優ななどの沙汰に闇からざるのみか、用もなきに近處合壁を蓮葉あるきして、年齢に過ぎたる身の馴れやう才の發けやう、はや其所ことの若き男を意中に宿して目遣おだやかならねば、いづれ媚きし風聞の一つ二つは身に覺えあるほどの女なるべし、さればまづ歴然たる人の妻として家を治め子を育てむよりは、花柳の里に藝を賣り色を鬻ぎて持て囃さるか、但しは時めく紳士の愛妾となつて物見遊山に日を暮すこそ性來に叶ひし身柄なれ、凡てこの類の女は學者官人さては物堅き商人の娘に尠く、名高き料理屋船宿待合など一代の華奢全盛の街ふものと娘に多し、されど斯女に二分の文字を與へて三分の温雅と柔順とを加へなば、交際場裡の華となつて家を興し良人を扶くるの良妻たるも難からざるべし、

第二番

月は軒より出で、軒に入る大都會の當世生育よりは、蟲の音しけき片田舎に生まれて、舊の庄屋あるは土地の郷土豪農ななどの娘こそ好ましけれ、年齢は固より十六と二十歳までの間にして、都の手振に疎けれど女の業に一通り缺けたることなく、容貌は絶群の美形ならずとも十人並に劣らぬをもて限とし、さて嫁して後は、いよく物しづかに萬事の謹慎ふかく、見馴れぬ客ある時は奥の一室に遁け入りて我身の鄙びたるを恥づるが如く、朝夕たゞ良人と舅姑にのみ優しう情らしう頼り縋りて、なまり言葉ほつくと物拾ふが如く幼き時の有様ななどを語りつと、いつまでも浮世の下司馴れぬ眞實の色を持ち添へて、子を生めばまた其子に従ひ、生涯おのが好悪を現し得ぬほどの妻ぞ欲しけれ、

浪女評していふ、

これはまた第一番に打ッて變りし要害堅固の希望かな、人によりては斯る女を妻に持つこと宛ら石佛抱いて寐るに等しといはむが、さて七人の敵よりも油断ならぬ浮世の諺、もしこの娘を好んで妻にせば良人たるもの生涯安樂なるべし、されど茲に一事の氣遣はしきは、まよならぬ人生の榮枯盛衰、激しく寄せ來ッて、良人もし思はぬ災厄に身を落し家を破るか、但しは生涯の希望を半途に棄てて死せし不幸の跡に、親を残され子を遺されし浮世さまぐの苦勞を凌いで、よく一家の亂離敗類を憂目の中に守るの才氣ありや否や、浪六君そこちや、親里が田舎氣質の豪農なソとして見捨つべきとは、たとひ心の底に萬一を望むの計たりとも、ゆめさらく決して口に宣ふべからず、かくては天晴の男ぶりすと下りて賤しき卑劣の名を唄はるゝのみか、女房を人質に取ッて餘所の巾著を覗ふの毀謗まぬがれざるべし、

第三番

我は試みに華族の姫様を貰はむと冀ふものなりしかも、新華族は嫌なり公卿華族は蟲が好かず、ならば大名華族のうち、公侯は位すぎて實なく子男はまた少々お手輕にて希望に叶はず、まづ有徳の名聞ある伯爵の令嬢にして、むづかしき大殿すでに世を去り母御は猶ましませども凡て別荘住居、今の當主は我貰ふべき姫様の兄君、これまた取も直さず兄弟の縁を結んで萬事に便利なるのみならず、さて妻とすべき本尊の年ごろは十五か十六、勝頼を慕うた八重垣姫の蓮葉氣を取ッて雲雀山に籠った中將姫（但し佛臭きところを抜く）の優しみを添へ、恐れながら傳へき衣通姫の御美貌に合はして、錦の床に浮世の風も知らず現世に生まれ出でし玲瓏無垢の名玉、五月や菖蒲桔梗かるかや小櫻などいふ腰元衆に取巻かれて、みづからか何とやら斯うとやら唯譯もなき風情の中に、天の生せる氣高き

色艶いろつやを含ふくんで良人らうじんたる我われを大切たいせつにし、明あけても暮くれても連つれ添そひ附つき纏まとはるよ心持こころもちあよ果はたして如何いかにぞや、えよ堪たまらぬ、

浪六なろくいはく、

苟いかにも人間にんげん生涯しやうがいを契ちぎるべき大禮たいらいの妻定つまさだめに、何事なにことぞや試こころみに貫もひたしといふの一言ごん、すでに道みちを外はらし倫りんを破やぶるのみか、よしや假寓かりそめの戲事たはむせにせよ、平生ひこころ利慾りよくの念ねんに他人たにんの富貴ふうきを羨うらやめばこそ斯かる白癡たはげたる希望のぞみもすれ、赤裸はだか百貫ひやくくわんと唄うたはれて手足てあしを伸のばせば忽たちまち心こころのまとなる男をとこの身みとして、なんぞ俄にわかに及びなき雲くもを望のぞんで苦くるしまんや、たゞこれ財寶さいほうの奴隸さらい、たゞこれ肉體にくたいの獸慾じゆうよく、そのむかし下宿屋ひしゆくやの片隅かたすみに燒芋やきいもを嚙かんで描かきし妄想まうそういまだ胸むねに蟠わだかるか、さては餘所よその榮華えいわに眼眩まなこくらんで轉寐うたたねの夢ゆめに見みし面影おもかげか、評ひやうに及およばず論ろんするに足たらず、あはれ草叢くさむらに彷徨さまようて野犬のいぬの糜くそを糞つまざるの用心ようじん肝要かんえうなり、

第四番

腹立はらだしき時ときには、じつと胸むねに堪こたへて怒いかり得えざれども、悲かなしき時ときには身みも浮うくばかり忍しのび音ねに泣なく女をんなぞ床ゆかしけれ、

浪六なろくこれを評ひやうしていふ、

その美醜びしうけん賢愚けんぐをいはず、また家の貴賤きせん貧富ひんふにも及およばず、唯ただ怒いかりを忍しのべども悲かなしみを忍しのび得えざる女をんなほしけれとは、偕さても言葉ことばの簡かんにして意味いみの深ふかさよ、これを望のぞむの人ひと、もし或あるひは曾かつて女學生ぢやうがくせいの活潑かつぱつ伶俐れいりなる束髮そくはつに懲こりて今は純然じゆんぜんたる女大學流をんなだいがくりうを冀こひねがふにあらざるか、

第五番

顔かほの色いろちよいと淺黒あさぐろともよし、たゞ頸首えりくびくつきりと白しろく雪ゆきを欺あざむいて、羽二重肌はぶたへの瘦肉やせじこながら骨ほねたよぬ地藏肩ぢざうがた、黒漆くろしのやうなる髪かみの毛けの解ほどかば身丈みだけにも餘あまらむほどなるを、我われから

花車

持て餘してうるさけに引き結びたる風情をかしく、目尻や釣りて男まさりの濃き眉に剃刃かけし痕もなう、鼻筋とほりて口元に何とやらむ聞かぬ氣の色、さりとして物數いはず、いはゞ急所をついて態とならぬ人殺しの文句も出で、手足すつと伸びて身の運び慌たどしからず、かつ二十歳の上を三年四年さては五年の今日までも、心に叶ふ男なくて世に許さぬ花一輪びんと強ねし中年増、されば物ごし浮世に馴れて取扱ひ人に後れねど、しんじつ神ぞ嬉しい事には顔さつと赧むる優味を底に含んで、晴の衣裳にも綺羅を飾らで袖ほどの重ね裾を好み、つねの著類に木綿を粧へど額裏の絹赤地つけて、のりかよる意氣地の張には身を忘れ、ひきうくる心の宿には富貴も目に入らず、しかも縫針の業に長け、世間普通の讀書に劣らず、すべての事は世話女房に未通氣持たせて名ある遊女の俠を添へ、さてまた懐しう凛々しき皮肉もて包んだる女に冊かれたし、

浪六これを評していふ、

あはれ事むづかしの仰せかな、才子時に遣はず勇士知己を得ずして草の葉がくれに朗吟するが如き面影を、そのまゝ浮世の女にうつして作り出したらむかと思はるゝ節あり、まづこの所望について言はゞ、義のために死をも甘んずる俠客者流が秘藏の一女らしく、また傳へきく江戸氣質の藏前の札差なんどが落魄れて昔の榮華を夢に見ながら育てし娘にもあらむか、但しはこれ、やむごとなき御方が歌妓に生まれし女の流石に父を憚り母に従うて世の片蔭に忍ぶ風情ならむか、いづれにしても當世に得易らかぬ尤物、顔色に出ださず口に言はねど心の底には我ひとり高く思ひあがりて、ほどばしる才氣じつと胸に押へつゝ、冷かなる眼に市井巷閭の男を卑しめ、易くは活らぬ額越しに時めく風雲の富貴を輕んじて、たゞこれ情の一點にのみ脆く優しき女なれば、かよる女の良人たるは今の世に何人ならむ

か、市に利を逐ふの商人は固より嫌ふべく、肥馬輕車に乗る官人にもあらざるべく、さては一藝一能もて世に用ゐらるゝ士にもあらず、世上の風波を巧みに漕いで衆に羨まると才子にもあらず、學者、醫者、美術家、發明家、僧侶、軍人、政黨員、新聞記者、辯護士、製造會社の利物、銀行などの大株主、これ等もまた心に叶はざるべし、さればもし斯女に慕はれて百年を契るほどの男振いかならむと想像すれば、いまだ家をなさざる有爲の書生にして前途に慥なる大望を抱くの男、しかも男より所望されず我より進んで其業を扶けし後に良人と定むるか、あるは世に惜しまるゝ名士こゝに滿腔の不平を鳴らして片田舎に閉ぢ籠り、しづかに身を養ひ風月を伴とする奇矯豪骨の人に添ひたがるべし、さて妻となりての後は何、妻としては固より馨しき令閨、夫婦の情愛に己が全身の才氣を忘れて、唯これ溫雅貞淑の婦女なれども、もし人倫の變に逢はど忽ち猛然として殆ど狂し、一步踏

み損ねし 曉は白刃を閃かす怖ろしの女たらむか、

第六番

縁あれば如何なる女にも添ひ遂げ申すべく候、
浪六これを評していふ、

嗚呼いはれたるかな、さても面白う言はれたるかな、これ飽くまで情海の波瀾を見渡して人事の任意ならぬを觀するの言、浪六これに對して兎角の評なし、たゞ君が心を思へば松ふく風に琴の音しのぶが如く、君が身を思へば水の清きに月おちて碎くるが如し、願はくば圓滿無闕の婦女を得て君が百年の幸福を祈る、

第七番

富貴ならずとも職業の卑しからざる家庭に育つこと第一、父母の系統とも數代の間に精

神病さては遺傳病なきこと第二、高尚なる才學なくとも今日普通の女子教育に缺けざること第三、外にいで優美の才藻に乏しくとも内に坐して一家の經營に巧みなること第四、たとひ花顏柳腰の語に叶はずとも身體健全にして骨格皮膚の逞しきこと第五、みづから手を下さずとも庖厨の業に長けたること第六、天生の堪忍力を有すること第七、習慣の善良を損ねざること第八、すべて他人の感情を害せざること第九、まづこゝに以上九個の希望に漏れずして二十三歳のころまで品行方正なる婦女を得たし、

浪六これを評していふ、

名を棄てよ實を取るは古人も難しとするところ、ましてや今人の輕薄なる唯その花を喜んで殆ど狂せる中に、卓然この希望を抱くもの幾何かある、これ美人を得むよりは寧ろ良妻を得むとし、妻を得むよりは亦むしろ子を得むとするにあり、君乞ふ安んぜよ、正にこれ

豪傑を生むの母なり、

第八番

予は生涯さらに妻を娶らざるの決心なり、されどかの學者達が哲學上より割り出したる無妻主義にあらず、また一種の理想家が厭世の腦裡より産み出したる無妻主義にもあらず、たゞ我みづから我を奈何ともする能はざる天生嗜好の便宜上より起りし無妻主義なり、故に人間としては必ず夫妻相伴ふべきの本分も知り、いはゆる一家團樂の快樂も未だ得ざれど正に確信するの一人、固より美人を見て愛すべきの念もあり、これが情愛の人事七分を占むるの理も、たしかに奉じて更に疑はざれども、予が現世にいで父母の名を知ると共に起り、予が就學の期を得て校に上りしと共に長じ、竟に予が志の門外に走せて社會の事物に接し處世風浪の難きを認むると共に、こゝに毅然として自ら禁する能はざるものあ

り、何ぞや、曰く旅なり、あゝ旅なるかな、天外萬里の客となつて五尺の身を高山大川の間に放ち、耳目を各國の風俗に注ぎ習慣の異同に投じて、僅々たる人生の小を漠々たる世界の大に消磨し盡くさむとするの遠遊にあり、もしそれ骨を埋むる地の如きは殊に青山を擇ばず、往いて身仆るれば心ともに竭きて空に歸するのみ、何ぞ身後の榮を欲し墓前の帛慰を待たむや、胸に一卷の歴史を繙いて到るところに盛衰興亡の跡をたづね、心に萬斛の自由を抱いて東西南北に偉人俊傑の門を叩き、喜怒哀樂を恣にして進退動止を外物に煩はされず、唯これ飄々として遊ぶもの、故にまた詩人となつて世に唄ふの責なく、書を著して後世を益するの任なく、再び親戚故舊に逢うて語るの念なく、富貴利達こよに捨てよ芥の如し、されどこの宿志を果さむとすれば之に應ずるの旅費なかるべからず、即ち此旅費を得むがため日夜孜孜として尺蠖の屈に倣ふこと七年、なほ三年を経過せば或は志望の

果すに難からず、況や故國に家を成して妻を娶り子を生むが如きは、今すでに社會中等の上衣食するの餘裕あれども、予が天生の斯嗜好に供するがため七年井蛙を學んで貯へたる財を妻子に頒つ能はざるのみか、たとひ倍數の富を得て之に與ふるの幸福ありとするも、天外萬里の客となつて生涯を終るべき予に伴ふの婦女、そもく今日の世間にありや否や、これまた假にありとするも、固より王侯の旅にあらず富貴の遊にあらざるの予が、異域の寒暑を踏んで妻の骨を晒すに忍びざるなり、是に於て萬やむを得ざるの無妻主義となれり、一個の婦人を戀愛せむよりは寧ろ天下の山川に獸身的の戀愛を以て接吻せむとするものなり、浪六君、乞ふ予を痴笑痛罵して情を解せざるの木強漢となす勿れ、たゞ予が性として此快の彼快に及ばざるを奈何せむ、浪六これを読むこと數番、さらに瞑目していふ、

そもく父母ありて生まれいでし人間が、後に得たる學問の理論上より起りし無妻主義なれば、我また之に對して飽くまで争ふの議論あれども、奈何せむ、たゞ單に此快の彼快に及ばざるの天性として、事の便宜上より萬已むを得ざるの無妻主義、これを責むるの法律なく、これを壓するの學理なく、またこれを害するの力なし、況や墳墓の地を捨てて故國の念に薄きの小事もしくは愛國愛郷の念に乏しきの故を以て茲に君を論ぜざるべし、乞ふ君さらに進んで大に往け、往いて壯に驍々たる其志を逞しうせよ、人間もこれ天地の一粟粒、外に晒すべき君が一片の枯骨は内に守るべき我國一撮の土を減ぜざるべし、

第九番

もとは由緒ある有徳の數にも唄はれしが、いつしか浮世の風に誘はれて、さしもの榮華も昔の夢となりつと、さめて残るは家の形見の家紋のみなるを、母なる人いたく憂ひて病の床に臥せしほどもなう、なくは一聲ほとよぎす、ことにも血を吐く悲歎を良人や我子に引かされながら、返らぬ黄泉の旅にいでしは七年前、さて後は父が男の馴れぬ世帯に叶はじとて、やがて後添の妻を迎へしが、これぞ世にいふ繼母の手に育ちたる一人娘、さらぬも哀れいぢらしの世の中に、かなしや去歳の軒端に秋風たつころ、その父にさへ後れて残る身一個を何とせむ、なさぬ母子の淺ましき、女は母と慕へど母は女と思はぬにや、かりそめの言葉にも打叩かむばかりに罵られ、朝夕の給仕にも下婢の如く追ひ使はれて、餘所の見る目も涙の種となりつと、照る日も曇る憂目さんぐの中にも、持つて生まれし天の美形は花菖蒲、はや十七といふ露や珠玉なす妙齡に、まよしき母のいとど無情さ、よき婿とつて亡人の回向せむとは思ひもせで、人喰ふ鬼と語らひつと賣色の里に賣らむとぞいふ、おそろしの景色きのふけふならねば、果は現に責め口説いて、逃るよ道もなきの涙の淵瀬に

花車

落され、所詮うかばぬ身の因果、しらぬ浮世に汚されて苦しの恥辱を晒さむより、死して冥途の父母へ縋り逢はむの一念に、我を忘れて家を抜け出で、をりしも空には更け行く冬の月高く、下には流るゝ水の音牙えて、我を呼ぶかや小夜の千鳥の聲さへも、身に染む橋の袂の霜を踏みつゝ、小石拾うて欄干に打憑れ、おもはず振り仰ぐ眼には涙の一時雨、口のうちに南無阿彌陀佛、この曉は流れていづこの岸に倚るやらむ、あすは世上の口の端に何と亡名を唄はれむ、されば今死ねる身にも恥かし容貌風俗、帶しめなほし裾うちあはせ、雪の額にふりかよる黒漆の前髪かきあけて、戀しの父上、なつかしの母様、導き給へや待ち給へと念じつゝ、さすが現世のなごり後世のたのみ、思へば淺き一期の苔の花を、嵐も待たで我から急がむと、合掌念佛こゝに身を躍らし、あはやと見ゆる背後より、惜しや勿體なや待つたくと聲かけて抱き止めしは何者ぞ、誰にもあらず斯くいふ拙者なりけ

り、拙者この娘を抱き止めて仔細を聞き、おもはず月の光りに顔を見れば、ことしの春、櫻狩の歸途に見初めし娘、娘また拙者を嫌ふどころか、元來の美男なる上、眼前に生命を救はれし恩人、深夜に餘所の人影なけれど互に恥らふ風情よろしく、あやしの縁とか何とか憂苦の中に三分ばかりの嬉味あつて、其まゝ家に連れ歸り、さて改めて妻に持たし、また悪婆ながら掌中の珠玉の失ひし彼の繼母には、拙者より賣身の金子を與へて母子の縁を切り、これにて四方めでたしくの大團圓、

浪六これを評していふ、

これは小説家の許に食客せしほどの人物相應なる所望なり、しかも陳腐なる凡俗小説家の寫字生か或は校正兼小使に備はれ、主人不在の節は臺所に藻潛り込んで殘杯冷肴に舌鼓うちながら、房相あたりより罷りいでたる下女を捉へて揚々たる大氣焔を吐き、あはよくば

これを提けて落人筋を演ぜむとする男が、霜夜の寢覺に主人夫婦が喃々を聞いて起せし妄想なるべし、されど斯の如き可憐の境涯に陥る婦女なきにあらねば、よろしく腰辨當をつけて夜なく八百八町の橋上を尋ねまはるべし、但し巡査に見咎められざるの用心肝要なり、

第十番

予は常に我より數等の上に位せる婦女を糞ふものなり、たとひ形體は天下第一の醜たりとも、性質、學力、智識、藝能、守操、品位、系統、すべての點に於て我眼底より高尚を占むるの婦女たれば、正に全身の愛をあけて之を喜び之を敬しつゝ生涯を契るべし、論者或はいふ、妻として夫に過ぎたるは竟に一家の圓滿を缺くの恐ありと、予の説に曰く、これ未だ其一を知つて其二を知らざるの言なり、凡そ世の妻たる者が其夫に勝るの故を以て

閨門の治らざるは、これ妻女が勝れたるにあらすして妻女に附帶せる一部、もしくは妻女が嫁すると共に父母より得たる條件の勝れたるのみ、就中、系統の高きと財力の強きと美貌の稀なるを以て勝る者世間に多きがため、凡流の女は自ら叨りに高く尊大にして、動もすれば其夫を見ること婦道の外に逸するものありと雖も、もしこよに總ての高尙なる點、言を換へていはゞ、女たるものが嫁して守るべき本分の美性を有したらむには、その夫に勝れたる點なしの害かあらむ、むしろ却つて夫を扶け夫を勵まし更に夫を娛しましむる大なる理由にして、人間無上の快樂と共に天の成せる伉儷の賜を全うすべし、然るを世上の男子また多く之を忌むものは、心すでに妻を娶るにあらすして婦女を弄ばむとするが故なり、婦女を弄せむとするの不徳をもて苟も我に過ぎたるの妻に對す、閨門の治らざるは固より其分にして怪しむに足らざるなり、蓋し思ふに今日の夫たるもの、みだりに男

尊女卑の弊を極めて己より妻の高きを終身の恥辱となし、妻また之に従ふをもて人生最後の不幸となし、兩々ともに相背き相戻りて常に解けざるがため、殆ど神よりも清き男女の愛をして汚れたる人爲の競争場裡に投じ、遂には言ふに忍びざるの不倫を演じて、朝に合するもの夕に離るゝも人さらに疑はず、甚しきは昨日の夫妻今日の途上に逢うて顧みざるのみか、互に其影を罵り其弱點をあけて敵視するに至る、噫これを思へば寧ろ獸類の期を定めて孳尾するに如かざるなり、故に曰く、予は必ず我に過ぎたるの妻を娶りて、その我に勝れたるものを我全身の愛に融化し、以て夫妻ともに天の許せるかぎり人間の及ぶかぎり、あくまで伉儷の快樂を取らむとするものなり、

浪六評していふ、

これ西洋より來れる戀愛神聖の説を取つて、直に東洋今日の男尊女卑を喝破せむとするに

似たり、論ずるところ世上夫妻の多くは信にあらずして偽なるを慷慨し、竟にはその獸慾に歸するを憤るのあまり、異さらに我より勝れたる萬能の妻を得て之を一片の愛情に融和し、以て伉儷の快樂を遂けむるにあり、まことに志の皎々として清きこと玲瓏た珠玉に等しけれど、たゞ恐る、果して言行一致の美德を當世に得べきや否や、君にして之を爲すの美德ありとするも、君に伴ふの天女に似たる婦女ありや否や、なほ一步を進めて問へば、かくの所説これを西洋の書に見るを得れども、實に悉く西洋の夫妻を見るを得るや否や、もしそれ單に西洋にありとすれば東洋また古今その美談に虧からず、要するに愛は神聖にして且つ無邊廣大なれば、人事の萬端をあけて一に包含すべしといふ、其極いはゆる獸身の愛にして、匹夫匹婦の癡情に迫つて死するもの亦これ君が一唱三歎を得べきか、乞ふ善惡を社會の極端に求めずして大觀の上より打算せよ、或は君が慷慨悲憤の

念を滅するに足るべし、然りと雖も、人情紙の如きの今日、この熱腸を抱いて我まづ遂けむとするの士また果して幾何かある、語に曰く、中らずと雖も遠からず達せずと雖も近づくを得べしと、願はくは好丈夫さらに益々自愛せよ、

第十一番

拜啓、小生は元來の不文にて思ふ十分一も筆にいたし候、事相叶はず候へども、かゝる面白き席上に小生一人相漏れ候も何とやらむ無念のやうに心得候まよ、こよに少々ばかり相陳へ候、憚りながら御判讀下さるべく候、さて前刻より皆様の御注文いろく、拜承いたし候へば、いづれも後來に天晴御所望の段々、たゞ感服の外なく、また御たのしみの程も羨ましく存じ候へども、小生のみは既に妻めいたる一人の女を持て餘して、よせば善かつた舌切雀とやら、ちよいと舐めたが身の詰りと相成り、どのみちとも今さら此女の離別い

たし候事は所詮出来難き義理しがらみも御坐候故、申さば未來の希望は絶えて無之者に御坐候、あはれ御憫察可被降候、さりながら皆様の御注文は畢竟するに來年の天氣豫報と同様に、たとひ斯様の女をと佛神かけて御執心遊ばされ候とも、人間業の任意ならぬ縁談に御坐候へば、果して御所望通りにまゐり候や、このところ甚だ覺束なく存じ候、さて其段に至りては、不束女ながら既に得て友白髪までと契り候小生こそ、もはや然様の懸念もなく心丈夫に御坐候まよ、御参考のため、多年さまざまの艱難に逢ひながら猶ほ今日までも小生に付き纏ひ居り候彼が容貌氣質身分等を、こよに委細申し上げ候、そもく彼が父は舊幕臣にて三千石近き知行をいたとき、旗本ながら何の守といはれ、一時は御側御用人にも出頭せしほどの身柄に御坐候へども、榮枯盛衰の世上とて、維新後は何事も昔の夢と諦め、向島小梅の寮に引き籠り、たゞ風流三昧に晩年を楽しみ居り候處、元來の富有に

眼を注ぐ奸毒の徒輩あつて、只管ら外國貿易の利潤多きを説き、一は國家の御ためなどと
 唆し、竟に横濱まで引き出して、さんぐゝ姦謀の穴に押し落とし候へば、二三代は其まよ
 安樂に坐食も出來候ほどの家財を、わづか五六十年の間に悉く押し潰され、諺にいふ士
 族の商法、始めて目の覺め候節は奸物いづれも遁け去つて最早や萬事の手後れと相成り、
 やうく残るは横濱の本宅と小梅の寮ばかり、今更の後悔なンの詮も無之候へば、本宅を
 三千餘圓の捨價に賣り拂うて其金子を生命の綱とたのみ、再び小梅へ引き移り候節は明治
 七年の夏とやら、其年の秋に生まれし女子は則ち唯今小生の妻めいたる女にて、名を田鶴
 と申し候、

田鶴が父の相果て候は三歳のころにて、いまだ東西の分別もなき身を母の手一個に抱かれ、
 母子の外には下女と下男、主従あはせて四人の暮しに御坐候へども、わづか三千餘圓の金
 子いつまでか其まよに御坐候へき、その上に母なる人は、これもまた昔の榮華生育にて、
 眼前に飢渴の相迫り候までは奥様氣質に其日を送り、家事一切を召仕ひの者に打任せ候や
 うの始末に御坐候へば、背門の朝霜が日に逢ふ如く、じはくと消え失せて、田鶴が八九
 歳のころは既にまた小梅の住居も人手に渡り、あはれや今は門前の作男に貸せし草長屋に
 引き移り、奉公人にも暇を取らせて後は、母子唯二人の詮住居と相成り候、さてかく相成
 り候てはこれまで出入せし舊臣の徒輩も寄り付かず、猶をりく心易く來るものは古河の
 網えぬ雫を吸ふ曲物ばかりにて、果は衣類小道具までも、風呂敷一枚を翼の鳶商人に搔き
 攫はれ、門口うかがふ鷹の目の屑屋に踏み倒され、竟には其身の皮まで剥ぐ淺ましき、此
 まよ二年も経たば母子乾物とも相成り候ほどの境涯に落ち入り候處、其ころ鄰家に居住い
 たし候ものは小生の一家に御坐候、勿論小生の家も餘裕あるべき身分に無之候へども、父

母ともに健全にて少々の貯財も所持いたし、まづ無事に暮し居り候上、父は元來の俠氣にて、世の成行とは申しながら歴々の衆が斯くまで落ち果て候母子を氣の毒に思ひ、なにくれと親切に世話いたし候甲斐もなく、張り詰めし氣の弛みてや、母なる人は體て病死の後に、あはれ残りし孤兒は田鶴にて、此時やうく十三歳の少女に御坐候、されば小生の父も愈々不便さ彌増りて今は餘所事ともえ捨てず、ともかくも田鶴を我家に引取り、偕その後に親戚を取調べ聞き出して家の形見の田鶴が手を引きつと普く尋ねまはり候處、町人の成果とはちがひ、時めきし武家の一旦落ち果てしものは安外の脆さにて、いづれの親類も同じ落魄、たましく相應に暮し居り候もの二三軒はありし由に御坐候へども、利慾のため他人の少女を世話するかのやうにいはれて小生の父も憤懣いたし、さらば眼前の合力は頼み申さぬ間、この娘が年頃となつて縁につくまで、一族の義情に月々四圓三圓また一圓

にても、お心次第の積金を御手許に貯へ置き下さるべく、其間は私方にて女一通りの恥辱なきやう育て、一文半通の謝禮もつけず立派に返しまるらせむとまで、申し残して其まま泣き入る田鶴を連れ歸りし後は、殆ど我家の娘同然にて、小生は此時十六歳、田鶴より四歳の兄分に御坐候、されば小生と田鶴とは、ふりわけ髪とやら申すべき間柄にて、妹と呼び兄と呼ばれて育ち候うち、小生の父母も相尋いで世を去り、家産また衰へて詮方もなく相成り候ころ、田鶴は十六歳にて小生は十九歳に御坐候故、及ばずながら二人ともく相談いたし、わづかの遺産を親戚に預け候上、せめて其金子の盡きむまでもと、小生は是まで通り高等中學に通ひ、田鶴は人の世話にて去る伯爵の華族家に侍女奉公と相成り、元來は他人ながら朝夕兄弟可様に暮せしものが茲に一朝相馴れ候當時の心中御推察可被下候、さて後は小生も限りある些少の學育にて不自由勝に通學いたし候事故、他人の一時間

は我一日分と心得て懸命に勉強いたし、田鶴もまた奉公大事に勤め候よし、をりくゝの文通にも申し越し候うち、小生の高等中學を卒業いたし候節は、親族にあづけし學資も盡き候始末にて、この上は大學の所望も水の泡と相成り、折角の志學半途に捨て先づ一身衣食の事に奔走すべき無念さを、かねて田鶴が覺悟いたし居り候ものか、此時すでに勤めし二年餘の給金その他不時の頂戴物など、悉く身に染めて一物一文も費さず貯へ居り候金子が八十餘圓、頂戴の品は兄の許に保存いたさせ置きますると稱へて、小生が手許に運びこし候上、賣り拂ひし髮粧飾衣裳の類が凡そ百圓あまり、合はせて二百圓の金子まづこれにて學問し給へ、其うちには時機を見合はせて御主人様に事情を打明け、妾が生涯書入の給金をお借り申して、天晴れ御志を遂げさせませうと言ひ置き、其儘また別れて屋敷へまゐり候時は、田鶴が十八歳の秋にて、面影いちらしう心根ふびんに存じ、小生も人知

れぬ涙をこぼし申し候、それよりは小生の心頭さらに一段奮勵いたし、大學中にも常に優等の位置を相占め候ほどに御坐候處、不幸にも翌年の夏、これといふ不養生も不致、かつ人間の病も多き中に天か命か、忌はしき虎列刺病に取り付かれて避病院へ搔き込まるゝ身と相成り候、されば平生の朋友知己は更なり親戚の者にさへ、かゝる折から不知顔に打捨てらるゝ心細さ、業いまだ成らずして病骨を晒すの憾やるかたなく、所詮のこと助かるまじと我ながら瞑目觀念いたし居り候處、これを聞き付けて人々の諫止もきかず屋敷を飛び出し、狂氣の如く其身を忘れて駆け來しものは田鶴に御座候、かく申さば異な様に相聞え候へども、必ず死すべき小生の運命を助けしものは、醫師の手柄にあらず藥石の效にあらず、たゞ十九歳に相成り候田鶴が一念、天に通じたる故と確信いたし居り候、さりながら、これがため屋敷の不首尾と相成り、再び奉公も叶はざる場合に立至り候故、やむを得ず田

鶴を引き連れて本郷駒込の奥に棟割長屋の一軒を借り受け、やうく雨露を凌いで其日の細き炊煙を相立て候、あはれなる境涯の委細は、いたづらに田鶴が當世あるまじき貞操節義を自慢いたし候やうに相當り、小生もまた赤貧苦學の間に業を遂げし吹聴と相成り候へば、わざと茲に大略いたし候へども、滿三年間の二人が有様、いかにして相暮し候やら、その邊は萬事に御苦勞人の浪六様、よろしく御察し可被下候、さて最後に少々ばかり田鶴が容貌氣質等を申し上げ候、彼は今年二十四歳にて、勿論絶世の美人と申すほどには無之候へども、とにかく小生の妻としては勿體なき過分の姿色を備へ、その氣質は唯なんの仔細もなく、あはれや凡夫の小生を神のやうに思ひ込み居り候事實は、既往に照らして聊か疑も無御坐候、

浪六これに對していふ、

仰せの委細いち／＼具さに會得仕り候へば、御關係の深さ御情愛の厚さ、何かの物の本にも相見え候やうにて、御うらやましき程の儀に存じ候、わけて田鶴子さまには、いまだ御目にかよらず候へども、御様子といひ御氣性といひ、春の臘月夜に梅が香匂ふ心地して、他人の拙者まで御なつかしう思ひまゐらせ候、然るを御書面の冒頭に、よせば善かつた舌切雀ちよいと紙めたが身のつまりと、はしたなき卑俗の小唄を御記入遊ばされしは、全體いかなる思召に御坐候や、この席の諸氏に對して御謙遜の意ならば、外に何とか御工夫の書振も可有之に、わざ／＼かゝる卑しき駄洒落を以て、かりそめにも斯る貞節の令聞に當てられ候事、ちと御料簡違ひかと存じ候、もし田鶴子さまが此一文を御覽なされ候はど、いかに温淑珠玉の如き御性分にもせよ、甚だ御氣毒のやう考へ候、申すまでも無之候へども、糟糠の妻は堂を下さずとやら、なほさら千代の八千代の末までも御大切に遊ばさるべ

く念じ上げ候、

第十二番

容貌の醜は目に見て知り、品行の善惡また探りて知るを得れども、たゞ無形の性質、わけて人の妻となりて後の性質は、いまだ嫁せざる以前の教育と家庭によりて悉く窺ふべからざるのみか婦人の嫁期は恰も武者の戦場に出づるが如く、平生の素養をあげて勝敗強弱たゞ此刹那にかより、生涯またあるまじき心身變動の一大機運なれば、一朝これを迎へて百年の禍福を賭せむとする男子の注意、たとひ力を極めて選擇取捨いたらざるなきも、既に成長せる昨日の他人を呼んで忽ち今日の異體同心となすもの、前途その危きを思へば宛ら薄氷を踏んで千仞の水を渡るの感あり、故に人間萬事小心翼々たる我は、たゞ卑賤ならざるものゝ子にて年のころ十歳前後より十三四歳までの愛らしき少女數人を養ひ、五年

間これを我左右に置いて思ふがまゝの教育習慣を施し、他口その中より我意に叶へる滿全の良妻を得たし、何となれば、凡そ世の女子たるもの、おのゝ生まれながらの資性天賦ありと雖も、多くは破瓜に近づくころ外部の色相によりて定まるものなれば、まづ春情の萌すまでは方圓の器に従ふ水の如く、たゞ無色透明にして長者の力よくこれを支配し得べきのみならず、彼等また我を師父の如く敬ひ我を傳母の如く慕ひ、形影相伴うて朝夕相親しみ、無意無識の間おのづから年と共に綿々たる一團の愛情を生ぜむ、されば其愛情の發達するを待つて期に投じ妻となす、固より道路の男女相逢うて終身を契るが如きものにあらずして、百年偕老の良妻を得るの日に、また才色兩全の阿妹數人を世にいだし、ともに長く往來して親戚故舊の觀を子孫に遺すの快望あり、故にいふ、我の妻を娶るは妻として娶るにあらずして、いまだ情を解せざる可憐の少女を得るにあるなり、

浪六これを評していふ、

男子生涯の禍福を分つべき妻を娶るに、昨日道路の他人を迎へて忽ち今日の異體同心となす、前途その危きを思へば實に寒心すべきものありといふ、固より理は理なれども事實に於て已むなきを奈何せむ、これ或は世の女子を見ること頗る重きに過ぎて寧ろ夫妻の情を輕んずること却つて甚しきの言にあらざるか、人を殺すの毒婦も戀を欺く能はずと、君乞ふ、夫妻閨中一夜の魔力は門外十年の過去を掃うて痕跡なきものと信ぜよ、たとひ世上の事實に照らして悉く斯の如く信すべからざるも、もしこの信を取つて物を容るゝの量なくんば、一朝おのれが意に叶ふの良妻を得ると雖も、人事の不幸こゝに胚胎して忽ち初志と違ひ、竟には君が寒心するところより更に大なる不快を生ずべし、蓋し君が如き數學的の性を以て漠々たる此世上に對せば、獨り婦人に於て危懼の念を抱くべきのみならず、

男子の交際に於ても日夜その心を疑ひ色を窺うて終身朋友知己を得るの期なく、父子兄弟また互に狐疑して竟に和氣霽々たる一家團樂の時節を得ざるべし、かりに一步を譲つて君が希望の如く、數人の少女を愛育して他日その良を擇ぶとするも、その良順なるもの果して君が生涯の良順たるべきや、試みに翻つて君が心事を判斷せよ、朝に思ふところは夕に違ひ、今日の是は明日の非となりて、我みづから我心の頼みなきに驚くの憾あらむ、かつまた人間徳義の上より之を見れば、竟に娶るところの婦女は一人なるも、既に娶らむとするの妻女數人を貯ふに等しく、君が所謂の小心翼々の性として心に疚しきところのなきか、たとひ數年の教育を施して間然なき恩義の阿妹を出だすとするも、この阿妹もし他に嫁して君が當時の眞意を解せば、久しく心身の試験に逢うて一朝その選擇に漏れたるの感情、果して長く子孫往來の慇懃を保つべきや否や、思つて茲に至れば君は却つてこれ大

鷹狡智の人、おのれ一身の便を得むがため、明りに罪なき世上の少女數人を擒にして其不幸を犠牲に供するが如し、何となれば、君を以て柳下惠を許すものにあらずんば、朝夕室を同じうして嫁期すでに迫るの君が阿妹を乞うて喜ぶの男子あらむや、蓋し一人の妻を娶るに豫め數人の女子を養ひ竟に餘れるを放つて平然たる君が心は、正に他日その妻を代ふること亦さらに履を脱ぐが如く易かるべし、こゝに於て君がために一策を獻ず、他なし、身みづから數人を養うて此敗徳を譏られ此損失を招かむよりは、むしろ女學校の教員となつて日々數百人の少女に接し、親しく之を教へ之を試み之を窺ひ、竟に其中より意中の人を掠めて妻とすると共に、一片の辭表その職を捨てて責を塞ぐに如かざるなり、

第十三番

沈魚落雁、閉月羞花、嬋娟婀娜、窈窕楚楚、さては高尚優美、淑德溫雅、才色兩全、傾

國の麗質、絶世の尤物、乃至また薦たけて妙じき姿、みる目もまばゆき風情、花はづかしき姿、優にやさしき性質、世に越え人に立勝りて氣高き有様、ゆかしき振舞、なつかしき面影などいふ、すべて斯るむづかしき文字もて評せらるゝ女よりは、たゞ尋常に娘らしき娘が嫁となりて、誰が眼にも女房らしき女房といはるゝ外は、善惡ともに他人の口の端にかゝらぬほどの妻を持ちたし、されば嫁せざる以前に親まさりの才女と譽めらるゝ風聞も入らぬこと、學校に通ひて優等生と稱せらるゝ賞状も入らぬこと、また嫁して後は良人を扶けて家を興すほどの智慧も入らぬこと、子を生んで其子の行末を日に見る如く指圖するほどの分別も入らぬこと、まして朝夕出入の者に情らしき言葉を掛け力を貸し恩を施し、あるは親戚一族の席に出で仔細らしき嘴を容るゝ世話沙汰は猶更の禁物、老いては婆らしき婆となり、死しては亡跡に際立ちて惜しまるゝ形見もなく傳へて譏らるゝ不覺

もなく、遺るものは世にありし己が名のみ、しかも其名は生みの親につけられ、連れ添ふ良人に呼ばれ、我子が人に問はれし時に答ふるのみの名にて、善いとも悪いとも更に一言の批判めいたる肩書の添はぬ名を持ちて、生涯なんの音もなく色もなく香もなく、唯しづかに我分を守りて現世を過すまでの妻を得たし、

浪六これを評していふ、

うまれし名の外は生涯なんの仕出かす業もなく、たゞ平々凡々たる世間普通の女子に似たれど、大人は愚なるが如しといへる諺より、その深意のあるところを窺うて、まことに斯の如き妻女ありとせば、これぞ絶世の淑徳、圓滿の貞節、むしろ天下の賢女なるべきか、されば見渡す世上いたるところに得易きが如きも、その實は却つて名聲噴々たる閨秀を求むるよりも難かるべし、たゞ平生の希望を茲に致すの人にして、始めて斯る婦女を擇ぶの

明あるべく、婦女また斯る良人を冀ふの良縁を知るべく、互に圓なる意氣の通じて一朝相逢ふの美を祈るのみ、

第十四番

私は此席に於て前途多望の意氣揚々たる諸君と共に、他日良妻を得るの希望を申し上げるよりは、むしろことに一場の懺悔物語、これとて私が殊更に犯した罪では御坐いませねど、不幸にして斯の始末、諺に申す通り恥をいはねば理の聞えぬ仔細、即ち私は二十一年の年より今年三十歳までの間に、前後あはせて六人の妻を持ちながら其六人の妻に悉く捨てられた浅ましい果敢ないもので御坐います、言を換へていはど、六人の妻に捨てられたと申さうより、私は夫妻相愛する人生最大の快樂を神より奪はれて、かくの如き苦痛煩悶を此世にうくるかと、人しれぬ夜なく、または寢覺勝の曉などには、冷かに淋

しき空房の枕を擁して、獨り涙に沈むほどの境涯で御坐います、故に今こゝで私が打明けて諸君に訴ふる心事を、罵しや一片あはれむところありと思召さば、せめてそれを身の面目と心得、また不幸中の幸とも思つて満足いたします、さて私は元來越後三條の生産で父祖代々土地に知られた富豪の家に育ち、自分の事を申すは異なれども、幼少より學校に通ふころも常に其級の首座を占め、やゝ長じて後は一郷の才子と呼ばれ、身體も無病健全、兄弟も數多あつて末子に生まれた幸は、國を去つて四方に遊學するも心のまよながら、さて田舎氣質の風習として父母親戚はこれを好まず、もはや年頃うか／＼と浮いて流れぬ碇にとて、二十一の春、否應なしの押附業に始めて妻を持たされました、その妻は十八にて名を梅と申し、これも近郷に聞えた舊家の娘で、容貌は私に過ぎたほどの美人、女の業にも十人並すぐれて、都の人の眼からは草叢の珠玉、いづこに一點の瑕瑾なければ、父

母兄弟は固より一家一門の者まで騒ぎたて、現在の私も流石に嬉しからぬ筈なく、こゝろに目出たく祝言の式をあけて、友朋輩の間にも羨まれ、近處合壁の茶香談話にも噂され、一月二月は夢うつと、たゞ夫婦の情愛は斯くまで樂しきものかと、をり／＼は我ひとりで我身の恥かしい心地して暮すうち、その年の夏、わすれもせぬ孟蘭盆の日、妻の梅が墓參のため親里へ歸りたいといふに、それ善かる、さうなくては叶はぬこと、さらばとて思ふがまゝの衣裳髪飾具を作らせ、里への土産やら知邊への贈物やら、天晴れ美事に行き届いた音物持たせて、平生から隔意のない下女を付け、出入の車夫に送らせたところ、下女と車夫は其日に歸れど、妻は二日といふ約束の日に戻らず、さりとして慌てゝ問ひ合はすも阿しや、また迎ひの者を遣るも際立ちて好まねば、我ひとり知らず顔に打過ぎしうち、二日三日四日五日六日、もはや一週間の逗留に何の音沙汰もないは、第一里方の親が等閑の至

りとして、私の兄が自ら出向いたところ、いやはや案外の大騒動、妻の梅女は私方へ嫁する以前より、かねて言ひ交した忍び男があつて、その男と共に出奔したを、親々が申譯なさに狂氣の如く日夜八方へ手分して搜索最中とのこと、私も初めて驚き、無念やまく骨髄に徹したれど、さて今さらに致方ないのみか、さほど性根の腐つた淫奔女、たとひ捜しいだして血證文一札を添ふるとも、此方から嫌ぢや離縁ぢや、さらりと去つた、まづ持參の荷物を數あらためて受取れと、荒繩に引ツからけて大八車に積み返した後は、私も男の意地づく、汚された面の泥の乾かぬうちに、おのれやれ百倍まさる女を貰うて、いづれ末は後悔の梅女が成果を見返しくれむと、越後蒲原郡の一圓に草の根掘つて穿鑿したところ、幸ひ加茂といふ土地に家は近ごろ少々不首尾なれど、やはり元は大家の血統、しかも娘は十九にて名を常といひ、萬事が世にいふ天の成せる容色で、みめ姿なら心の氣立なら、

どこに卵の毛の申し分なく、これまで四方よりの縁談は雨の降るほどなれど、親が昔氣質の一徹に、今こそ斯く落魄れたれど筋目なき男にはえ遣らぬと、さしかさず傘の骨あくまで硬うて、飛沫にも濡らさぬ祕藏娘のよしを聞くや否、人橋かけて黄金にあかし、衣裳手道具すべて拵へ取に迎へたは其年の秋、結局おもへば鱒を猫に取られて鯛の返禮うけたも同然、きのふまで胸間に鱒つた不快の塊物すつと消え、つぶされし男の一分こゝに立つて、身も心に更に新なる思ひ、我ばかり秋の空に春めいて、いづこの里に何としてをるやら夢になりともこの睦じさを前妻に知らせたいと、すぎし無念を笑うて寐物語に喜び勇んだ甲斐もなく、唯今おもひだすさへ涙の種、いはゞ私のために一期の恥辱を雪いでくれたのみか、なほ行末の幸福を守るべき二度目の此妻が、その冬の十二月、ふと風の心地といた言葉が疾病の基で、浴びるほどの醫藥も更に何の効なく、翌年の三月、花の咲く現

世を見残して其身まづ夜半の嵐に散りました、運命とはいひながら二十歳の年弱、添うた月日は僅に半歳、これには流石の私も人間の無常を觀じて、そのまゝ佛道にも入りかねまじき氣色を、一家親類の者に諫められ、やうく心取直して諦めたものよ、さて其年の夏となれば、まためぐりくる孟蘭盆に、わすれもせぬ去年の今日、むらくと思ひだす眼前の怨恨につけて、ことしの新魂を迎ふ身が猶更かなしく、なつかしい面影、ゆかしい姿、目にちらついで遣る方もない歎きの果は、何事も面白からず鬱々として暮すうち、それが積り積つて竟に一種の神経病を惹き起しました、かく申せば、めよしい奴と定めて諸君が一場の御笑草ながら、實に私は二度目の妻を失うた爲に病氣となりました、即ち二度目の妻は私を病人とするほどの愛情風采を備へて居つた女で御坐います、すでに病人となつて新潟の或病院へ入院したところ、その病室をあづかる看護婦に、容貌こそ四半分も届

かねど、同じ名の常とて二十一の深切女、規則外に優しい介抱せられて見れば、なんとなく聲音までが肖たやうに思はれ、諸事行渡つた眞實の情を受けては、いよく他人でもないやうの心地、餘所ながら身の素性を聞けば、猶さら捨て兼ねる哀れの境涯で、兩親も同胞もない獨者の、さて嫁入せむには支度なく、婿を取らうにも家はなく、さりとして下女奉公に生涯うかぶ瀬はなく、何か女子相應の小商せうにも資本なければ、せめて難からぬ一個の業を覚えて、其身を過すだけの世渡りに有附かむと、二年以前この病院へ看護婦の見習に備はれ、今年の春やうく一人前となつたよし、きけば聞くほど哀れを増し、見れば見るほど心の正直も現れて、容色からいへば世間ありあまる普通の女子ながら、氣立からいへば百人に一人も乏しい掘出物、このまゝ藥臭い病院に埋めて、わづかの給料に名も知らぬ他人の膿血を介抱さするは惜しいものと思つた一念が竟に縁の端となり、退院の後、

竊に人を遣つて迎へ取らしたが、これぞ即ち三度目の妻で御坐います、されど當分は世間の手前もあり、かつ父母親戚に對しても入院中の看護婦といはるゝが恥かしく、また打明けて頼むとも、氏素性の分らぬ女子は所詮のことと差控へ、三條の町外れに人しれず住はせて、をりく通ふうちも、決して二度目の妻が事をえ忘れませぬ、忘れねども既に死んだ女、今更なると致方もないといふ諦めが、同じ名の此女によつて心を慰め此女の陰陽なき眞實に騙されて、去るもの日に疎いとやら、いつしか薄らいで、現在の愛情に厚くなつた折しも、突然この女が警察署へ拘引せられ、つゞいて私も参考のため招喚せられた時は、事の意外に膽つぶれて夢かとはかりの驚愕も、さて仔細を聞いて猶更の一驚、腰の骨の抜けぬが我ながら不思議と思ひました、全體この女は、新潟の赤鬼といはるゝ破戸漢の妹で、殊勝氣の看護婦となつたは世を欺く淺黄頭巾、ぬぎとれば兄に劣らぬ恐しい大膽

女、入院者を深切ごかしに油断させて、俗にいふ枕さがし、これまで屢々をかした竊盜の罪惡も、平生の質正直に誰とて怪しむものなく、却つて外の看護婦小使などに疑念かよりのこの女ひとりとは評判ますます善かつたところ、天網疎にして漏れずとは斯ることをいふものか、流石の毒婦も入院者の私に引取らるゝを憚つて、事情もいはず行先も届けず其ままほつと俄に辭職した廉が、忽ち一時に嫌疑の種となり、段々それより探偵の手に掛つて竟に舊惡露現、また私方へは固より眞實の縁を求むる心でなく、全く財産を覗うて兄と共に後日の一狂言せう爲であつたと警察官より聞いた時の私は、たゞ惘然として開いた口の塞ぎやうなく、魂魄引抜かれた心地して脱殻の五體ふらくと家に歸れば、父母を始め親戚一同が四方より取り巻いて烈火の如き憤怒の形相、今更に一言の申譯なく、穴あらば消えて入りたいほどの面目なさ、齒を喰ひ締つて油汗に總身を濡らせど、いはど身から

出た鏝、悔いて返らぬ生涯の失策と謝するの外は、涙ばかりが胸の萬分一、たゞ私が親
 泣かせの不孝者となり前代未聞の白癡となつて濟むものゝ、儲すまぬは世間の取沙汰、あ
 れを見よ、わづか一年あまりの間に三度も妻を持つて、しかも最初は情夫に掠はれ、二度
 目は半歳たよぬうちに死なれて吼面かはき、三度目が何事ぢや、廣い世界に女の數もあら
 うものを、わざく、新潟三界から枕さがしの盗女を引き連れて来て、あたら舊家の軒に
 末代とれぬ泥を塗りをツた大馬鹿者、今度が見物ぢや、四度目は何を妻に持ちをらう、
 馬の骨か牛の骨か但しは狗猫の皮か、おほかた二度目の嫁が死骸を掘り出して夜なく、抱
 き付くであらうと、かくまで一郷の物笑となつた。曉は、どの顔さけて生まれ故郷の大道
 を歩かるべき、もはや安閑として此まゝ家に居られず、よし庚申塚の猿を學んで辛抱する
 にせよ、第一が父母兄弟の恥辱、つゞいて一家親類の名折れ、所詮いたしかたなしと思ひ

きり、まづ一年衣食の料に父が手より三百圓を貰ひ、母が涙と兄弟の涙に送られて、親類
 の者へも挨拶なく、朋友知己にも隠れて、たゞ一人飄然と東京へ出たは恰も私が二十四
 の春で御坐いました、さて東京へ来て見れば諸事萬端また田舎とは雲泥の差で、申さば籠
 の鳥の雲井に放たれた心地、今まで井の底の蛙であつた身が呵しうて、俄に目も冴え手足
 も伸びたやうに思ひ、一月二月と馴れるにつけて考ふれば、一年餘の間に三人の女房持ッ
 た位が何の仔細なく、賣色の身ながら吉原には一夜に十人の男と連れ添ふ女さへあると、
 妙なところに理窟をつけて、故郷の空を冷かに笑ひ、顧みれば何事も夢一場、いはゆる百
 聞は一見に如かざるの道理で、こゝに飄然として悟り、いや悟るといふほどの立派な私で
 も御坐いませぬが、まづ過去を忘れて將來を思ふだけの覺悟を起し、ある法律學校へ入學
 して、二個年の間は一心不亂の勉強、其後は獨學一年、あはせて僅三年の修業ながら、お

そらくば他人の十年に劣らぬと自ら信じた甲斐あつて、二十七の時、辯護士の試験に第一の優等を占めました、さて斯うなると故郷の名聞も次第に善く、父母は猶さら私を天下の大學者にでもなつた様に心得、かねて私が分配を受くべき財産の三分一即ち五千圓の金を携へて上京し、これで先づ一家の始末をせよ、もはや田舎に歸つて住む氣はあるまいと、萬事行き届いた親の慈悲に私も後來の目的などを打明け、こゝに始めて東京辯護士の一人となりました、かつ幸ひに私は、外の新參辯護士と等しく朝夕奔走して訴訟を捜し、日夜駈け廻つて權利義務に聲を濁らさずとも、過分の豪奢さへせねば衣食の道に事缺かぬ故、いはゞ遊樂半分面白半分、看板の手前で、來るだけの仕事をするにも、別段謝儀報酬の多寡をいはず、偏に依頼人の便宜のみを計つて何事も深切一方に扱ひ、もし敗訴せば實費の半を償ふといふ、この風聞はツと一時に廣まつた以來は、私を保險附の辯護士

と譚名して、來るわく、案外の繁昌、俄に目の舞ふ忙しさ、逆も私一人で手が届かねば、同じ試験に及第しながら猶ほ門戸を張り得ぬ下宿屋住居の辯護士數人を雇ひ、館内に嚴正の規則を設けて大に事務を擴張したところ、これも幸ひに敗訴の数が尠なく、ために収入は豫定の上にいづるといふ有様、そこで私も少々先生振つて、遊樂半分の職業が竟に本氣の沙汰となり、一二年の間に名聲噴々たる一個の紳士となりました、しかし私は此時までも妻といふものに一種の不快なる觀念を抱いて、諸方の申込を悉く跳ね付け、生涯獨身の覺悟でをりましたものゝ、さて實際今日の身となつて見れば、その必要いよく迫つて、無妻は世間の信用にも關するほどの次第に立至り、萬やむを得ず或人の周旋にまかして迎へたは、さる醫者の娘で名を梶といひ年は二十二、容色は十人並を勝れて、随分教育もあり才氣もあり、妻としての外聞は至極の上々、わけて交際多き家の妻には尤

も適當なれど、唯こよに一事の遺憾は、他人に聞かせられぬ大缺點、即ち良人たる私として生涯連れ添うて相和することの出来ぬ次第、いはゞ私は媒妁人と親里と本人とに欺かれた如き者となつて、此度こそはと神にいのりに信じて迎へた四度目の此妻が、悲しい哉、却つて私に人しれぬ不快と苦痛とを與へる種となりました、されどこの不快と苦痛とは妻が好んで與へるでなく、妻みづからも日夜なけいて恥づるのあまり、その缺點を身の品行で補はむとする哀れの風情、いぢらしの心根を思ひやれば、俄に追ひ出すことも叫はず、私は所詮この妻といふ人生第一の快樂を得られぬ不幸の者と諦め、其まゝ一年ばかりを過すうち、さすがに妻も其身の淺ましき缺點と私に對する氣の毒さに、逆も平然として居堪らぬ故か、一日、一通の書を殘して親里と遁け歸つた後、さらに姿を見せませぬ、かつ其遺書中には、あくまで身の非運を歎いて、第一に私を欺いた罪を謝し、

第二には、忽ち追ひ出さるよかと思ひの外、私が一年間これを忍んで連れ添うた無量の
 大恩を喜び、第三には、其恩によつて逆も叶はぬ女子の道を踏み、人の妻となつて世間を
 粧ひ得た慈悲を呉々も言ひ、第四には、これより有髮の尼となつて生涯を送るといふ、實
 に昔の小説にでもありさうな哀れの遺書で御坐いました、されど此事を知らぬ人は、たゞ
 妻が遁け歸つたといふばかり、むしろ私に何事か缺點のあるやう思はれて、實は心外に
 存じましたが、さてそれを打明けては折角の恩が仇となる道理、また遺書の文面を讀んだ
 上は猶さら口外なりがたく、其まゝ私が心一つに秘めて過ぎました、それがため梶の兩
 親は今なほ私方へ出入いたして無二の交際を結んでをります、さて以上しめて私の持
 った妻は四人、いづれも皆かくの如き次第で、人爲と天爲の不幸に責められ、悉く仇儼
 の本分を殺がれた無念さに、まよよ婦人の快は妻に限るものか、妻と定めて家に迎へばこ

そ、かよる苦痛もすれと、こよに初めて花柳の巷を思ひ、新橋柳橋さては其他の遊里に日夜沈酔して、あるまよの金錢を瓦礫の如く掴み出せば、思ふまよの美人は皆これ我妻妾、たとひ娼婦歌妓に眞實なしと雖も、私は固より其信實を取つて終身の伴とすべき必要もなく希望もなく、たゞ世上の物價より見れば少々高いと思ふのみ、元來黄金次第の賣物買物と心得て、萬事を眼前の觀に貪り百年を一夜の情に籠むれば、結局これが私の本色となつて、却つて淡泊の名を尤海濤波の間に唄はれ、竟には花街章臺の先達、いはゆる通様となりました、しかしこの通様そのまよの通様で飽くまで押せば立派なれど、奈何せむ凡夫、わけて私は凡夫中の凡夫で、いつしか一人の歌妓と深くなり、迷はじとするほど迷ふは斯道、溺れじとするほど沈むは此淵瀬、退くに退かれぬ場合となつて、また戀りすまに宿の妻といしましたました、藝名は小染、本名は高、年は二十四で、恥かしながら五度目の

妻で御坐います、されど私がこれを妻としたには聊か仔細あることで、むしろ情愛一筋の素人よりも理解一方の藝者氣質こそ、物事さばけて萬端の會得も早く、却つて行末互の爲ならむと思ひ込んでは是また大の失策で、諺にいふ如く、やはり野におけ蓮華草、手に取つては案外の黒白、きのふの是は忽ち今日の非となつて、三月もたぬうちに早や後悔の聲を漏らせば、妻また敢て屈せず、さんぐ私に不平の色を現して、お去らば去らばの挨拶も軽く、其まゝ手荷物ひツからけて何處ともなく、つツぱしりました、しかし私が以上五人のうちで、つツぱしつた此女が却つて憎くもなく惜しくもなく、恩仇ともに絶えて胸間に残らぬだけが、せめて私のために、僥倖と思ひます、また最後に迎へた六人の妻は、良人に死なれて七年の間みごとに後家を立抜き、女の手一つで立派に當世を渡つたのみか、しかも良人の遺産を倍にしたといふ逸物、しかし年は私より十三の姉に當

ツて、秋の野末の枯尾花、もはや額の小皺の寄つた婆なれど、全體が右の如き働きもので、あらゆる辛酸も嘗めつくし、さまざまの経験にも富んで、妾おきたくば置けといふ寛大の個條まで先觸して来たほどの女ゆゑ、外見は見苦しい不似合の夫婦なれど、内證の眞實は甘露の如く、日夜の扱ひは痒いところへ手の届く心地して、私を弟の如く思ひ子の如く愛し、私もまた或時は母の如く馴れ慕うて、世間で笑はれながら互の間は水も漏らさず、一家圓滿、諸事整肅、春情を保つ期の短い代りには、閨門亂れて人に譏らるゝ憂なく、相携へて兄弟と誤らるゝ事はありとも、互に和して一言の争ひを起すことなし、是に於て私も始めて夫妻の完全、否これも他人には決して完全ならずとも、かく不幸うちつゞいて殆ど人間の快樂を失うた私に取つては、所謂飢うるもの食を擇ばずで、まことに嬉しく満足いたしました、しかしこの満足もまた不運の私には到底長く宿らぬもの

と見え、六度目の此妻、女ながら身も心も鐵で作つた様な丈夫の此妻、きけば四十一の今日まで風邪一度ひいたことのない此妻が、不思議や昨年の五月ころりと病んで歿した時には、もはや私も決然として斷念しました、猛然として人事第一の快樂を自暴自棄いたしました、即ち私は妻といふものを天より與へられぬ前世の大罪人、こゝに再び人間となつて形體を保つばかりと信じました、取も直さず、身體健全に社會中等の位置を占めて衣食住に事缺かぬ私なれど、人間としては家もなく智もなき野末の非人乞食より遙に劣つた淺ましい者で御坐います、あはれみ給へ諸君、畜類蟲魚に至るまで相伴うて樂しげに生活するものを人間の私一人が其快樂を神より奪はれた不幸の者で御坐います、されば此後なほ強ひて妻を迎ふる事ありとも、その妻は必ず天に惡まれ神の憤怒に觸れて、いはば私の生涯を取纏ふべき不幸否運の犠牲となる道理、罪なき世上の女子に私の不幸を

願つても同じ事で、いよく妻といふものを断念しました上は、こゝにまた親子といふ人事最後の娛樂も殺ぎ取られた私で御坐います、子孫の希望までも絶えた私で御坐います、勿論、たゞ一片の春情を果すのみならば金錢を以て自由なれど、それは少壯血氣に前後ない時か、但しは庭前の花に飽いて路傍の楊柳に戯むるゝ時のこと、いやしくも家を成し世に立ッて歳三十を越ゆる身に、迎ふべき妻は門外の往來織るが如くありながら、さて一人これを迎へて終身相伴ふことの出来ぬ私が、雨蕭々たる夕、風颯々たる曉、また夜ふけ人定まッて萬籟寂寞たる後、往事を歎き將來を思へば、空房に冷かなる枕を擁して如何なる悲痛慘憺を心にうくるか、せめて之を此席の諸君に訴へて、他日諸君がめでたく迎へらるゝ令閨に對し、かりにも壓制的の言行なきことを祈ります、及ぶかぎりの情愛を以て長く閨門の熱からむことを祈ります、

浪六これに對していふ、

段々の御述懐を承ッては、たゞ君が心中を察するばかり、失禮ながら、浮世の挨拶通り御氣の毒と申し上ぐる外は、このところ更に兎角の評も致しかねます、しかし、任意ならぬが人生の常として大觀すれば、また敢て君が如く天を恨み神を怖れて身を抛つにもあたらす、さほど落膽失望せらるゝほどの事でもあるまいかと考へます、なるほど、わづか數年の間に六人の妻を持つといふが既に男子たるものゝ最大不幸、しかも其六人の妻が悉く完全からで、一年も無事に連れ添ふことの叶はぬといふに至ッては重ねぐの御非運、人しぬれ苦痛慘憺の程も御察し申せど、偕これが強ち君の罪でなく君が招いた業でもなく、いはど風に誘はれて梢の實を失ふ晩秋の柿、ほとりと音はすれども自然の成行、えよ是非もないと、たゞ諦めるより外に致し方もないと存じます、勿論もの諦めるは既往にあッて、

前途さらに寸毫の支障ともならぬ筈を、わざと自暴自棄して我から身を殺すに似たる御料簡は、かの羹に懲りて冷水を吹くの比譬、責太鼓の遠音に驚いて早まった自害するも同然、あまり男らしうもない臆病、わけて辯護士といふ法律氣質の君には案外の弱音と存じまする、かく申せば、浪六は妻といふものを水瓶の槍杓同様に心得をるかとの御疑念もあらむが、元來その六人を君が妻と思へばこそ、もしこれを門外道路の婦人とするの御疑念も何とて御坐りませう、姦通する女は憎い、事なきに去る女は白癡、死ぬる女は可哀相と思ふばかり、敢て君が前途を抹殺するほどの力ない證據は、日々の新聞雜報を御覽なさる時に、世間あらゆる夫妻の醜聞痴話もしくは喧嘩沙汰離縁さわぎに血を流すとも、殆ど君が半日の不快すら繋ぎ得ますまい、しかし斯くいふは殊さら君に對うての言、もし餘人に逢はど却つて君が如く情事に脆い臆病者を譽めまする、つまり人生は何事も心一個の業、その自殺主義は切に御諫め申すと共に、既往六人の不運を一時に埋め合はすほどの令聞、いはゞ君がため偏に細君の神器晚成を祈ります、

第十五番

猿にも衣裳、馬士にも綺羅、わけて女は髮風采、うまれし身の外に紅粉を施して男の目を掠むる業に長けたれば、男たるもの大に警戒すべく、いやしくも油断して買ひ過ぎざるの用心專一とすべきに、多くは蘭麝の匂ひを美人の肌より漏るよものと心得、豕に似たる女房を抱いて珠玉と思ふの徒輩あるがため、さらぬも横著なる世上の女ども叨りに自ら高く止りて、勿體なや六尺の男を見ること小猫一疋を扱ふよりも與みし易しとなし、日夜鏡に對うて世を欺かむとするの手段いよく深く、果は一笑よく國を傾け城を併し家庫を潰すの勢ひあるのみか、しかも其性の強情陰險にして冀勘忍の強き證據には、古今の戀に女よ

り口説いて仕掛けたる凡例は尠く、多くは男子をして人しれぬ涙に轉輾苦惱せしめ、甚だしきは己れ先づ惚れて置いて死に瀕するも猶かつ口を開かず、わづかに平生親密なる乳母や召使の推量に依つて三年の戀情を現しながら、かくても恥かしいとて顔を赤め袖に隠れて兜を脱がぬ度胸の太さは、實に呆れたる沙汰の限りならずや、まして人の妻となつて後の振舞に至つては、さらに一段の言語道斷、白晝は何事にも強ねて思はせぶりの色を粧ひ、夜に入れば目を斜にして恩義がましき様子を衒ひ、内證の不首尾をも思はずして唯おのれが一身の綺羅を飾らむとし、良人の不機嫌にも容赦なく物見遊山の日取を數へて、身の分際も顧みず明りに餘所の榮華を羨み、不幸でもなき不幸を歎いて動もすれば親里に遁け歸らむとするの勢ひを示し、また或時は不埒にも俳優の錦繪と良人の面相を見比べて及ばぬ事に面ふくらすのみか、これを愛すれば忽然びらりしやらりと附け上り、これを吐れば忽

然べそくと泣き出し、打てば忽然きやツくと騒ぎたて、えど面倒と殺せば忽ち化けて出る厄介物、およそ世上の始末に困るといふは蓋し女のことなるべし、されば聖人これを養ひ難しと宣ひ、佛者これを外面如菩薩内心如夜叉と説き、先達の士これを曲物と叫び、經驗ある老爺は身を削るの斧といふ、故に男子の妻を娶るは生涯の大役にして、いほど此世の苦を求むるに等しく、親の娘を持つは三界の首枷にして、盜賊も七人の女子ある門を窺はずといふほどの難物なれば、そもくいかにして之を扱ふべきや、數年以來の日夜千思萬考して竟に一の計略を得たり、されど今こゝにこの計略を示せば、たとひ席上の諸君に祕密を守るの信ありとするも、反間苦肉の計に妙を得て飽まで執念ぶかき世上の女ども、必ず諸君を欺いて聞き出すのみならず、忽ち防禦の策を講じて我數年の苦心も水の泡となるの恐れあれば、殊更に言はざれども、もし我と感を同じうするの士は、明夜竊に我宿に

來訪せらるべし、四隣聞として燈火しづかに牝猫も居らざる一室に額をあつめて語るべし、浪六これを評していふ、

いかに婦人を責むればとて、これは餘りに甚だしき過言ならずや、かつ終身伉儷の妻を扱ふに、數年の苦心より案じ出せし一の秘計を以てするに至つては、殆ど猛獸を家に飼ふと等しく、宛ら敵と席を同じうして坐するが如く、酷もまた酷ならずや、されど言ふところの一端を徐ろに味へば、固より一理なきにもあらざるの言にして、君はこれ曾て婦人のために苦しめられたるの人ならむか、さなくば假令之を度しがたきの難物とするも、かくまでの罵詈を極めて斯くまでの警戒はせざるべく、また斯くまでの怨恨がましき言を吐いて一味同心の者を求めざるべし、かつ君が言ふところを考ふるに、これ中流以下の規律なき家庭に育ちし氣儘女か、但しは無教育の蓮葉女が野合より成り立ちし妻のため、さんぐ

後悔の臍を嚙んで腹立しさのあまり、玉石混濁ともに焼討の復讐と思ふべき色あり、そもく僻目か、よし僻目にもせよ、いやしくも君が如き心をもて婦人に對せば、いづれの婦人が君のために貞操なるべきや、いはゆる君がいふところの難物いよく難物となつて、むしろ敵に計を教ふると等しく、竟には君が天晴の神算鬼謀も用をなさざるに至るべし、されば君がため切に乞ふ、願はくば徳をもて仇に報ゆるの人となれ、わけて妻には己が滿腹の眞實をもて之を感化せしむるの良人となれ、畢竟するに女は男よりも智慮分別の淺きものと觀念せよ、決して君が思ふ如き怖ろしの大膽を備ふるものにあらざるなり、

第十六番

年のころは十七八、瘦せもせず肥えもせぬ中肉中背の羽二重肌ほつてりとして、たとひ身の折屈みにも角たよぬ五體の節々は神前に備へたる小餅の如く、手足の爪端にまで天生の

才氣みちくながら、さて何處やらにまだ鹽ふまぬ幼氣を含んで、すつと立つたる姿を背
 後より見れば、けに無垢清淨の滑なる珠玉かや、満身の白さに一しほ際立つは黒々と取
 揚けし髪かみの艶つや、牙はを渡わたる襟首えりくびのあたりに三本脚さんぽんあしの毛際けざはみどりを帯びて、右みぎと左ひだりに流れ落つ
 る肩かたの上うへには小鳥こどりの足あしもすべるべく、眞綿まわたを糸いともて押おへしが如ごときは背筋せすぢの小溝こみちにて、總身そうみの
 恥はかしさを籠こめたる臀いしの肉肥にくづきは、たゞ見る雪ゆきを束つかねて美事みことに合あはすとも所詮しよせんおよばぬ神かみの
 手際てぎは、小股こまたきりよと絞しぼりあがりて張切はりきる皮かに卵うの毛けの弛緩ゆるみもなく、歩あゆまば響ひびく内股うちもものあた
 り無心むしんに動うごいて、立たてる兩脚りやうあしの踵かかとは打合うちあへども折重せりかさならぬ自然しぜんの運び、これを美人びじんの蓮歩れんほ
 とやいふらむ、さてまた前面ぜんめんより見上みあぐれば、これぞ眞實まことに鬼拉おにひしぐ體てい、まづ富士形ふじなりの額口ひたいぐち、
 あよ老おいては年波としなみこよに寄よするかと勿體もったいなく、やがて剃そり落おす眉まゆを春はるの遠山霞とんざんがすみとも見よ、
 あはれ願ねがはくば此このまよ長ながく置おきたしと萬人まんじんに惜をしまれ、いきくと張はり詰つめし千兩せんりやうの腫はれ、

もしや曇くもらば一滴いつてきの雫しづくに床板れだいたを抜ぬくの力ちからありと其身そのみみづから知るや否いなや、古今ここんの名畫めいがわが筆ふで
 を揮ふるうて寫うつすとも叶かなはぬ頬ほの色いろほつと曙あけぼのの薄櫻うすざくらに似にて、わづかに兩鬢りやうびんの間あひだより漏もれ出いづ
 る耳朶みみたぶの端はしに赤味あかみを帯おび、滿面まんめんの位置いちを定さだむる鼻筋はなすぢの尋常じんじやうさ、寒紅かんべにを含ふくねど褪きめぬ口元くちもと
 の愛あいらしき、さても此中このうちに舌したあつて何なにを語かたるやらむ、日に三度みつたびの飯いひを食はむ時は如何いかに動うごく
 やらむ、その兩脇りやうわきを挿さむ笑窪えぞぼには男殺をとこころしの露つゆを漑たへて、願ねがは弦月げんげつの一端いつたんを矯ためたらむが
 如ごとし、さて首差くびさし伸のばすとも筋すぢたよぬ咽喉のどを下くだりて、かはいや行末ゆくすゑななくの思おもひを宿やすべき
 胸むねの肉くは、ふつくりと柔やかう展のべて、そもや春情はるこころつくころより生うみの親おやにさへ手てをかけさ
 せぬ兩の乳房りやうちゆうは、まだ色いろづかで小さく固かたく肌はだに喰くひ付き、銀盤ぎんぱんの上うへに墨すみの雫しづくとも見るべき
 臍はその上うへ通り下した通り、世よにあるかぎり連つれ添そふ良人ちよとの外ほかは、生命いのちに代かへても守まもるべき一點いってんの
 神扉しんひふかく閉とじて、かの久米くめの仙人せんじんが通つうを失うしし眞白ましろの脛はざの上うへ骨ほねも、あるか無なきかのやう

に思はれつゝ、打揃へし足並の優しさ足袋ならば八文ばかり、たとひ二十歳を過ぎて子を産むとも、やうく八文三分を越えざらむか、すべての希望は以上に演べたる美はしの處女に、あまり深からぬ學問を添へ、みぐるしからぬほどの衣裳を著せ、うまれ得たる姿の美に劣らぬほどの才と情を籠めて我妻に持ちたし、

浪六これを評していふ、

嗚呼さてもく穿たれたるかな、あはれ大膽に肉薄吶喊せられたるかな、古來天下の畫伯も裸體美人は難しとするところ、されど君がこの裸體美人を讀んで細かに味へば、いはゆる今日の理想家が明りに一片の架空より描き出すの模型にあらずして、まことに眼前かくの如き實物を寫されたるかと思ふ節ありしかも、詞を俗にして意を深くし文を省いて實を示し、巧に五體の急所いち／＼衝いて餘すところなきのみか、これを背面より望んでは襟

首と脛に力を用ゐる、これを前面より望んでは頭上と足端の配合を取り、胸のあたり、乳房の色どり、臍の形容、竟に一點の神扉ふかく閉して犯すべからずといふに至つては、拔山蓋世の英雄ふらくとして魂魄を失ひ、鬼神また讀んでために泣くべし、されど斯る處女の裸體を斯くも細かに見んことは、そも／＼實際に於て得べき業なるや否や、まして此美に叶ふの才と情とを籠めて、いやしからぬ家庭に育ちたる清淨の裸體を、手に取る如く男子の熟視凝目に任すの處女ありや否や、是に於て浪六つらく思ふに、これ必らず君が夢にも忘るへからざる意中の人を、その下婢に賂ひ其下僕に贈物して、しば／＼湯殿の節穴を拜謝感泣せし後、さらに世上萬人の婦人より幾多の美片玉端を取來つて之に加へ、こゝに始めて一個の裸體美人を作りいだせしなるべし、されど元來の標準たる君か意中の人は、すでに絶群の尤物たるを失はざるべく、また併せて君が胸中の煩悶を想ひ、早く此良縁の

結ばむことを祈る、

第十七番

我は天下第一の醜女を得て妻にせむと思ふなり、しかも其醜を補ふに足るべき才學も技藝も願はず、また世に優れて系統の高きも擇ばず萬戸に稀なる財寶の多きも乞はず、唯うまれて不具ならぬ女の心さへ人並ならむには、餘所の目に見苦しからむほど我目には好ましく、たとひ色黒く髪ちどれて額は高く鼻は低く眼くほみて脣尖るとも、よしや手足長うて首筋短く胸元つきいでよ腰骨張ればとて、雀海の中に入つて蛤となり田鼠化して鶉となるの理を思へば、あはれ斯くても女は女いつしか人の妻となつて子を孕む時もあらむかと、世に怪しまれ人に疑はれ、あるに甲斐なく身の置所さへなきほどの醜女を娶りたし、さればとて我は物の美と云ふことを嫌ふにあらねど、絶世の佳人が張り詰めし才氣の目元いき

くと諸事に行渡りて満座を驚かさむよりは、あはれなる醜女が身のほどを恥ぢて薄闇き物影に謹みつと、何事も人の問ふまで靜に差控へたる風情こそ却つて馨しく慕はしけれ、また思へば美といふも醜といふも僅に十年の間、やがて花落ち葉は散りて枯木の冬に何の色を残すべき、かつ傾國の姿は多く毒を含めど無鹽君の涙に人の溺るゝ罪はなく、美人そのを美知つて世を我まゝに時めくと、醜女その醜を知つて萬人に捨てられたると、いづれか物の哀れぞ深き、いづれか心の色ぞ深き、されど世の人は心よりも形を思ひ情よりも色を好むがため、必ず彼を愛し彼を擇べど、我は之を愛し之を擇ぶ、もしその美を好むに道理ありとせば、醜を好むもまた道理ありとせむ、誰やらが句に、ものすきの蟲は來て啼け蓼の花、あゝ我は櫻に棲んで人に憎まれ身の危からむより、蓼に棲んで世を安く心の靜ならむこそ希望なれ、ましてや世にあるかぎりの男子いづれも皆あらそうて美を好み艶を競

ふ中に、我たど獨り天下第一の醜を得て意氣揚々たるの奇觀また快とするに足るのみか、玉殿瓊樓の中央に小田の蛙の啼き損ねたらむが如き妻を据ゑ、いづる時は手を取つて鷺に似たる姿を肥馬輕車に乗せ、形骸の美を抱いて喜ぶ浮世萬人の奴に腸破るよばかりの一驚を喫せしめむと思ふなり、あはせて古來幾多の色に脆き英雄の屍を冷笑ふも、また我に取つての一興、美人十年の膝枕に睡るよりも遙に勝れり、

浪六これを評していふ、

むかし毛利の一族某は殊更に醜女を擇んで娶り、その他の名士また不具癡疾の妻を持ちしもの多けれどもこれ或は戰國のならひ言ふべからざる仔細ありての事ならむを、太平の今の世に我から進んで天下第一の醜を望み、しかも日夜奔走して得むとする君が如きは、好事の癖をもく稀なるべし、されど君が美を避けて醜を擇ぶの意に、佳人の揚れるを押

へ醜婦の沈めるを痛み、ふかく形骸の花を賤しんで其色を憎み、こよに心情の實を愛して其根を憫れむといふ、以て君が資性の義侠に富めるを仰ぐべく、また世上萬人に捨てられたるを我ひとり拾うて錦繡に包み、さらに手を携へて往來織るが如き大道を濶歩せむとするに至つては、うたよ勃々たる君が平生の氣概を知るに足るべし、たゞ疑ふは事の實踐に於てのみ、偏に恐るゝは龍頭蛇尾の恨事のみ、わけて未だ相遇はざる男女の希望は風雨電霆の變に等しと聞く、他日もし君が言行一致の勇を拜せば、浪六たどちに趨つて今日の疑念を謝すべく、幾萬の醜婦また櫂を四方に傳へて君がために萬歳を唱ふべし、

さても人の心は其面の如く、さまざまの希望、いろくくの述懐、函の中に投げ入れし十七枚の文こよに盡きて、席に集ひし十七人 男たがひに顔を見合はせ、どつと思はず笑ひ興じつ

つ、雨夜の品定とは昔より聞く言葉なれど、まこと眼前に打解けて斯くまでの興は再び得難く、かよらむ面白さは又とあるまじきに、このまよ此文を反故として掻い捨てむこと偕も口惜しき業なり、されば他日の記念に取集めて遺しおき、おのゝいかならむ妻にても持ちし曉に、また打寄りて昔語りの一個とせむ、今こそ斯くて血氣さかんに猛く勇めど、やがては我も人も鬢に霜降り額に老の年波よりて、淺ましや孫の手に杖持ち添へつゝ扶けられむ果には、なほさらに今日の事ぞ懐しく床しからむと、一座しめりて何とやらむ世の中の哀れを覺ゆる折しも、ばた／＼と蹙音して此席に入り來りし八人は、これも平生の隔意なき友垣、今宵の遊興を漏れ聞きて俄に走せ來りし徒輩なりけり、おのゝその懐中より一葉の文を投げ出して笑を含み、願はくは我等が未來の妻も評にあづかりたしといふ、さらばとて沈みし坐興さつと再び湧き返り、前後あはせて二十五人ざんざめく中に、十七番うちつどけて聲を

潤らせし朗讀者と、たえまなき批判に勞れ果てたる浪六の二人、またもや坐の中央に引き出れぬ、

第十八番

かく申す拙者の希望は、やんごとなき館のうちに育ち給うて鄙びたる浮世の事さらに知らし召さぬ高貴の姫君へ、雲に掛橋、霞に千鳥、よしや及ぶとも願はず、かつまた一世の政事にあづかりて廟堂に時めく官人の令嬢、これを高峰の花と見て折り得るとも願はず、されば巨萬の富を積んで金色の光かどやく豪賈の秘藏にもあらず、二つの眼を古今に照らして一代の指南車と仰がるゝ學者の娘にもあらず、さては三軍を叱咤する猛將勇士、六合を伸縮する高見博識、一國の經濟を動かす事業家、鬼神を指頭に宿す美術家、死骸を蘇すべ

き名醫、萬石を厨に潰す大農、其他すべて世にあらゆる名聞の門戸高き家の女は更なり、裂帛一聲かの江州の司馬をして泣かしむる名妓も好まず、色藝情致ならび得て教坊を傾くる絶群の娼婦にもあらず、たゞ願ふところは都に遠き片山里の月を燈火に砧うつ賤女か、あるはまた磯うつ浪の音に小夜の千鳥を聞き馴れたる蛸が管屋の少女を、其まゝの姿に見て宿の妻に迎へたし、

浪六これを評していふ、

そもく、斯く申す拙者の希望はと、あまりに事々しう大業に出られたるのみか、上はやんごとなき館の姫君よりは下は賤しき花思の遊女に至るまで、いちく連ねて物のみごとには跳は付けられし猛勢、さては怖ろしや、いかなるむづかしの御意ならむかと思ひの外、ただ月夜に砧うつ女と浦に汐くむ蛸なりとは、あはれ何たる呆氣の御言葉ぞや、浪六これに

對して兎角の批判せむよりは、かつて浪六が著したる小説中の一文を抜いて、聊か君がために獨寐の夢を覺すべし、さてその文にいふ、『汐くむ海女に美人多く草刈る少女の懐しきは、和歌に讀み畫に寫してこそ雅趣もあれ、まことは恥かしきところまで天日に晒して、青鼻たれつ赤毛かぶりつ、色まツくろくくの肥ツてう、片言まじりの大聲に喚いて猿の如く四方に駆け廻る姿、なんとして二目と見らるべき、動けば汗臭く、寄れば日向臭く、これはくと色道墮落の餓鬼さへ踵を翻して逃ぐるは定なるに、おもへば須磨の昔に濡れたる行平どのは稀代の好事』かくいへばとて賤女の美人なしといふにはあらず、たゞ君が畫空事に可惜ら生涯の希望をかけて、浮世の質風流に魂魄うごかさるゝをいたむのみ、よしや汐くむ蛸に傾國の姿を備へ草刈る女に絶世の色を添ふるとも、たえて世上の配合にうつらず人事の作用もなき無精非情の美は、果して女といふものゝ美に叶ふや否や、されど浦

花車

ふく汐風に晒され叢の宿に育ちたるを磨かぬ玉の粹と見て、うまれしまよの働きもなき心を天真爛漫とするの意ならば、君もまた一種の哲理めいたる人として尊ばむのみ、

第十九番

春情つく女の十六七は、木葉の散るにも呵しく箸の仆るにも笑ふといへど、こは其心の底より呵しく笑ふにはあらで、たど一筋に我身の品を作らむがため、あるは餘所目に際立ちて見らるゝ恥かしさを、色にかくし坐を綾どるの業なれば、態とめいたる斯る節を好まねど、我は生れながらに何となく呵しき女を妻に持ちたし、顔容は人に勝れて清く美はしく晴れたる中に、眉毛のあたり目元の端、さては起居動止、手足の運びに至るまで、おのづから懐しう愛らしき幼氣を含みて、道ゆく他人さへ思はず振り返りつゝ笑まるよばかりの女、しかも物いふ言葉の端には罪もなき滑稽を帯びて、うきめ涙の席上もいつしか忘る

るほどの可笑味、これも其身の氣づかぬ心より湧き出でよ、賤しからぬうちに洒落たる風情を湛へ、見苦しからぬうちに馴れしき氣を持ちて、いはど寢よけに見ゆる若草の姿に思ひの外なる老木の節ありと見れば、またむづかしき式作法を易く輕けに流して不知顔の色おもしろう、はれの衣裳を著飾りても浮世萬人に外れし一癖をかしく、萬事に行き渡りても何處やらむに物足らぬ一振をかしう、さればとて何事も聲はりあけて笑ふことなく、我から轉びて人に笑はるゝことなく、をりく物をあやまり事を過ちても、その過誤に憎氣もなければ尤むべき節もなく、たとひ己が才氣をいだきて叶はぬ時だにも、おほろけに遠く取廻して近く角々しき色を衒はず、もしや憤怒怨恨に堪へざる時などは、いよく斯女が自然にうけたる一代の美と愛とをあらはして、娥眉を皺め丹花の唇を尖らし、雪の額に前髪ふりかけて腹立たしさの手足を打固めつゝ、無邪氣に強ねて藻掻いて何事か獨り

喃く風情、筆にも畫にも寫されざるのみか、また嬉しく樂しげに興ずる時などは、身の正體を崩さねど心の紐を解き弛めて、あまりの喜悅に我を忘るゝ氣色は何に譬へむ、まして其品格よりいへば、世には磨ぎ澄したる明鏡に對ふが如き心地して見るべき美人もあれど、これは稍々出來損ねたる黄金佛に薄絹を掛けたらむが如き風趣ありて、勿體なきうち

浪六これを評していふ、

男としては圓轉滑脱の名士、女としては迷る色に呵しみを帯びたる才女、かれは一世の風浪を巧みに漕いで物に煩はされず、これは一身の艶を優しう展べて世に落ちず人に惡まれぬ尤物、天下の廣き女の數の多き、いづれあるべきも俄に求めて迎へむは難き業なるべし、もし斯る女ありとするも、妻として劣らぬほどの良人また稀なるべし、かつ一步これ

を誤れば輕薄伶俐の美人、二步これを誤れば心こ常なき蓮葉女、三步これを誤れば飽くまで腹黒き女、四步これを誤れば追從諂諛の性、五步これを誤れば身持放埒の淫奔女となつて、いはゆる似て非なるの悔を遺さむか、されどまた其性を誤らずして實に得るの幸福を得ば、良人たるものと生涯に月も花もなかるべく、思ふに本歌めくよりは總て俳諧めいたる女のことなるべし、

第二十番

遊女とて母の胎内より八文字踏んで生れいでし凡例なく、夜毎に變る枕の數を並べて育ちしものなく、淀む濁りの水上も流れは清き石清水、神かけてななくの誓文、はじめは親のため同胞のため、さては浮世の不運に攻められ善からぬ他人の口車に乗せられ、辛や悲しや通れぬ涙の淵瀬、まことに落すべき仔細ありて落ちし身の末なれば、男の腕に清く洗

うて見る目に虫の影もなく獸の姿もうつらず、まして朝に送り夕に迎へて擇ばよ心のまよなる千萬人中より、たゞ斯人ひとりと身も骨も投げて憂目さゞくの果に添ひし良夫には、おのづから人しれぬ情も深く尋常の世上に得られぬ貞操もありて、いはゞ室に養はれ鉢に培はれたる花の姿たゞしう美しけれど、雨露霜雪にうたれし辛苦の松の色いつか褪むべき、かつまた其あはれを思ふに、世の女の百千倍いくその悲歎に我から女一期を捨てよ沈めども、ながれの憂川竹に孝を唄はるゝ筈なく色を勤めの遊女に生涯無垢の道もなければ、名も得しらぬ無縁の他人が手にかゝりて悲しき春を弄ばれ、野末の小屋の醜女が口の端にも畜生がましく呼ばれ、鬼はいづこの里にも住むべきを唯こよばかり魔界といはれて返さむ言葉もなく、血の涙に染めし衣裳を著飾りて暮を夜明の萬燈に生耽さらし、黄金の端に身を買はれて心にもなき一夜の恩に指切髪切捨身の苦惱を迫られ、片目には皮肉を絞る怨

恨の露を滾せど片目には媚笑を浮べて娥眉をつくり、苦海十年おもてに飾る全盛の裏は猶更ら地獄の責苦、おもへば山海の珍味も錦繡の夜の具も小砂礫を嚙んで針の席に起き臥しすとや歎かむ、まして遊女の戀は大の禁物、もしこれを犯せば忽ち其身の破滅、あるほどの客は一時におち来るほどの人は皆敵となつて影さへ寄らぬ淋しさを、さらぬも鐵鎖で繋ぐ内證の無慈悲と遣手が怖しの邪慳に打たれ、雨と降る矢玉の呵責に身を切らると責折檻の其中より、碎けて脆き情の露、おちて迷ふ傾城の戀、そもや我から解けて眞實しんから添ふ氣の情郎には、残る蟲の息を中有に吊られて取らるゝまでも、いとし可愛と狂うて叫ぶ一念の風情、勇士の千軍萬馬を斬り抜けて運ぶ忠義に似たらんか、されば情郎の身には浮世千人の戀よりも腸に染んで哀れ深く、編笠紙衣の末は物かは、同じ酒色の蒼に葉を晒すからは、すかれて亡ぶ破れかぶれ、傘の骨となつてこそ面白けれと、此方も昇れば

彼方も昇りて、のほりつめたる頂上は今昔ともに免れぬ遊里の憂節、互の胸は一所に通へど二人の姿は引き分けられ、せかれて募る其果は何となるべき、ことに一重の垣を破れば沈む心中死しての後の小唄にうたはれ、淨瑠璃芝居に乗るが手柄の果敢なき習慣、さても斯らむ落魄の底より浮び生死の瀬戸より這ひ出でよ、憂身やつせし昔の戀を今の寢物語に笑ふ夫婦の快樂いかならむ、我はこれを羨むにあらねど、太平無事の主従よりは戦國の君臣こそ契も深く情も固しと思ふなれ、

浪六これを論していふ、

あゝ迷はれたるかな、夢にも見まじきものは遊里の戀なり、あゝ迷はれたるかな、かりにも逢ふまじきものは遊女の情なり、さても君がいふところは唯その哀れのみを汲んで皮肉の宿る毒を思はず、たゞこれ淺ましき色情の名聞、溺れて怖ろしき生涯の破滅を悟らず、

親兄弟に見放され無縁の他人の傾城に可愛がらるゝ身の果といふ、そもやこの小唄に喰はれて可憐ら男の立つ瀬もなく、見渡す世上に無垢の女も多きは何が不足に家庫つぶしての妻女と笑はれ、廣き天地に五尺の身一個を置き兼ねるもの古來いくばくぞや、朱を奪ふ紫の色に身を染めては素の地肌に戻らむこと難く、雅樂を亂る鄭聲の音調に耳聾ひては再び人間の聲を聞かむこと難く、そもや十五の曉より立つべき三十を我から申し惑はざる四十いよく迷うて、五十の坂に天命を知るも及ばす六十の終焉に薦を被つて受けたる悪疾を青天の下に晒し、死に損ねたる老の成り果を路頭に引き摺りて雨露霜雪にうたるよもの古來また幾何ぞや、たましく昔の高尾、薄雲、瀬川、多霧、今の世とて傾城の眞實なきにあらねど、その眞實を盡し盡されて互に何となる、すぎし憂身の苦勞を後の寢物語にすればとて、千兩の角屋敷を一夜に潰して編笠紙衣の末を何とする、のこるは悔の涙と千束の文

殼、空しく紙屑籠に投げ入れて鼠の溺に汚されむのみ、かつはまた千金の客を振り撈つて
 一人落魄の男に迷ふを遊女の俠と稱へ、玉の輿に乗るが嫌さの苦勞を遊里の哀れといへど、
 心一個の身を萬人一樣に待遇して虚偽を眞實といふが勤めの習慣、いはすば立たぬ賣色傾
 城に我ひとり色を通はせ情の血を吸ふは、男冥利に叶はぬのみか餘所の廂を偷んで己が營
 業するにも似たりけり、よしや斯らむ憂身しので落目の果に添はずとも、およそ遊女を
 妻に持つ身の涙しらすや、しばしは思ひし花を庭にうつして楽しく笑へど、やがて色褪め
 血氣をさまれば、さしもの名花いつしか疇昔に變る今日の佛、我は固より我身の錆ながら
 閉さぬ世上の耳目を何とせむ、用意一點の過誤によつて晴れの席上にも肩身うすく、覺悟
 一重の取捨によつて歩めば影をさると指人形、たとひ諸道に長けて浮世萬人の女に勝る
 とも、身の清きを思へば味噌漉さけて竈の下に煤けたる下婢一人に及ばず、いかに貞操を

守りて行末ながく慎むとも、さがなき口の端に元の傾城いつまで唄はれて、生涯片輪の戀
 に伴ふもの亦いくばくぞや、おもへば何事も過ぎし情の夢と消え果てよ、さんぐ思ひ思
 はれし涙の跡もなく、すいたといふも若木の花の一盛り、老いての後は互に血道をあけし
 昔の白癡を笑うて、あゝ曲もないと今更の後悔なんの甲斐がある、されど斯ほどの後悔ま
 だしも物の上乘、いづれ浮き沈みは遁れぬ人間界に、もしや運傾いて連れ添ふ道も絶え、
 あきも飽かれもせぬ中を別るとも、あれ見よ、あれが小判を擱んで抛けた最後の御手柄、
 だますが色の傾城に仕て遣られし様と、物の諸分をしらぬ野暮奴が口、されどこの野暮奴
 が世の常なれば、捕へて口説いた曉は猶更ら血迷うた末と笑はれ、果は我から我を突き
 落して浮ぶ瀬もなきもの世間また幾何ぞや、むかし半掃庵の翁が遊里に通ふ男の様を見て
 いふ『都のおそるべき所々に、遊里の軒をきしれば、しばしこそ親の關守もかたけれ、物

よみ諺のつれにさよやかされ、東は朝日の陰なる遊びも募れば西に傾き易く、もらひのなかりし夜は面白く、口説にあけし曉は呵しく、うそは誠にかくれ恨は情に負けてより、人のいさめ世のそしりも行過の古みに見下し、宿はお留守の夢のうき橋、ほどなく絶えて、奢る者など久しからむや、秋風内證に吹きわたり、出口の柳みすほらしけに散り初むるころより、丹波口の茶屋も見ぬ顔して身をかり、すまの浦ならずも後背に山の借金負となれば、今出川の家も質に流れ、姉が小路の妹婿より、よすが求めて今ぞ落目の境に下り、わづか二三年の夢、惘然とさめて思へば千束の文は何のためになりけるぞや、昔の孔子も今の伯父坊も異見はことの事なるべし』さて魚類の数は多く、わけて鯛といふ調味の最上もあるに、鰻を食ふ人こそ傾城買に似たらむか、夢にも見まじきものは遊里の戀、かりにも逢ふまじきものは遊女の情。

第二十一番

我は世の人の如く女といふものを敬愛するの心なければ、また妻といふものに重きを置くべき道理なく、唯これ男のために天より賜はりし一種の器具と見て、しかも衣食住の次に位するまでと思ふなり、故に娶りて子を生めば則ち子を生むの道具と思ひ、あはせて我血統ことに絶えず家また亡びざるの幸とし、もし子を生まざれば單に情慾を慰むるの道具と思ひ、あはせて我は親と呼ばるゝを得ず子孫を遺す能はずと思ふのみ、その他は凡て左右の用を辨するがために迎へ、わけて老後の世話をさせむがために迎ふ、されば女の喜怒哀樂は我に於て更に痛痒を感じず、女的美醜賢愚また我に於て少しの好悪を存せず、ましてこれを選ぶに日を費し財を散じて選擇取捨の勞を取らむや、たゞ時と運に任して我手に落ち來るを拾ふの外は、平々淡淡々として寸毫も關せざるなり、故に其妻もし一朝病んで死す

ることありとも、これ殆ど器具の損じて不用となりしに等しく、もし我に反いて姦夫と共に走ることありとも、これ其器具の紛失せしと同じく、たゞ一時の不便を感じて已まむのみ、敢て怒らず恨まず責めず驚かず、また再び妻を迎へて其缺を補ひ、新陳代謝、むしろ古きを捨て、新らしを喜ばむ、されどこの器具は元來わが玩弄物にあらずして月夜缺くべからざる左右の必需品なれば、その損せざるかぎり失はざるかぎり、朝夕これを愛惜して傷つけざるのみか、またこれが修飾保存に怠らざるべし、何となれば我物品に供する必須の財を惜しむは、おのれが身の攝生を忽にする愚者に等しければなり、

浪六これを評していふ、

男尊女卑の説を遠く越えて、いやしくも女を敬愛するの念さらに無しといふのみか、人事最大の妻を以て一種の器具とし、しかも成否變轉の易きこと履を脱ぐに等しき衣食住の下位とするに至つては、殆どこれ一個の木強漢、その死を以て器具の缺損となし、その姦通を以て器具の紛失となし、たゞ一時の不便を感じて冷然たるに至つては、いよく血もななく精もなき無情の形骸、たまく人間に來つて男子の假面を偷むが如く、もし靈あらば其靈かならず鳥獸に似たるが如きも、さらに瞑目沈思して眞意のあるところを窺へば、その損せざるかぎり失はざるかぎり、朝夕これを愛惜して修飾保存を忽にせざるのみか、これに供する必要の財を惜しむは己が攝生を怠るに等しといふ、以て聊か前言之非を補ふに足るべく、或は今日夫妻の間に起る一種の通弊を看破して寧ろ此極端に走りしとも見るべきか、されど君は到底殘忍酷薄の評を免れざるべし、願はくは早く才色雙絶の良妻を迎へて、この評を外ると共に君が持論を施し得ざる臆病の人となれ、食言の人となれ、

第二十二番

我は唯わが身一個を養ふ外に世の富貴利達を求めず、うたかたの水の泡に生涯を比べて、かたぶく有明の月影に心を寄せつゝ、衣は寒からざるをもて限りとし、食は飢ゑざるをもて足れりとし、家は雨露を凌ぎ風雨を防ぐばかりの宿に、菴は軒を這ひ渡りて蜘蛛の巢に門の戸を張らるゝとも、訪ひ來る人を待たず我また出で、車馬の巷に遊ぶを好まねば、何をか恥ぢて誰にか憚らむ、さりとして迹を深山の雲にくらまし身を蓬生の蔭に隠すべき隠者ならず、味噌醬油の通路をあけて節期師走をも知る我なれば、こゝに妻といふものも欲しけれ、たゞその妻の我心に伴ひ我身に添ふほどの女ならずば、いかなる美人も貞女も其甲斐なく、さながら客を扱ひ客に扱はるゝ心地やせむ、これを思へば翠帳紅閨に育ちたる女、さては名門沙汰に耳傾くる女、世に羨まれ人に戀はるゝほどの女は、すべて我妻になり得まじ我また迎へがたく、唯いつまでも斯くて過ぎなむか、もしそれ畦の落穂を拾うて其日

を渡る女、あるは愚に物事しらぬ貧家の女などこそ、我家にも來べく我にも添ふべけれど、さては我好むところにあらで妻とせむ心さらになし、浪六これを評していふ、

これ殆ど朝市にかくれたる大隱の、なほ浮世に心残して色情を去り難きに似たり、もしそれならば古人のうちに誰をか君の先達とせむ、或は大雅堂をや慕はれけむ、王瀾女史をや望まれけむ、よし君に九霞山樵の脱俗ありとするも、今の世に祇園林の百合が子に似たる女やある、浪六こゝに君がためにいふ、町子の如き妻を得らるゝまでは、まづ十萬堂の來山を學んで、靜に伏見人形を朝夕の伽とせらるべし、

第二十三番

一、一季を二度として春夏秋冬四季に八度の外は我まゝ勝手の物見遊山に出でまじき事、

但し良人もしくは親子その他親族の長者に伴はれていづる時は此かぎりにあらず、

一、朝は六時までに起き出でて其身のまはり一切を整へ、夜は十一時まで必ず睡るまじき事、但し一家に已むを得ざる出来事、もしくは親良人の他出して歸宅せざる時は十一時を過ぐるも睡るべからず、

一、世間體見苦しからぬまでの衣裳手道具に止めて諸事奢るまじき事、但し已むを得ざる儀式にいづる時、もしくは他よりの贈物は此かぎりにあらず、

一、たとひ差問なきことにもせよ家事一切を明りに吹聴すまじき事、但し遁れがたき人に問はれ言はで叶はぬことは此かぎりにあらず、

一、たとひ従前の深き友朋輩たりとも用もなき時に訪ひ訪はれまじき事、但し世上一般の義理人情は此かぎりにあらず、

一、庖厨の諸事は其身みづから手を下さずとも必ず等閑にすまじき事、但し召使のものよ働きぶりを奪ふべからず、

一、客來の席上には良人の指圖なきに出でまじき事、但し心易く差問なき時は此かぎりにあらず、

一、良人と我子と自分の衣類は凡て他人の裁縫にかけまじき事、但し覺悟なき業は此かぎりにあらず、

一、他人の事には善惡とも一切口を容れまじき事、

一、我身の失策は決して隠すまじき事、

一、みだりに其身の技能才藝を振舞ふまじき事、

一、金錢の出納に越度あるまじき事、

一、たとひ如何なる事ありとも際立ちたる喜怒哀樂を人に見せまじき事、
 一、身分不相應の恩義を人に施すまじき事、
 まづ以上の條件に叶うて身體強壯に容貌見苦しからぬ婦人を迎へて妻に持ちたし、年のこ
 ろは十八より二十五までをもて限りとす、

浪六これを評していふ、

まことに穩當なる條件のいちく、これを備へて容貌見苦しからず身體強壯ならば、何人
 の妻としても聊かの不足なき令閨なるべし、まづ斯る女をや世間普通の妻女が標準とすべ
 きか、

第二十五番

男女相愛するは争ふべからざる自然の理にて、その愛なるもの竟に合して一室のうちに和

し、こゝに偕老同穴の契を人間の本分とすれども、我は聊か故ありて夫婦の同居を好まず、
 願はくば財産學力品位その他すべて世に獨立し得べき女子と、生涯の契約を設けて家を別
 にし生活を異にし、たゞ長く其間に情交親密の衰へざらむことを祈るのみ、さればとて我
 は世にいふ伉儷の樂しみを捨て異體同心の情を割き、また百年の苦樂に伴うて相扶け相倚
 る夫妻の美を嫌ふものにあらず、偏に恐るゝは人智次第に迫つて理は情を奪ひ社會ます
 ます窮して狹隘苛酷となれる今日の勢ひ、徒らに男を良人と名づけ女を妻と名づけて終生
 圓滿の快樂を遂げ得べきや否や、そもく良人なる名稱の下には男子こゝに其資性を枉け
 て妻のために本領の幾分を殺がざるべからず、妻なる名稱の下には女子また其身と其心の
 幾分を犠牲に供して良人のために天賦の自由を缺かざるべからず、かつ思ふに良人といへ
 ば妻の犯せし罪を遁るゝ能はず、妻といへば良人の非を避くる能はず、互に性來の一端を

捨て終身を夫婦なる名聞の綱に縛し、甚だしきは男子その面目を失ふの悲惨に逢ふも良人と呼ばるゝがために自ら忍んで暗涙に泣き、女子また妻と呼ばるゝかために富貴の生涯を婢僕とし靈妙の五體を翫弄の器具とし、竟に古來の詩人をして人生婦人の身となる勿れ百年の苦樂他人に倚るの歎あらしむるに至る、されば夫婦なる文字を外より見れば人間無上の光榮と快樂を示せど、奈何せむ世上の實際その裏面より見れば多く失望を孕み苦惱を包み涙を含む、唯その失望の歎と苦惱の涙を呑んで發せざるものは夫婦和合し、一朝も發して相互の堪忍に均一を缺けば忽ち波瀾を生じて閨門の醜聲外に漏るゝのみか、竟に別離の慘を呈し反目敵視の奇に終る、故に我は斯る危険を冒し斯る苦境を忍び猶かつ己が本領を殺いで空しく夫婦の名を求めむよりは、その虚儀虚飾を脱して長へに其實を保持むとするなり、是に於てか女子に我と等しき財産智識を要し、門戸生活また悉く異に

して一見殆ど他人の如きも、日を定め時を期して一堂に相會し相親しみ、朝々暮々の歡つければ春花秋月ほしいまよに手を聯ねて外に出で、纏綿情緒の興に飽けば夏涼觀雪ともに相誘うて遠く遊び、かの紛々たる俗世の煩勞を去つて唯單に神聖なる戀の一事あるのみ、かつ情は始めに厚くして後に薄きの恐あれば、朝に別れて夕に逢ふもの常に戀の新なるを喜んで潤るゝの憂なく、また互に家事の系累なければ男女ともに肅然として却つて禮を亂し性を損ふの憂ひもなかるべし、もしそれ契約に反いて情を破るの不徳あらば、すでに破るもの再び返すべからざるが故に、その財産を沒收して罪を償はしめ、もしそれを生むの慶事あらば、おのゝ等分の資力を合して別に完全なる傅母を擇び、やよ長ずれば凡て之を學校の教育に委するのみ、何を苦しんでか殊更に互の天賦を殺いで夫婦虚名の犠牲とならむ、何を苦しんでか徒らに名聞の奴隸となつて生涯の苦境を求めむ、骨肉同胞と雖も

久しく室を同じうせば相和するもの稀なるに、異性の男女こゝに合して身を終るまで間斷なき世上の風波を渡らむとす、理に於て固より圓滿を望むべからざるなり、故に我は斷乎として夫婦の虚名を求めず男女同居の弊を取らず、誓つて斯説を實行せむとするもの、何ぞまた美醜を選ぶの違あらむ、

浪六これを評していふ、

文章いまだ意を達せずと雖も、矯々たる一場の議論、諤々たる一篇の奇説、人をして殆ど其間に是非を分別するの違あらざらしむ、されど浪六おもふに、恐らくは君もまた角を矯めて牛を殺すの人ならむか、その名の美にして其實の美ならざるもの何ぞ殊更に夫婦を責めむ、人寰すべて苦樂の境、一眼を閉ちて物の半面を望めば宇宙の萬象いづれか涙なからむ、もし君が説に一步を譲りて、夫婦の虚名に互の性を殺ぐべからざるがため、人間の情

事をあけて一種の契約に託するもすでに契約といふの二字、これまた幾分か相互の天賦を枉げずんば決して成立するものにあらざるなり、君乞ふ、人生獨居の説を誤る勿れ、また天理自由の説を過る勿れ、一國の法律は一面に民の權利自由を守れども一面は却つて民の權利自由を禁壓するがために起るもの、社會全體の安寧秩序を保つがために幾萬の人種おのゝ自由の一端を犠牲に供して成るの契約これを法律といふ、たゞ人を害せざるかぎりの範圍に於て其自由を許し其權利を守るのみ、されば君がいゆる男女の契約また然り、或は夫婦の名より生ずる煩勞を防ぐに足れども、男女こゝに別居して生活を異にするがため其男女の終生に涙なるものを去り得べきや否や、浪六の如きは寧ろ互に相倚り相伴うて涙あるに如かざるなり、かつ君が説くところを以て一場の學理とするは可なり、もし直に用ゐて今日の世上に當らむとすれば、竟に社會の破綻を醸して人倫の大義これより亡ぶに

至らむか、かの門戸生活を別にして單に戀の一事を喜び、朝夕相往來して其清く新なるを樂しむは春色情致の厚き時に然らむ、もし互に色衰へ情去りて自髮枯凋の後に果して能く其戀を存し得べきや否や、昔日の歡樂一場の夢と化して老後ともに之を行ふ能はざるに至らば、かつて神聖と仰ける完全の契約書は一片の反故のみ、男女また冷然として殆ど道路の人のみ、其間に生じたる子の如きは恰も野合の遺子、生れて父母なく長じて家庭なく、たゞ金錢の力に倚つて僅に人となるの悲惨を呈し、朋友親族また之より絶えて竟に社會は寂寞たる枯骨の野とならむ、もしそれ夫婦は人間一種の嬉戲に屬して親は子を教育するの義務なく子は親に孝を盡すの約束なしといはゞ、浪六また何をかいはむ、たゞ近年の白面書生みだりに熱血の人事を取つて數學の模型に投ぜむとするを悲しむのみ、

第二十五番

拙者は何事も放任主義なれど、さて生涯の妻定めとなれば少々こゝろに考へどころ、それも此席の諸君と如き大業なる注文はなし、たゞ拙者が三十歳となれる曉、隔意なき朋友あるは多年の知己を腹心とたのみ、拙者いちゞ鑑定本人となつて四方に駈け廻り、これに供する運動費は凡そ五百圓、これに費す時日は凡そ半歳、女も來べく拙者も迎ふべきほどの處女三十人を選び、その姓名を紙片に書き付けて圖取に抜かむと思ふなり、善玉を得れば幸福、惡玉を掴めば不幸、添うた上からは夫婦の間に起る涙で人も恨まず世をも怨まず、鬼も佛も唯わが身の運と諦めむのみ、

浪六これを評していふ

天晴たしかに二十五番の殿と見受けたたり、かつ添うた上からは夫婦の愚癡を門外に滾さじといふところ正に千鈞の力、偏に君が心を仰いで君が令聞たる女の幸ひを羨むもの天下

に多かるべし、

しなさだめ

佛祖は外面如菩薩内心如夜叉と説いて憎めども、その實は衆生濟度の方便も叶はぬ敵と怖れて舌を巻き、儒道の先達は女子と小人を養ひ難しと卑しめども、その實は仁義五常の盾にも防げぬ力に呆れて驚き、西洋の人は女を愛の神と稱へて尊敬しながら變る眼珠の髯面を回せば、薔薇に一種の魔力ありといひ女は秘密の鍵として意の用心さらに怠惰なし、

されば古今東西いづれの歴史を繙いても、修羅の巷に血河屍山を築く表の裏には、いろどる几帳の影に蟲も殺さぬ花の上蔭ましうて、近くは徳川氏江戸三百年の大仕掛も、雲を突き抜く毛鎗の穂先と闇にも輝く金紋先箱とのみ思ひの外、あやつる絲は人知れぬ千代田の城の大奥に潜んで、もゆる丹花の唇端へちやくくと吐し、力が多いとやら、これを人にしては悪

しなさだめ

七兵衛景清も五條阪にうかれて豫襲の出来損ひとなり、曾我の若殿原も大磯小磯の夕まぐれに十八年の天津風まんと三年を遣り後れ、つひに泣かぬ辨慶が泣いたも元は戀ゆるゑにて、御曹子牛若丸の昔より積んだ手柄の粉となつて腰越狀に腰抜けしも、義經とやら宜きに計らへと仰せられし建禮門院が八島の船中の首尾からとやら、あな怖ろし、さても怖ろしき此ものよ害毒は鐵で鍊へし鎧の實も何のその、旭將軍義仲どのよ首ツ玉にかちりついて江州粟津の里に寒帷子の墓さむく、左中將義貞ぬしの膝を捻つて建武中興の政道を毀しぬ、さては源氏の後家どの豊臣の後家どの、いづれも前の空屋から火を出して母屋の雨戸一枚残さぬ丸焼に、その火の粉は後世凡夫の家になで飛び散つて、火の車ひく大牛のツそりと白壁の割目より這ひ出せば、千兩の家臺骨腐つて一夜に仆れ萬金の大廈高樓忽ち蟲の啼く音の野原となる、乃至また時に拔山蓋世の英雄をして女兒に泣くの歎あらしめ、文珠普賢の智徳にも臍を

舐つて後悔の涙あらしめ、古來いくばくの可憐ら男が世を振り棄てよ山に入り水に漂ふ無分別も七分は彼女が爲す業にて、雲に乗る仙人も忘れがたき故郷の煩惱に通を失うては下界に顛がり落ちぬ、なんぞ女の髪もて大象を繋ぐの力に驚かむ、なんぞ今更ら履ける駒下駄の音からころに浮世の鹿の寄るを怪しまむ、天下には國家紛亂の源因、大名には御家騒動の種子、古來みだりに怖れて傾城傾國の文字を與へしより、街道筋の飯盛おじやれも陣屋ぐらるを傾けむと欲し、一家に取つては大黒柱の根を掘る鋤鎌、一人の身には生命を削る斧となり鉋となり、眼前ちよんの間の悪戯にも毛脛男の血を絞る骨を抜いて正氣を喪はしむ、さりとて彼女の陰險深酷なる、眞正面より斬け來つて青天白日の下に毒を注がず、夜更け人定まつて燈火の幽なる影、雨をほふりて人なき徒然の時、あるは月雪花の清き舞臺を藉りて己が姿を粧ひつよ、泣くが如く笑ふが如く怨むが

しなさだめ

如く訴ふるが如く、強ねるとやら曲るとやら、しどけ容色やはくくと持ち掛け、いちらしけの面影ふはくくと寄せ掛け、宛ら小兒の戯るゝに似たるうち屹と男の油断を見濟まして、こごぞと思ふ急所の咽喉筋に飛び付き喰ひ付く勢の凄じさ、あゝ何をもて物の假令に引かむ、もしそれ其うまれし生育を見れば、母の胎内をいづるより先づ雙親に行末なんくの深き思慮を惱ませ、やうく六歳七歳のころとなりては彌生の空の雞遊びにも、はや友垣と尻目づかひに怨恨嫉妬の葛藤やむ時なく、八歳九歳の物心つけば自然と紅白粉の香を慕うて、ちよこく走りの人なき横町に己が姿を見返り、十一十二の曉には誰が教へねど小唄まじりに入らざる世話の焼鹽梅をおほえ、燕口をあいて餘所の噂を囁り小尻を振つて用なき門を差覗き、さては人の談話に恐音ぬすんで立聞く風情、そもや十三十四十五の春ともなれば、蒼の花の我が暖室に入りたき心地して、先祖の位牌を削り直せば下駄にも履くべき勢ひあり

ながら、顔を根めて男は怖いものとぞ吐しをる、いざや十六十七は寐よけに見ゆる若草の萌ゆる情を忍びつゝ、生命を繋ぐ三度の飯を恥ぢ散り來る木葉も呵しうて、そもくこれが嘘八百のつきはじめ、やがて鬼さへ十八の角をかくし色賣る頃ともなれば、人殺しの本性いつしか備はりて、十九や二十歳の膏に火宅の煩惱を餓させ、二十五の赤き舌端には鐵の板をも紙めて通すとかや、よし然なくとも女といふ奴、これが木の股から孕んで土の中より這ひ出ねばこそ、身持正しく優しい娘と賞められてからが大盜賊、長の年月さんく親に苦勞をかけた上、したよかの荷物を行列させて己が好いたところへ立去る始末、あゝ何として斯る冥加に叶ひしぞや、

五人の女子を持てば夜盜も其門を窺はず、三人の娘よく千金の軒を傾くるとは今に始めぬ浮世の諺、されば世上の粹を穿ちし阿爺の腹立に、男の腕白を殺潰し親泣かせと吐れども、女

の子には家潰し親殺しと叫んで喚きぬ、乃至また満足に嫁して後も生涯良人の厄介物、たとひ七人の子を生むとも此ものに肌ゆるすなと、古來いひあはした用心堅固の防矢も女には何の效驗なく、烏鍋で酒まるツた後の齒楊枝ほども思はれいで、一點の朱唇、萬斛の秋波、風ひかぬ鼻をつまらせて膝に身を抛け掛け、やいのくといはれし曉は無念ながら男に骨といふものありやなしや、

おもへば世間幾千萬の男兒、悲しい哉こいつのために皮肉を喰はれて多少の手疵おはざるものやある、やむごとなき上つ方は儲おき、心の底の知れぬ奥様となつては厳しき御前を物の美事に取挫ぎ、悪魔を宿す御部屋と呼ばれては機をみて殿中を顛倒し、正體わからぬお神さんは、必ず旦那殿の身代にたより、赤い手からの御新造も黒い腹には出世男の前途を遮り、かよア左衛門尉と名乗をあけられては稼げども働けども亭主野郎の浮ばむ瀬なく、裏店に住

む山の神と荒れては宿六いかに力むとも何の甲斐がある、その他には遊女となり歌妓となり舞妓お酌となり妾と稱し地獄と呼び、さまざまの工風いろくの化の皮、手を代へ品を代へて千變萬化に振舞へば、鬼を煮て食ふほどの勇士も之を退治せむこと難かるべし、

神算鬼謀どこを何うして何うすればとて、所詮叶はぬ當時の世界は、あらゆる男いづれも兜を脱いで禪門に降参しけむ、二千年の往昔より口を極めて罵り來りし悪口雜言を、あはれ此頃の腰拔共、そろく謝證文と引替へつよ、いや女は美といふものよ生靈だの、いや男よりも神に近いの、交際場裡の王様だの、弱肉強食の蠻風を和らぐる妙劑だの、一足の蓮歩は忽ち闇夜の光明となるの、一句の聲は則ち微妙の音楽をきくに等しいの、お陰で私共が生きて居りまするの、下されまする戀の賜物には生命をさよけて獻身的の愛を報いますると、さらぬも邪慳あくなきの怪物に追従輕薄の諛辭を呈して阿りしかば、宛ら薪に油を注ぎしが

如く奥州じやらく馬の尻を鞭ちしが如く、いよく増長して益々ひツかきまはさむと、古來さすがに世を憚つて裏田甫より覘ひしものが、今は本街道に現はれいで、其毒を四面八方に振りまく猛威、もはや脛腰よわき男の一人旅は無用の世界とぞなりける、

ましてや當時は學問といふもの彼女を扶けて、およそ多少の文字を讀まぬものなければ、女大學一冊の母親を言ひ伏せること手許の下女を吐るより易く、四書五經の父を遣り込むること隣家の猫を逐ふに等しく、もし己が心に叶はぬ事あれば忽然びんしやんと跳ね廻つて、不幸なる妾の生涯は闇の片隅に置かれた玉も同前、文明の光輝には迎も照らされませんとなど吐して泣く、もしそれ平生より子に脆き甘口の親なれば、石臼を楊枝で突き通すが如き無理難題を持ち出して、きかれずば無病息災の身を我から疾病と稱し、部屋に閉ぢ籠つて今にも死にさうなる小面の憎き振舞、さては親が持つ良人にあらず舅姑に嫁する妻ならずと、こ

こに自由結婚とやらの大議論を行うては、まづ第一に男の弱點を捉へて自己が氣儘の利劍となし、いざといはどこれを眞向額に振り被つての大あらび、妾は貴下の玩弄物で御坐いませんと吼ゆる面相、あと戀も情も褪め果て、今更ら二目と見らるべきや、うてば泣き撫れば甘え殺せば化けて出るとは往昔の世諺、今の女を打てば忽ち辻の交番所に訴へ、愛すれば贅澤いよく募つて家を亡ほし、殺さむとすれば電光石火の間一髪に裁判沙汰となつて、彼女すでに餘所の男と手を引きながら新聞紙上の宣告文で鼻をかむべし、

たま〜明治二十九年十二月二日の夜、わが讀書の座とせる眠獅庵の燈火かよけて、いたづらがきの筆のまに〜、一氣呵成に此稿を起しつよ、なほも飽くまで女といふものを叩き潰さむと思ひしが、軒近き白鬚の森に木枯の音さむく、遠き淺草寺の鐘の音も更け渡り

しなさだめ

流るゝ隅田川の水瀬に筏の舟唄いつしか我を誘うて、うとくと眠りし耳に浪六々々と呼ぶものあり、はつと驚いて見上ぐれば白衣を著たる銀髯の翁、四邊に薫せる香氣の中より笑を含んでいふ、夢にあらはれて文士の種子を作るは古臭き業なれど、我はこれ出雲の大社に女人を司どる神にして、汝が今夜の愚癡迷妄を教へむがために來れり、そもく當時の女は諸事むかしを嫌うて我を袖にする不所存もの多けれど、また汝がやうに悉く蹴つて悪魔外道とするは、いはゆる角を矯めて牛を殺すの類、骨を舐めて肉の味を知らざるの凡例、まいて汝を生みし母も女にあらずや、この末に汝が子孫を生むも女にあらずや、さるを唯おのれが狭き心の葦の節穴より天下あらゆる幾千萬の女人を吐して、唯一言の下に喝破せむとするは、儲も初心の振舞ひ若輩の致し方、あゝ浪六いまだ若いかなく、その若いところを憫れんで茲に汝が見聞を廣からしめむがため、このほどより我を祈り我に口説い

て良縁を求めむとする婦女四十人を貸し與へむ、いちく呼び寄せて女さまく心いろいろの善惡邪正を見るべし、但し四十人の婦女は皆いづれも既に意中の男ありて我また近日に聞き届けやらむと思ふ節もあれば、たとひ汝が心に如何ほど好いたとて猥りがましき行状あるべからず、もし萬々一にも横戀慕しかけて手を握り色目など使はど、命數の神に言ひ含めて忽ち汝の生命を縮むべし、かならずく夢とな思ひそ、さらばくといふ聲もろとも翁の姿きえて、あとに残るは影なき香氣の馥郁たるのみ、をりしも門外に絶え間なき人の蹙音して、四十人の婦女いづこよりか一時に押し寄せつよ、此家ぢやくといふ聲しきりに聞えける、しかも谷の戸いづる驚きくが如く、やさしう細く冴えて恥かしけを帯びぬ、

いかに月下氷人のなす業とはいへ、いかに生涯大事の夫定とはいへ、平生は飯食む唇端をも恥ぢて鼠の音にも泣き騒ぐ手弱女の、かゝる夜深に斯くまで詰め掛け押し寄せつと、島田東髪蝶々の浪をうたせて劣らじ遣らじと先を争ふ蓮葉の勢ひ、これが女の身なればこそ、もし百姓一揆なれば関の聲もろとも忽ち眠獅庵を踏み潰されて、浪六の生命は固より曉の霜に消えなむものと、さすがの我も驚き呆れて門前に飛び出し、いづれも静にく、こゝに四十本の觀世掄を差上げます間、その掄を戻して書き付けたる番號の順序に、一より四十まで一人づゝお這入り下さりませ、何分にも手狭の書齋にて、をりからの深夜に母屋の者も夢の最中、せめてお茶一碗の手さへ届かぬ段は平に御用捨下されて、御難澁ながら暫時そこに其まよお待ち遊ばせ、御大勢なれど都門を離れし向島の一軒、近處合壁のないは時に取つての僥倖ながら、もし例の入らざる口論などなさると方は、番號の順にかまはず最後におまはし

申します、こりやく、智備よ、いや智備とは此に居る浪六が愛犬の名に御坐ります、決して彼の方々に吠えるなよ、またと再び御入來のない珍客達ちや、怠りなく張番をして怪我ないやうに御護り申せと、人を静め犬を制して書齋に入りつと、ほつと一息ついて燈火かきたて、悪口雑言せし宵の草稿を机の下に押し隠し、座を正して待つ間ほどなく輕き足音に、御免あそばせといふ優しの聲ぞ聞えぬ、

つめかけし四十人のうち第一番の鬨に當りしを、いかなる女と思ひの外、さても油斷のならぬは女の子にて、年齢のころやうく十四五の少女、詩人の眼には天桃花上露、無聲ともいふべきか、まだ肩揚ふかく乳房の痕を残しながら、親御は夢にも知らぬ心の豆粉、はや發けて小まざくれたる情の雫ばたくと、朝夕の念願に思ふ男を祈ればこそ、月下氷人に駈り出されて此席に押し寄せたる先登第一の證據歴然、かくしもならぬ目元口元晴れ渡りて、桃割

とかやいふ髪の艶うるはしく、際立つ雪の額に剃刀あてぬ眉毛の濃く太きは、これぞ浮世が欺さるゝ未通氣なれど、両手の指先に自然と力を入れて物いふ毎に動く風情は、此女すでに既に小兒でない怖しき、燈火に背いて萬事しよんほりともせず、羽二重地の頬邊に笑窪を浮べつゝ、語る言葉の端さへ何とやらむ大人びたり、たゞし姿は十人並に勝れて家は貧富の中に位し、しかも外見よりは内福に育ちしやうなれど、本尊の性質おきやんに走つて手固き商人の娘とは見えす、料理屋待合なんに母方の親類を持つて、をりく好ましげに往來するかと思ふ風情ありける、

第一番

妾の家は海苔と卵子を臺の乾物屋で、お父様は近處評判のやかましましや、それに母様が太の出嫌ひですから、年に二度のお芝居も月に一夜の寄席さへ、なか／＼やつて下さらないん

ですもの、だからお友達の間でも妾一人は退物のやうに、くやし／＼オホ、名ですか、妾の名は菊、お菊は皿屋敷の幽霊の名だといひますから、氣味が悪くてなりませんよ、年は十五で同胞は兄様が一人、ですが、この兄様は三年ほど前に田舎の親類から貰つた兄様で、妾の眞實の兄様でないから嫌ですわ、お父様や御母様には大變お氣に入つて居る様ですが、妾はしみ／＼嫌、此頃は猶更ら嫌で／＼堪りませんよ、いくら伶俐で家業の爲になるツたつて、あの色の眞黒な鼻のひらつたい、どんぐり眼球で、いがぐり頭の塵埃だらけ、おまけに齒な／＼ア磨いた事がないから臭う御坐いますわ、お湯は五日に一度ぐらゐ、それも今往つたかと思ふと忽然に歸つてくるんですもの、どこを何うして洗ふのでせう、朝から晩まで店の小僧と同様になつて問屋から來た荷物をかついだり何かするところは、まるで立／＼ほの様で、妾は見るのも蟲が好きませんわ、それに生意氣ぢやア御坐いま

しなまだめ

センか、妾の事を、きいちやんだって、きいちんやも宜う御坐いますが、來年の秋か冬には、お菊くといはれる様になりやアしまいかと、今から苦勞でく堪りませんわ、もしさうなれば、妾は逆も生きて居ない覺悟、死んでしまひます、いッそ川へ身を投げた方が優だらうと思ひますよ、誰が生きて居ますものか、あんな男に身をまかすくらゐなら横町の黒犬のお嫁にでもなりますわ、ほんとにさオホ、、、もし妾が、萬一ぢや御坐います、きッと妾が、たとひお父様や母様が何と仰しやっても、きッと妾が一所懸命に、すいた御方は、つい近處に御坐いますの、名高い小間物屋の御子息で、お年は二十歳、すわりッとした優形で、色がお白うて目元が愛くるしくッて、髪の毛や眉毛の濃いこと、つやつやとして殿御には惜しいやうですよ、そして柔和で意氣で人柄で、あまり物も仰しやいませんが、自然と滾れるやうな愛嬌を含んで、いつも店前に坐ッて居なさいますから、み

んなが大騒ぎですよ、どんなに宜いでせう、俳優でも叫ひませんわ、まるで繪にかいた力彌が散髪したやうで、指なんかの奇麗に細いこと、實の兄様の四半分ほどしかありませんよ、妾が毎日お針の稽古に往來するを、あの方も妾を見てね、そして何です、人の知れないやうに、ちよいと、眼で會釋をなさるんですもの、いつかも妾が、紅を買ひに往つた時、紅の外に、そツと櫻の簪を下すッてね、向島や上野の花よりお菊さんの頭に咲くのを見たいッて、こんな戲談を仰しやるんですよ、その時の恥かしさ、嬉しくッてく、勿體ない、平生の頭髮へ差せるもンですか、手文庫の内へ大事に仕舞ッて置かうとしたを、どんぐり眼の嫌な兄様が目ッけて、その櫻は色が悪いの花の出來が拙劣のと、田舎漢の何にも知らないくせに、からかひ半分いろんな事をいひましたから、腹が立ッて、口惜しくッて、まッ黒な顔中を兩手で引ッ搔いてやりましたら、頬邊から血が吹き出て驚いた時の呵しさ、

今戸焼の羅漢様が棚からおツこちて龜裂の入った様で、二目とは見られませんでしたよ、それから妾は兄様を仇敵と思つて居ますから、ろくに物もいッてやらないんです、聲を聞いてさへ身が縮みますわ、ですから妾は何うしても生きて居られませンの、いきで居るからには、おさんドンになつても、あの方の御傍で暮したう御坐います、お父様や母様が妾をさへ出して下さるなら、嫌な兄様に家業を遣つて、妾は褻衣一枚で結構、あの方の御傍へ、きつと、きつとまゐりますわ、

性質の小才はしつて利發のやうなれど、流石は浮世の巻を知らぬ十五の少女、鏡花水月とるに取られぬ果敢なき色をたのんで、事の首尾さへ揃はぬ戀の念願を囀りつと、いそ／＼と立去りし後に入れ替つて靜に坐せし第二番は、まづ年紀十八九、當世顔の丸ほちやに曙の櫻色、ちと身分によりて品位を缺くの恐れあれども、四つの面道具に聊かの申分なく、わけて際立

つは眉の長きと自然に生え止りし額の美事さ、首筋すつと立伸びて禪毛なしの後髪、鬢つらの横顔には更に一段の風情を添へ、手足の肉置のたかに指の爪うすく、物越の優なる衣裳つきの温順しき、さては思想の驕がしからねも知られて、女の諸藝普通は遣つて退けたるだけに、わざと顔色に出さぬ身のたしなみ、いづれ嬢様と冊かれて一人歩行のならね生育を、わざ／＼夜深に此席まで來られしからは、所詮しのびかねたる戀の下草、よく／＼の事なるべしと慇懃に取扱へば、恥かしげに身を背けて顔うち蔽め、かたる聲さへ細く哀れに私語きぬ、

第二番

父は或會社の長をいたして、少しは世間に知られて居りますものよ、妾は御覽の通り不束な性質、去年の冬、やう／＼一個の女學校を出ましたかばりで、まだ何事も存じませんが、もはや年だけは年頃になるからと、父は頻りに氣を揉んで、あれこれ心配してくれました

しなさだめ

中に、おなじ會社の役員で只今は地位も低う御坐いますが、末の見込は充分あるとかで、ことし二十九になる方が御坐いまして、まづこれをと申して居ります、勿論、その方は御容貌も立派で學問も才も、かたぐ社中の評判も至極よいやうで、妾風情の分には過ぎたお人、第一が親の鑑定に叶った上は、決して、なか／＼嫌の何のと申すのでは御坐いませうが、妾は、妾は當分、どこへも参りたう御坐いませうから、もう三四年の間は此まゝで、いえ／＼何も別にホ、ホ、別段これをいふ目的も、はい、ホ、ホ、はい、それでは此席ぎり、貴方だけに、うちあけて申し上げますから、ですが、きつとお笑ひなさいませよ、お笑ひ遊ばしちやア嫌で御坐いますよ、きつとお怒り申しますよ……ゼンたい妾を、こんな致しましたは、あの清で御坐います、清は外の奉公人と違ひ、幼少の時から古く家へまるつて、よく氣心の分つたもので御坐いますから、學校の送り迎へ其他、清を連れて

往けば親共も安心して妾を出すほどで御坐いましたが、ちやうど去年の秋、一日、途中から清に誘はれて上野の繪畫共進會へまゐりました折、水彩畫の中に貴方、びつくり致しましたよ、妾の姿が其まゝ繪になつて出て在りましたから、そして其前は黒山のやうな觀客で、いろ／＼な事をいつてるんですもの、妾は顔が眞赤になつて、のほせあがつて、どうせうかと思ひましたよ、すると清も顔色を變へて、しきりに袖を引ツ張りますから、やつとの事で門外まで夢中に駈け出し、ほつと溜息ついて胸を撫りました時、清が眼をむいて申しますには、お嬢様しつかり遊ばせ、ひどい奴で御坐います、いえ／＼怪しからん畜生で御坐います、貴嬢を、さんざ世話になつてる家の娘の御主人を畫に描きくさつて、觀物か何ぞのやうに、あいつ顔にも似合はない不埒な奴で、よろしう御坐います、これから寄つて直に叩き出してやります、畜生々と頻りに妙な手付をして譯の分らない事を申します

しなさだめ

から、よくく、氣を静めて聞いてみますと、三年ほど前に美術學校を卒業した書生さんで清が母親の二階に下宿して居る人が御坐いまして、いつか清にやつた妾の寫眞を、母親から無理に借り出して手本にしたのださうで御坐います、妾も一時は口惜しくつて、もし知れたなら物固い兩親の手前、また騒々しい學校朋輩の人達へも、それやこれやで涙が滾れるほど残念に思ひましたが、いくら騒いだつて今更ら外に仕様も御坐いませんから、兎も角も至急あの肖像を取退けるやう、清に言ひ含めて母親の家へ遣りましたものよ、妾の身とさへいへば丸で狂氣同然の清の事ですから、定めて遠慮會釋もなく頭上から其書生さんに噛み付いて、もし間違でもなければ宜いがと、實は心配して居りましたら、案の定、すぐ翌日、肖像の繪を此方へ取り上げた上に貴方、なんですよ、謝罪狀一通を添へて持つて歸りましたには、妾も呆れて、氣の毒やら恥かしいやら、しかし清は猶これでも得心が

ゆかないとて、しきりに母親へ迫つて其書生さんを追ひ出さうと致しますから、それだけは無理に引止めて、どうせ返すものよ一寸まア、どんな事を書いてあるかと、その謝罪狀を讀んでみましたのがホ、妾の、こんなになつた基で御坐います、だから今では清に對しても、なんといつて宜いやら、きまりが悪くつて、穴へも這入りたい心地が致します、そしてその時の謝罪狀は、かうで御坐いますよ、あのウ……左の手に浮世の貧といふものを握り右の手に美の神の宿るべき筆を持つて、あはれ日夜の難行苦悶に餘念なきまよ、おもはず禮を破つて、叨りに深窓を犯せし罪、そもく何をもて償はむ、されど、朝夕の丹青を賣つて美衣美食に飽くものさへ、一年一回の席場に自己が名を署して代價幾何を食る中に、かゝる可憐の貧生が數月の熱血を注いで僅に得たる一面の繪を、無名氏禁賣と大書して掲げし微意を汲み給はど、また世の畫家と自ら意志の殊なるを知り給はむ、因より

しなさだめ

多くの俗に見られ俗に傳へらるゝを好まざるがため、半歳の精華を驅つて一朝の小過に投ずること履を脱ぐよりも易し、否とよ、わが信する美界の常として禮を失せしにあらすと思へども、花の如き君が一擧に逢うては更に顔色なく、こゝに謹んで其罪を謝し併せて晝影を黷魂の許に還さむ、憫れむべし今や君が侍婢の入室は他日天下の晝太伯たる我をして夜寝るに家なからしめむとす、願はくは君の愛によつて侍婢の怒を慰め、雨露霜雪の難を免るゝを得ば幸甚……ねエ貴方、まア斯うなんで御坐いますよ、妾には其文章の妙を今こゝで言はれませんが、大體の意味は斯うで、そして字なんかの美事なこと、妾は實に、お氣の毒で、お可哀さうで、ねエ貴方、立つても坐っても堪りませんから、その謝罪状と妾の肖像に、失禮ですが、あのウ何です、帶止か指輪にしろつて父から貰ひました時計の金鎖を添へて、おわび申して返しましたら、その鎖を忽然またお戻しなさいましたから、

今度は清にたのんで、しかし清が、まだ憎まれ口をきいて、なか／＼承知してくれないんですもの、だからお世辭のありつたけ、いろ／＼たのんで、清の母親の手許へ送り届けました、貨幣になるなら貨幣にして、あの方に知れないやう、をり／＼何か、お好きな食を買つてあけてくれと、その後、ふとした事で清を誘ひだしオホ、今から思ひますと自分の大膽に呆れますが、ちよいと清の母親の家へ寄つて、はじめて其方を見ましたがね、色の淺黒い背の高い、お年は二十五六、ほんとに凛々しい男らしい方なんですよ、あの御様子では、こゝ四五年も経つと、きつと立派な美術家におなじなさいませう、ねエ貴方、……どうしても妾のやうな不束女は、家を持つて給料なぞお取んなさる方には、逆も氣に入りませんから、ならう事なら、あの方の様な、御修行中の人を……父に叱られるかも知れませんが、いえ、どんなに叱られても、この一念は徹す覺悟で御坐います、それ

しなさいだめ

に清も、此頃は、妾の心を、よつく飲み込んで居てくれますから、たしかで御坐いますよ、もし妾の思が叶つたら、生涯、清を大事にかけて姉様扱ひに致しますわ、姿の優しきだけに情の色も深く、言葉の靜なるだけに思ふ一念も強ければ、世に貧しう心に富める哀れの美術家を見立てよ、ならば陰ながら其貧を扶け其心を慰めつよ、人目しのびて運ぶ戀の重荷のかずく、やがて天晴の男に仕終せて後、おのが生涯を契りて立ちし浮名も賞められむとの用心堅固、むづかしくいへば逆に取つて順に守るの活氣、流石は當世の嬢様らしき氣風を備へて、おなじ氣儘の婿擇びにも何處やら人品を落さぬ節ありて、女一式、戀を生命の小説家などの手にかけてならば、羅織舞文意匠慘憺、なか／＼大層の品物となるべき類なり、これに引違へて庭の飛石に躓きながら慌たどしう入り來りし第三番は、びか／＼と襟垢の光りし雙子織を身に纏うて、おはれ唐繻子を羨む毛繻子の丸帶、それさへ今は處々に

巢を立てよ一重まはりの肥つてう、色くつきりと黒く生際おほるに薄く、出額に腫物の痕跡あつて夜著の袖口に似たる唇あつく、圓かなる狛の眼、いかれる獅子ッ鼻、胴より生え抜いたる猪首の太さ、兩の頬邊に日の丸の國旗を掲げて年が年中いつもお目出たき祭日面、さては頭の縮れ毛に鬚附油こきぬつて人知れぬ苦勞の悲しさ、霜燒の手足を痒さうに掻搔いて疊に擦り遣る瀬なさ、年は二十五六、うまれば丹波の奥山ならねど房州の外海あたりと覺しく、東京に來てから丸十年の下女奉公、しかも直接お主の傍へは出られぬ下女と見えて、おさん大明神、竈の前に鎮坐まし／＼つよ井戸端はしりもとに不斷の光明を放ち、喜怒の靈現あらたに忽ち飯の味を變へさせ給ふ御本體なるべし、但し此様でも叶はぬ戀するだけあつて、さすがに言葉は江戸ッ子を學びける、

第三番

しなさだめ

ちよいと貴方、御免なさいよ、妾とした事が、とんでもない、あまり多勢に押されたもんだから、大事のノ、寫眞をおつことして仕舞つたよ、どうせう、えよまよのかはだ、寫眞を失つても本尊がありやア大丈夫さ、ねエ貴方、時に妾の色男は、これまで七年の間に、たつた十三人しかありませんでしたよ、それ十三人も妾から惚れたなア一人もないの、悉皆あつちから小づきまはされて人助けに契情いてやつたんですから、骨の折れたことツてば、なか／＼首尾が面倒で、それがため御主人から暇の出たのは二十八軒、今なア二十九軒目で砂糖の間屋ですが、旦那が苦面で妻女が澁ッ皮と來てるから、あの寫眞の一件でも知れりやア直ぐ放逐だらうと覺悟して居ますよ、どうせ長くないから太く短く手取早く遣ッ付けやうと、此ごろア人の知らない苦勞でなりませんよ、え何です、寫眞の男ですか、これこそ妾から打込んだ眞實の色男で、同じ家の奉公人ですが、貴方に見せてあげたいよ、

年は三十二で、さうです、近ごろ口入屋から來た信州の産ですが、落語の寄席なんかでいふ權助たア憚りながら權助が違ッて居ますア、身體が達者で氣心が温順しくツて情があつて深切者で慈悲が深くて、そして貴方、堪らない勇み肌があるんですもの、誰が田舎者と見ますもんか、おそらく妾の亭主として國に連れて歸ッても恥かしくなからうと思ツてるんです、妾も今までの十三人に撈り取られたから、葛籠は蜘蛛の巢が張ッて著のみ著のまま何一個もありませんが、伯父が人車の三四臺も持ッて下谷に帳場をして居ますから、さアといやア五圓や七圓は出してくれませうさ、それに八九圓も足して十五圓ありやア世帯も持てるから、こよが一所懸命の瀬戸際、三尺港でえんやらさアの巖角でさア、ですがね、肝腎の男の心が未だ確然と分りませんから苦勞するんですよ、なるほど、此間も淺草の觀音様へ參詣したツて、あの寫眞を取ッて來てくれましたなア、同じ家に居ても目が多くツ

て自由にならないし、また人の嫉妬怨恨といふもなア怖いから、暫時の間だア、二人とも辛抱して居べい、もし顔が見たかア何時でも其寫眞を出して見ろといふのですから、まざら悪くもないと見えます、ねエ貴方、惚れない女に自分の寫眞なぞを呉れる譯なもんぢやアありますまいよ、そこで妾も一番うんと乘氣になつて、たつた十三人ぢやア女子に生れた甲斐もないが、まア此人を男の喰ひ收めとして、いよく彼男で身を固める覺悟なんです、行末うまく往きませうかね、なに賣卜者ぢやアない、御道理さま、これは失敬申しました、では貴方、かう打明けて言はれたのが災難で、なんかの縁と思つて陰ながら二人の事を祈つて下さいな、たのんますは貴方、お急しい、三番の鬨に當つたればこそ、もし運が悪くて最後に廻らうもんなら、すぐ曉方になつて足袋屋の看板、あの男と泣き別れになつたかも知れませんわ、さようなら、

おさん大明神、またもや歸りがけの庭の飛石に躓いて、大道白の出尻どつと轉びけむ、鷺鳥に似たる泣聲しほつて、ぎやアと叫びし後より入り來りし第四番は、年ごろ十七八、どこが美人と取立てゝいふべき節もなければ、すべての容態すらりと伸びて麗しく、色は眞白といはむより自然の垢ぬけに艶を含んで、髪の毛くろくくと解かば身丈にも餘らむを、島田は人目に立ちて、嫌とやら、わざと小さう差控へての新蝶々を、色好みの餘所目には嘸や戀知らずと惜しむらむ、起居振舞しとやかに態とならぬ風情を添へて、見苦しからねど天生の麗質には劣りし衣裳の古模樣、たど家にあるまよを今に用ゐて粧ひながら、あはれ年頃の娘氣に世上の華と見比べつゝ、をりく昔しのぶの袖の露、人知れぬ夜半の涙に口惜しき事ぞと泣きやせむ、されば飛鳥おとせし十年前の榮華を夢と見て幽に暮す人の子らしく、さりとして古河に絶えぬ水は流れて、まだ衣食の飢には迫らぬ舊家の秘藏、この娘一人に婿とるまでは残る

小道具賣拂うてなりとも、孤城落日を支へたき親の苦勞は一入なるべし、

第四番

妾のやうな女でも、お嫁にさへ仕てくたさいます方なら、兩親とも相談の上、どこへでも
まゐります……いえく決して男擇びの、また思ふ人のと、そんな、世間のお嬢様方
と違つて、そんな、お恥かしい氣儘などを申される身分では御坐いませんから、御縁さへ
ありやア、きつと其お人を大切にいたします、それとも萬一、もし叶ひますなら、妾の身
よりも、外に同胞も何にも御坐いませんから、いッそ兩親に目をかけて下さいます方を……
……父が常々申し聞けますには、お金といふものは幾何あつても貧乏する時はするもの
で、また、どんな貧しい暮をしても人は運と働き次第で善くもなれるから、決して家庫な
ぞに眼を著けるな、第一が男振より心振が肝腎で、世間體しツかりして内心やさしい氣立

でさへありやア、生涯苦勞しても手前の徳だからツて、こんなな申しますから、妾も、今
の身分に過ぎた方よりは、ちやうど似合の人を、何方が御覽なすツても、あまり目立たな
い夫婦だと、いはれたう御坐います、

なんとなく哀れにいちらしき此娘、あくまで其身を卑下して世に恥づるが如く見ゆれども、
さすがに昔の家筋を思うて心かるくしう持たず、結句どこやらに鼻頭の智慧ならぬ奥床し
さ、歸りがけの挨拶さへ柔和に女らしう、しづかに立去る影を燈火照らして見送れば、また
振り返つて慇懃に會釋する折しも、足取活潑に入り來る第五番は、毛絲の肩掛に學問の外な
る御手際の自慢まづ怖しく、瓦斯絲織の書生羽織に同じ縞柄の綿入一重、肌には何を召すら
む、この冬空に嘸やお寒からうといへば、いえ何ともないのよ、餘計なお世話様といひたけ
の面色、洗うて磨けば、まんざら捨てた物でもなければ、何分にも多年の間むづかしき道理

しなさため

に責められ給ひしかば、いつしか目付口元鼻筋も母父の譲りと違うて、怒れば忽ち喰ひ付きさうなる險しさ鋭さ、もとより頭髮は文明ぶりの大束髪、それも優形の美人が黒漆のやうなる髪ならば、また一際の高尙優美を添へて懐しけれど、頭髪なにかアどうでも宜いの、第一うるさくツて堪らないよと宣ふ上は是非もなき形となつて、さながら七月の井戸替にたぐりあけたる釣瓶繩の如し、年は十八九、或は二十歳にも届かむか、二十一二にもならむか、日夜吹き出る智慧にからまれて人間の年齢などは確と分らず、うすツべらの反り返りし唇を二文字に引いて、ゆるみかよりし向鼻緒に足の指の力加減、左手の風呂敷包は問はで知るべき六韜三畧、右の手を胸帯の間に入れて自然に備はる體操の身振、腰骨しやツきり踏ん伸ばしながら、戸口に立止ツて四邊見廻し、御免下さいといふ掛聲も弱からず、やがて入り來ツて座につくや否や無言の一禮、忽ち懷中より一葉の名刺を差出して、此時やうく始めて笑を漏らしぬ、さても今時の女學生といふもの、こんな御人體あればこそ國粹保存の古流家に卑しめられ、西洋がへりの紳士才物にさへ瓜彈きせられて、大道讀賣の乞食せぬが勝の女壯士とまでいはるゝを思へば、似て非なるものほど世に罪深きはなく、これを實に獅子身中の蟲ともいふべきか、味方だふしの糞味方、的の違つた最眞の引倒しに逢うては眞正の女學生こそ氣の毒なれ、

第五番

いつれ妾も女と生れたかぎりは、どうせ良人を持ちますがね、古來因襲の久しき東洋流の蠻風をうけて、百年の苦樂他人に倚るなつかといふ、なさけない、口惜しい、淺ましい、劣等なる獸慾の犠牲物たる事は嫌ですから、願はくは女の愛の露を吸収し、人間生活の靈藥と信ずる人、いや、それほどでなくツても、せめて男女同等の天分を辨へて、婦人は決

しなさだめ

して男子の玩弄物でないといふ位の人でなければ、眞平です、御免蒙ります、斷じて其男に良人たる名稱を捧げられませんわ、乃ち少くとも肉體の快樂を以て情交綿々の快樂に代へ得るだけの覺悟、ぢやアない、眞正の信實なくんば嫌ですわ、嫌ばかりぢやアない、たとひ假に強ひて彼が妻となつて遣つてもさ、逆も無効です、なぜつて貴方、毀れた器には方圓に随ふ水でも保ち得ませんもの、ですから、妾なんかア身を重んじて今しばし此まよで押し通す心算なの、いはゆる嫁期とか年頃とかいふ譯の分らない人爲の期限に迫られて、かるくしう大切の生涯を一朝に誤りたくないので、もしまた希望の上から言ひましたら、どうせ封建時代の舊慣が依然として頭腦の中にある兩親の目で、これが宜からう、苟も我子の生命を託する良人を選ぶに、宜からう位の薄弱な思慮から見立てた人は、やよ新鮮の空氣に育つた妾の氣に入らず、また先の氣にも入りますまいから、これは先づ固より

の無効として、こよに妾が選ぶ、選擇といはむより意氣相投じて互に一塊の肉となるべき一人の男ですね、その男は體格の立派な有髯の美大夫で、心は珠玉の如き玲瓏の愛を満身に湛へて、そして充分文明の高等教育ある人が希望です、職業の點は別に選びませんが、もし前途に多望なる外交官かなんかでありやア、なほ結構です、無論、財産も多きを願ひませんが、今日社會の程度からいへば、いつも自用人車の綱曳で少しの暇もないといふ人、ですから一步すよめば忽ち馬車に乗るものと思つて下さいよ、家は和洋折衷なぞと、そんな未練らしいことを言はずに純然なる歐羅巴風の建築で、生活も凡て彼地の通り、たまに良人の閑暇でもある時は、互に手を取つて公園なんかを散歩して、いつも新しい暖かい情交を樂しう受けて暮したいです、ですから、これを扶け之を慰むる妾がなけりやア、この良人たる人も今の劇職に堪へられないと言ひ、また妾も此良人なくんば、女としての

美を充分に發揮されないので、一の大なる幸福は常に二人の間を圓滿靜淑の宿として居る
ンです………や貴方ひどいことね、夢ぢやアないンですよ、眞實に然様おもツてるン
ですから………

神を良人に持ちたいと言はざりしは殊勝なれども、身の程しらぬ女の寒鳶、みだりに高く舞
ひ上ツて方角を失ひしまよ、天下また自己の外に婦人なしと思ひけむ、直に國家の盛衰を
荷ふべき外交官を擇んで獨極めの令夫人、うやむやの空中に歐羅巴風の大建築を企てよ、
しかも有髻の美丈夫でなくンば嫌、玲瓏たる珠玉の如き満身の愛をもて我を迎へずンば、決
して輕々しう妻になンかなツて遣らないよと、宛ら天女の下界に降ツて人間に嫁するが如き
御託宣、それも一世に秀でし才色雙美の尤物ならば兎も角、また系統なくとも眞正なる高等
の教育うけし女學生ならば知らぬこと、但し人品を缺けども位置相應の家に生れし女ならば

知らぬこと、かよる生學問の端を嚙ツて毛絲の肩掛がす織の綿入一枚で二十齡を越ゆるまで
體操身振に彷徨く女の身として、づうくしくも念頭常に斯る大望を抱くに至ツては、憫れ
むべし殆ど癡狂院の物たるを免れざるべし、かつその去る時に臨ンでは天晴れ大議論を吐い
たりといふ勢ひ鼻の先にぶらついて、田舎芝居の六方踏むが如く、ピンしヤンとして出で行
きしまよ、待てどもく其次の來らぬを、何故ぞと燈火かよけて障子引き開れば、いつの程
にか縁端に一封の女書ありて、第六番と記せる觀世捨の鬮を添へたり、

第六番

御めもじの上にて思ふ男の事を申し上げ候は何とやら面恥氣に存じ候まよ、あらく拙き
筆にはせまるらせ候、言葉の足らはぬところは幾重にも御判じ下されたく念じ上げ候、
さて妾こと幼少の頃に父を喪ひ候へども、母は聊か筋目よき家よりまゐり候ものにて、

しなきだめ

幸ひ里方を力草に母子二人やうく人並に暮し居り候うち、四年以前に母の里兄も死去いたし候後は、たゞ親類と申す名ばかりにて、いつとなう往來も絶え絶に頼みも薄く、さりとて外に世渡る道も辨へず候へば、いろく涙をしほり候上にて、覺束ながら妾の身に習ひ覚え候挿花抹茶の外に琴の一曲を兎も角も身過の業といたし候ものよ、かりにも身のために學びし僅の藝もて其日を送る飯の種に致し候はむとは、夢さらく思ひもよらぬ事と今更ら悲しく口惜しき事に存じ候、かつは妾も其時やうく十九にて候へば一入恥かしう存じ候、さりながら人は物に馳れ易きものにて、ことし二十三の唯今にては、さして始めほどの辛き思ひもなく、たゞ淺ましき埋れ木の身と諦め候うちにも、いつまで行末かくて獨身にもまゐりかね候まよ、人しれず身に相應の縁もがなと、よりくの便りに餘所ながら心掛け居り候、それにつき斯く申し上げ候は何とやら蓮葉の得意顔にも聞え候へど

も、これまで四年の間に不束の妾をも女と思召され候うてや、かれこれ仰せ下され候方は凡そ十餘人もおはし候ひしが、いづれも下世話に申す長し短き縁にて、中には位高き御方に唯一時の花と詠められ候氣遣ひもありて、かたぐ母も妾も共々に情しらすの名を唄はれまゐり候今更、なまじひの榮華も好もしからず、さりとして餘り卑しき處へも行き難く、ほとく困じ果て候折柄、琴の指南いたし候弟子達のうちの兄御にて、去年の春、英國より歸朝いたされ候方お年は三十一とやら、いつのまに妾を御覽せられ候や、人の掛橋もて頻りに言ひ寄られ候へども、はやく我國の學士號をうけられ候上なほ大學院の業をも卒へて洋行遊ばされ、また新にかすくの名譽を荷うて歸朝いたされ候へば、旭の御勢ひ近きうち高官にも上られ候ほどの風聞ある方様へ、何事の心得もなき日蔭女の妾風情は、よしや一時の御氣に入り候とも、所詮行末までの思召に叶ひまじき事と諦め、

しなさだめ

言葉の行き違ひなきやう其よし妹御へ直接に御返事いたし候處、何故にや以前にまして重ねく、俄の御申し越しに、あまり勿體なきほどの仰せ、もとより妾も唯この身を賤しめての御返事にて、眞實内心なばうか嬉しき幸福に御坐候へば、御情の切なきに我を忘れて果は恥かしながら此方より思ひも募り候折節、なんの怨恨ありての事に候や、ある新聞紙上に互の間を事々しう書き立てられ候、それも唯ありのまゝに筆を加へて面白う書かれ候戀のみならば、いまだ清き身の何の觸りも御坐なく候へども、かなしや妾を今に始めぬ高等地獄とやらに言ひ枉げ、また其方様を洋行歸りの自墮落紳士とまで書き貶して、互に賤しき汚らはしき獸の野合めいたるやうに、それはく、身も世もあらぬほどの口惜しき冤罪を著せられ候段々、憚りながら御あはれみ下されたく候、それにつき妾の身に思ひ當り候事は、これまで四年の間に折角の御情を餘所々々しうせし十餘人の人達より

ならぬ戀の仇とやらを報いられ候かと存じ候外は更に何の心附もなく候へども、彼方様の身に取りては儲も深き故障と聞き及び申し候、それは曾て大學院より洋行なされ候時、ある高官の御老輩にて取別け御世話遊ばされ候上、今度の歸朝を待ち受けて我嬢様を娶せなほも一入に取持たむものと思ひ込まれ候委細の事を、かねてより羨ましく妬ましく心得候人々が、をりしも妾の事を侍伴に斯る謀企の穴に突き入れて、何事も打破り候上その御出世を防がむとの野心に外ならじと、承り候時の妾の悲しさ辛さ腹立たしさ、我身の無念も打忘れて唯々御氣の毒に堪へず候、さりながら、それほどまでの義理合かつは萬事の御都合よき幸運を振り捨てよ、わざく賤しき妾風情を斯程に思召され候事、今更のやうに嬉しく勿體なく冥加おそろしく、その御心のみにて妾一身の本望に御坐候まよ、あらためて思ひきり遊ばされ候やう、しみく御意見申し上げ候へども、世の諺にいふ悪